

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第162集

岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書
第 6 分 冊
(総 括)

2023

岐阜県文化財保護センター

ぎふけんこだい ちゅうせいじいんあとそうごうちょうさほうこくしょ
岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書

第 6 分 冊
(総 括)

2023

岐阜県文化財保護センター



揖斐川町横蔵寺旧境内 本堂跡・池（北から）



揖斐川町横蔵寺旧境内 池（南西から）

巻頭図版 2



揖斐川町横蔵寺旧境内 本堂跡（南から）



揖斐川町横蔵寺旧境内 塔跡推定地（東から）

第 6 分 冊 目 次

第7章 内容確認調査等の成果

第1節 龍渓寺跡内容確認調査	1
第2節 龍渓寺跡出土炭化材の自然科学分析	11
第3節 横蔵寺旧境内地形測量・遺物分布調査	13
第4節 寿楽寺廃寺跡内容確認調査・太江区内遺物分布調査	20
第5節 寿楽寺廃寺跡出土土製品の元素マッピング分析	36

第8章 各論

第1節 他地域との比較からみた岐阜県の古代寺院	41
第2節 岐阜県における中世寺院遺構の展開	47
第3節 文献からみた古代・中世の寺院	59

第9章 総括

第1節 調査の意義と成果	71
第2節 県内古代・中世寺院の概観	71
第3節 県内古代・中世寺院の様相	73
第4節 今後の課題	87

参考文献

地名一覧表

年号一覧

写真図版

挿図目次

図 1 龍渓寺跡 調査坑の位置	2	図 25 寿楽寺廃寺跡出土遺物 (2)	
図 2 龍渓寺跡 TP 1・2周辺測量図	3	太江区内分布調査採集遺物 (1)	33
図 3 龍渓寺跡 TP 3周辺測量図	3	図 26 寿楽寺廃寺跡出土遺物 (3)	
図 4 龍渓寺跡 TP 1 遺構図	4	太江区内分布調査採集遺物 (2)	34
図 5 龍渓寺跡 TP 2 遺構図、出土遺物実測図	5	図 27 寿楽寺廃寺跡石塔実測図	34
図 6 龍渓寺跡 TP 3 遺構図	6	図 28 寿楽寺廃寺跡石塔位置図	34
図 7 龍渓寺跡 巨石周辺測量図	7	図 29 元素マッピング分析結果および 偏光顕微鏡写真【土製品】	38
図 8 龍渓寺跡石塔位置図	9	図 30 元素マッピング分析結果および 偏光顕微鏡写真【塑像】	39
図 9 龍渓寺跡石塔実測図	10	図 31 (仮称) 大滝寺跡	48
図 10 曆年較正結果	12	図 32 金勝寺	48
図 11 横蔵寺旧境内 地形測量位置図	13	図 33 大知波峠廃寺	48
図 12 本堂跡・池 地形測量図	14	図 34 長命寺	51
図 13 塔跡 地形測量図	15	図 35 直線道路を持つ寺院の分布	51
図 14 仁王門跡 地形測量図	15	図 36 円鏡寺・西順寺(寺内)周辺地籍図	53
図 15 横蔵寺旧境内 遺物分布状況	16	図 37 永源寺(上)・識虛庵(下)	55
図 16 横蔵寺旧境内採集遺物	17	図 38 蓮華峯寺観音菩薩像	60
図 17 横蔵寺所蔵遺物	18	図 39 瑞浪市桜堂(法明寺)鳥瞰図(南西から、 瑞浪市教育委員会提供図に加筆)	62
図 18 寿楽寺廃寺跡・太江遺跡 調査坑位置図	21	図 40 箕をもって巡礼する僧たち (13世紀半ばごろ)	69
図 19 寿楽寺廃寺跡 TP 1 遺構図	22	図 41 岐阜県古代・中世寺院分布図	92
図 20 寿楽寺廃寺跡 TP 2・TP 5 遺構図	23	図 42 岐阜県古代寺院分布図	93
図 21 寿楽寺廃寺跡 TP 3・TP 4 遺構図	25	図 43 岐阜県中世寺院分布図	94
図 22 TP 4-SK 5 遺構図	26		
図 23 飛騨市古川町太江字猪谷周辺 採集遺物分布	31		
図 24 寿楽寺廃寺跡出土遺物 (1)	32		

表目次

表 1 龍渓寺跡石塔類観察表	9	点数一覧表	30
表 2 測定試料及び処理	11	表 7 太江区内分布調査採集遺物点数一覧表	30
表 3 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果	12	表 8 寿楽寺廃寺跡石塔類観察表	34
表 4 横蔵寺旧境内分布調査採集遺物観察表	19	表 9 寿楽寺廃寺跡内容確認調査出土 土器観察表	35
表 5 横蔵寺所蔵遺物観察表	19	表 10 寿楽寺廃寺跡内容確認調査出土	
表 6 寿楽寺廃寺跡内容確認調査出土遺物			

土製品観察表	35	表 23	寺院関連地名一覧表（3）	97
表 11 太江区内分布調査土器・土製品観察表	35	表 24	寺院関連地名一覧表（4）	98
表 12 寿楽寺廃寺跡出土金属製品観察表	35	表 25	寺院関連地名一覧表（5）	99
表 13 分析対象	36	表 26	寺院関連地名一覧表（6）	100
表 14 半定量分析結果【土製品】	37	表 27	寺院関連地名一覧表（7）	101
表 15 半定量分析結果【塑像】	37	表 28	寺院関連地名一覧表（8）	102
表 16 美濃国定額寺一覧	44	表 29	寺院関連地名一覧表（9）	103
表 17 美濃国守護土岐氏関係の禅宗寺院	57	表 30	寺院関連地名一覧表（10）	104
表 18 県内寺院の成立状況	90	表 31	寺院関連地名一覧表（11）	105
表 19 時期別の成立数等	90	表 32	寺院関連地名一覧表（12）	106
表 20 時期別の立地数	91	表 33	寺院関連地名一覧表（13）	107
表 21 寺院関連地名一覧表（1）	95	表 34	年号一覧（1）	108
表 22 寺院関連地名一覧表（2）	96	表 35	年号一覧（2）	109

挿写真目次

写真 1 龍渓寺跡六字名号	1	写真 2 龍渓寺跡巨石下現況	8
---------------	---	----------------	---

写真図版目次

卷頭図版 1 摂斐川町横蔵寺旧境内 本堂跡・池	図版 8 地形観察図作成寺院跡【西濃圏域 5】
摂斐川町横蔵寺旧境内 池	図版 9 地形観察図作成寺院跡【中濃圏域 1】
卷頭図版 2 摂斐川町横蔵寺旧境内 本堂跡	図版 10 地形観察図作成寺院跡【中濃圏域 2】
摂斐川町横蔵寺旧境内 塔跡推定地	図版 11 地形観察図作成寺院跡【中濃圏域 3】
図版 1 龍渓寺跡内容確認調査	図版 12 地形観察図作成寺院跡
図版 2 横蔵寺旧境内測量調査	【中濃圏域 4・東濃圏域 1】
図版 3 寿楽寺廃寺跡内容確認調査	図版 13 地形観察図作成寺院跡【東濃圏域 2】
図版 4 地形観察図作成寺院跡	図版 14 地形観察図作成寺院跡【飛騨圏域】
【岐阜圏域・西濃圏域 1】	図版 15 遺物（1）
図版 5 地形観察図作成寺院跡【西濃圏域 2】	図版 16 遺物（2）
図版 6 地形観察図作成寺院跡【西濃圏域 3】	図版 17 遺物（3）
図版 7 地形観察図作成寺院跡【西濃圏域 4】	図版 18 遺物（4）

第7章 内容確認調査等の成果

第1節 龍渓寺跡内容確認調査

龍渓寺跡は、中津川市苗木に所在する。平成30年度に3箇所の調査坑（TP1～TP3、図1）を設定し、内容確認調査を実施した。TP1は名号のある巨石の西側に、TP2は同巨石の南西側に広がる平坦面に、TP3は方形に加工された花崗岩が規則的に点在する箇所に設定した（図2・3）。なお、発掘作業における基準点測・地形・調査坑の測量、掘削作業の支援業務は株式会社イビソクに委託し、遺構・遺物の実測、写真撮影は岐阜県環境生活部文化伝承課及び当センターが実施した。

各調査坑はすべて人力により掘削した。遺構は埋土の堆積状況を把握するためのトレンチを設定し、最小限の掘削にとどめた。遺構等の実測は、手計り測量にて、実測図を作成した。図面の縮尺は、20分の1を基本とした。写真撮影は、35mmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。

TP2から出土した炭化材の放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

出土遺物の洗浄や注記などの一次整理作業及び遺物実測や挿図作成等の整理等作業は、令和元年度に当センターが実施した。なお以下に、各調査坑の調査成果についてまとめる。

（1）TP1（図4）

調査目的 TP1の設定地は巨石の名号直下で、石塔の部材等が散在していた場所である。部材の下の腐植土を剥がしたところ、五輪塔地輪や宝篋印塔基礎の上面を5基分確認し、それらは原位置を保っている可能性があると判断した。原位置を保つ石塔下の遺構内容を確認する目的で、南北4m×東西2mのTP1を設置した。

遺構 基盤層（6層）は花崗岩風化土である。調査坑の北部は南に向かって傾斜するが、中央～南部は標高378.45～378.62mで傾斜が緩やかである。地輪及び基礎はすべて、この安定した範囲に分布していた。基盤層上面で遺構の検出を行ったところ、調査坑の東半で土坑1基（SK1）、北西隅で攪乱を確認した。土坑の規模は、長径2.72m、短径0.82m以上、深さ0.11mである。SK1埋土は2層に分層でき（4・5層）、地形の傾斜に沿って堆積し、4層の上面には少量の円礫が散在していた。SK1の中央部、5層上面に花崗岩製五輪塔の地輪（図8-3）を正位で据える。この地輪の上面には被熱した痕跡が認められた。SK1内には、この地輪の他にも宝篋印塔の基礎の一部が埋土中に含まれていた（図8-7・8）が、基礎の上面が南東に向かって下がる点がSK1の外側に据えられた石塔基礎（図8-4・6）と類似することから、SK1には伴わないと判断した。SK1外に位置する3基の石塔基礎は、その上面が南東に向かって下がり、基盤層から0.03～0.08m浮くことから3層上面に据えられたと判断した。いずれの石塔にも下部構造は確認できない。SK1の規模は五輪塔1基に伴う下部構造としては規模が大きく、埋土中から遺物や骨片が確認できない。



写真1 龍渓寺跡六字名号

2 第7章 内容確認調査等の成果

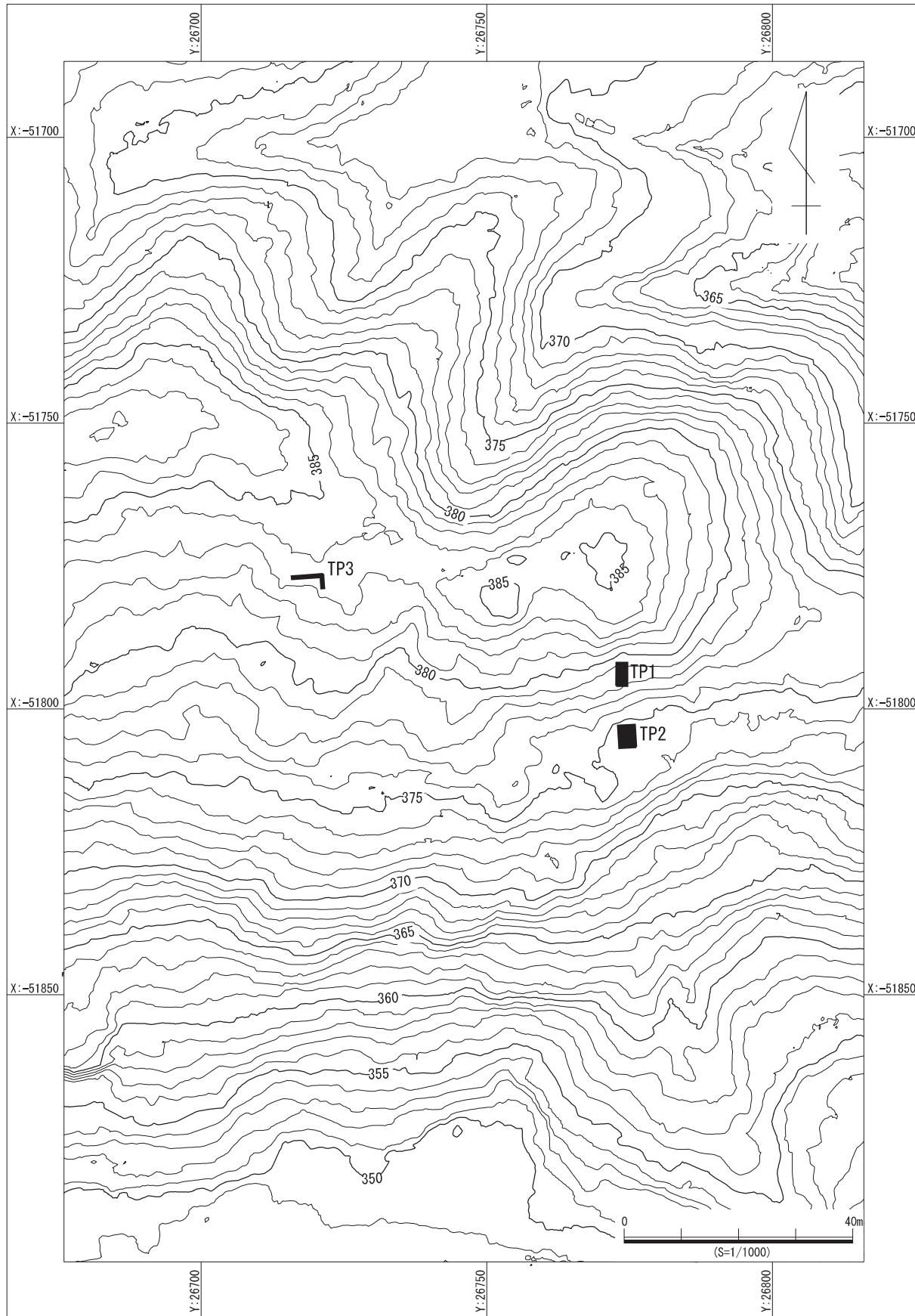


図1 龍渓寺跡 調査坑の位置

かったため、その機能は不明である。

出土遺物 TP 1 からの出土遺物は少なく、攪乱埋土である 2 層から近代磁器 1 点、3 層中から近代の御神酒徳利 1 点が出土したのみであり、図化していない。石塔について詳細は後述するが、SK 1 に伴わない地輪・宝篋印塔基礎（図 8-4・6～8）は、時期の判明するものは 16～17 世紀で、3 層上面に正位で据えられている。少なくとも、SK 1 南端の 1 基（図 8-8）と SK 1 西側の 2 基（図 8-4・6）については近代にこの場所に移され、再設置されたと考えられる。SK 1 の所属時期が SK 1 内に据えられた五輪塔（図 8-3）の時期と大きくかけ離れていないとすると、TP 1 を設定したこの平坦面は中世には墓域として認識されていた可能性がある。

（2）TP 2（図 5）

調査目的 TP 2 の設定地は、巨石が露頭する間の最も広い平坦面に当る。建物跡又は祭祀遺構の有無の確認と、TP 1 から TP 2 にかけての土層堆積状況や遺構検出面の連続性を把握する目的で、立木及び小祠石積基壇を避けた掘削可能な範囲に南北 4 m × 東西 3 m の調査坑を設定した。

遺構 基盤層（6 層）は花崗岩風化土で、この上に整地土（4a・b 層）が堆積することを確認した。整地土は、基盤層を最大 0.09m 堀り込み（c-c' 断面）、にぶい黄褐・黄橙色土を盛土している。整地土の上面で、東西方向の石列 5 石の上面とそれ

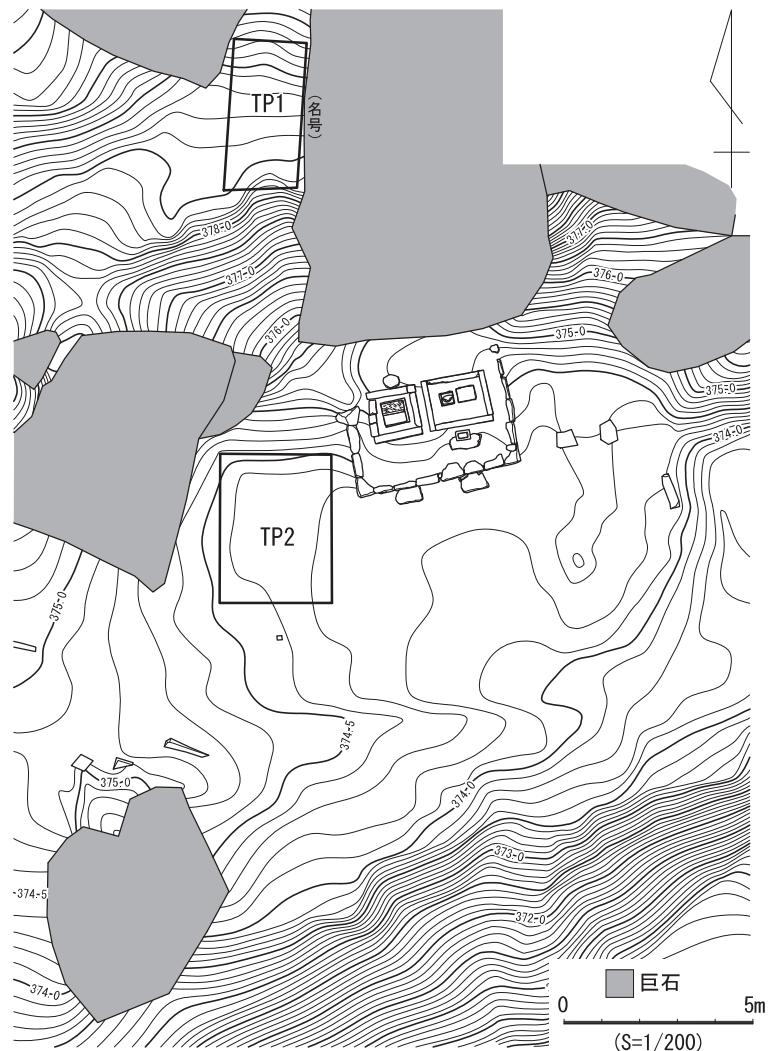


図 2 龍溪寺跡 TP 1・2周辺測量図

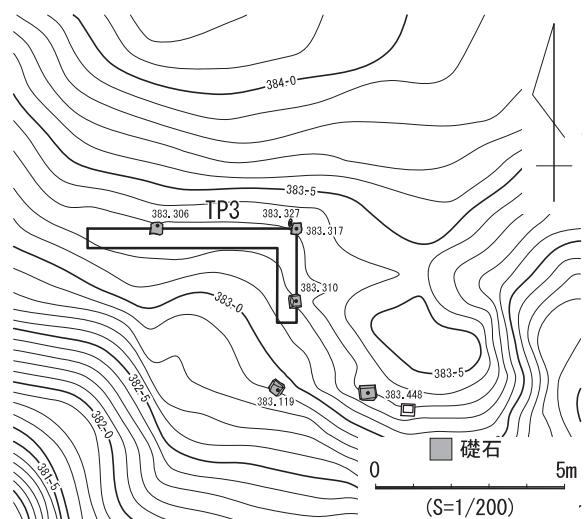


図 3 龍溪寺跡 TP 3周辺測量図

4 第7章 内容確認調査等の成果

に直行する南北方向の石列2石の上面、小土坑P1～P6を検出した。整地土は、東西方向の石列を境に南北で土質が異なり、d-d'断面での土層観察の結果、石列内（南）側の整地（4b層）を行った後、石列外（北）側の整地（4a層）を行っている。石列を構成する石材の材質は一定ではなく、円礫と角礫が混在する。石列は据付掘方を設けないため、石列中のP3～P6は石材の抜き取り穴と考えられる。東西方向の石列は北側に面を揃えており、石列の方方位N-74°-Eは巨石前的小祠が乗る石積の南辺と方位が一致する。

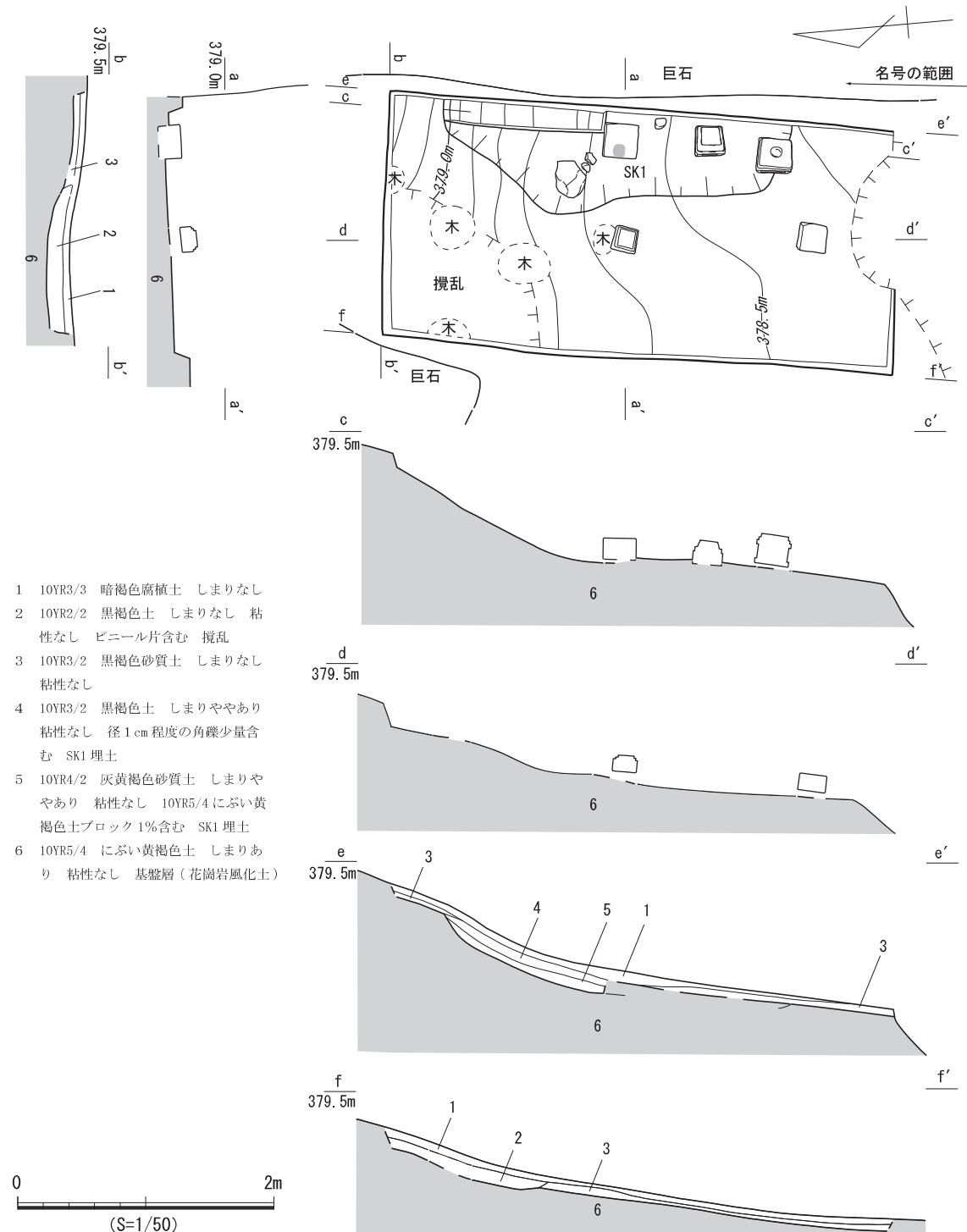


図4 龍溪寺跡 TP1遺構図

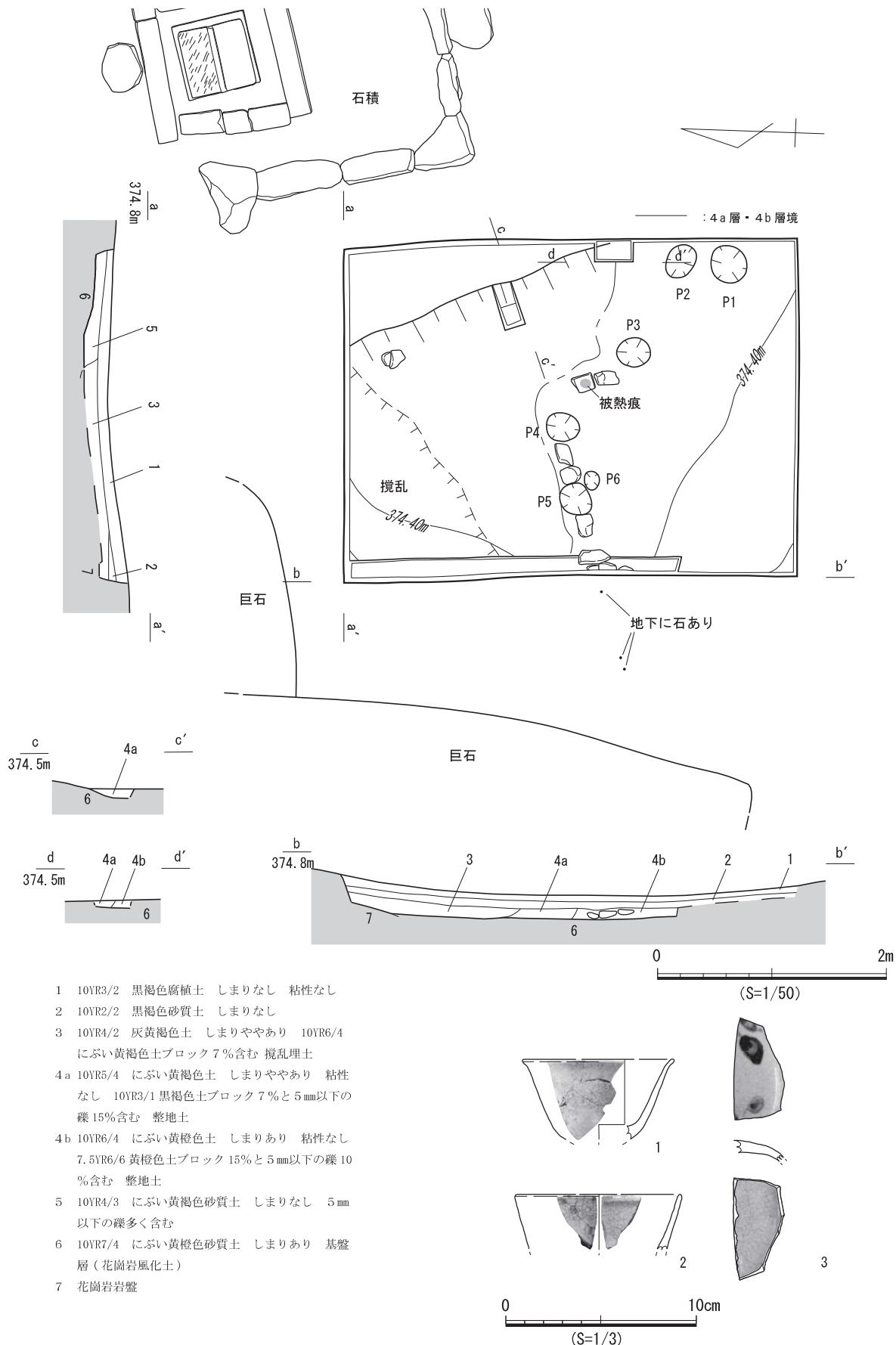


図5 龍溪寺跡 TP 2 遺構図、出土遺物実測図

6 第7章 内容確認調査等の成果

また、東西方向の石列は調査坑の西側へ続くため、ピンポールを用いて地表下の石材の当りを確認したところ、石列は調査坑外へ 0.75m 程直線的に続く可能性がある。南北方向の石列の北部の石材上面に被熱痕を確認した。また、P1・P2 の埋土上面に焼土ブロックと炭化材を含んでいた。この炭化材の放射性炭素年代測定法を実施した結果、P1 採取炭化材のは江戸時代中期～昭和時代、P2 採取炭化材のは江戸時代前期～昭和時代を示した（2節参照）。龍渓寺は、明治維新の廢仏毀釈で焼き払われたため、P1 及び P2 で出土した炭化材はその際のものと思われる。

整地土の掘方と直行する南北方向の石列は、巨石前の石積の軸線の方位とほぼ一致し、この平坦面では同一の軸線を意識して土地利用を行っていたことが明らかになった。しかし、石列の規模は建物跡としては小規模であり、整地の目的や施設の性格については不明である。

出土遺物 2・3・5 層から、近世～近代の陶磁器及び近代の瓦片が出土した。どの層にも近世～近代の遺物が混在している。出土したのは小ぶりな製品ばかりであり、墓に供えた仏具類として使用されたものの可能性がある。このうち、近世に所属する遺物について図化を行った。1 は、瀬戸・美濃系陶器の端反碗で、口縁部から胴部の破片である。2・3・5 層中から出土した破片が接合した。外面に呉須絵がみられる。所属時期は 19 世紀頃である。2・3 は瀬戸・美濃系陶器の太白手である。2 は、3 層中から出土し

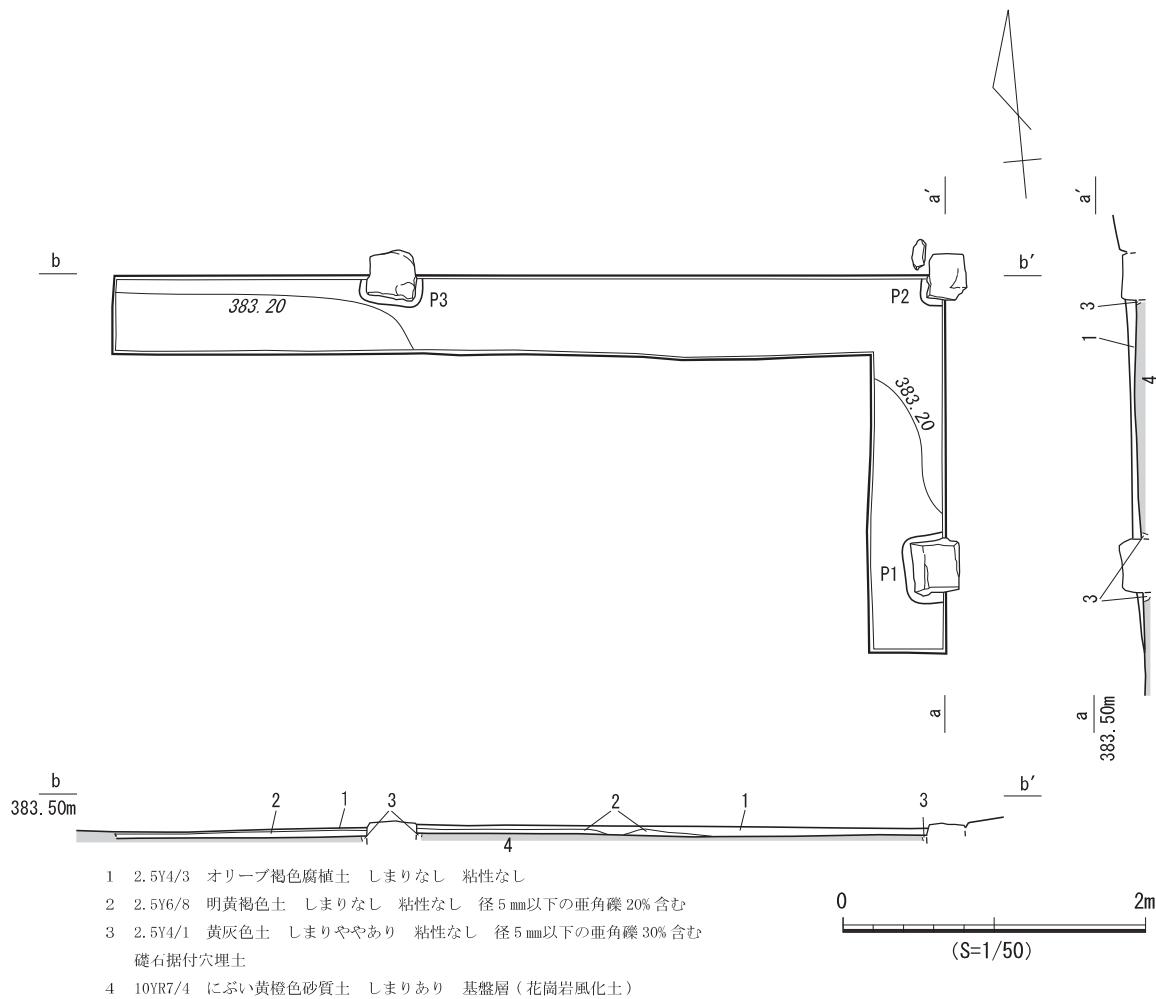


図 6 龍渓寺跡 TP 3 遺構図

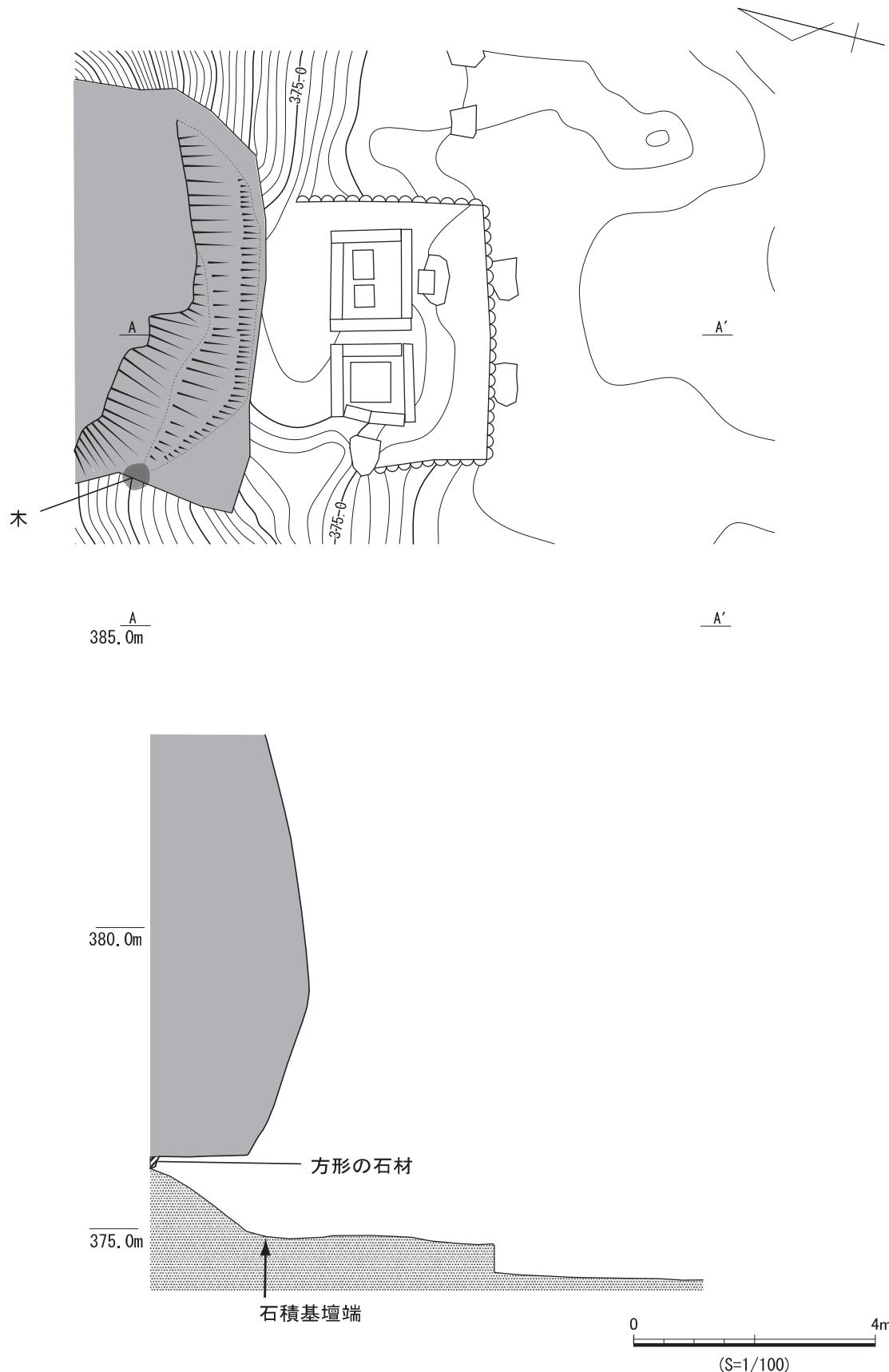


図7 龍溪寺跡 巨石周辺測量図

た広東茶碗の口縁部で、内外面に呉須絵がみられる。3は、5層中から出土した蓋の天井部で、外面に呉須絵で花文を表現する。2・3の所属時期はともに19世紀後半である。整地土4a・b層からの出土遺物はなく、整地の時期は不明である。

(3) TP3(図6)

調査目的 TP3の設定地は、基盤の花崗岩が露出した緩やかな傾斜地にあたる。方形に加工された花崗岩製石材が規則的に存在していたため、礎石の可能性があると判断し、3点の石材をかけた幅0.5m、総延長6mのL字の調査坑を設定した。

遺構 基盤層の花崗岩風化土(4層)の上面で、各石材に伴う礎石据付穴(P1～P3)を検出した。P1～P3は、石材の大きさに合わせた平面方形であると思われる。石材上面に柱のあたりは確認できないが、石材上面の中心の標高はいずれも383.32mで安定している。石材同士の間隔は、石材上面の中心部で計測した場合、P1～P2は1.9m、P2～P3は2.3mである。同様の柱間で礎石が存在するか、ピンポールを用いて地表下の石材の有無を確認したが確認できず、建物の規模は不明である。しかし、P1～P3に伴う石材とほぼ同じ規格の花崗岩製石材がTP3の周囲に散見される。P1の南南東1.9m及び南東2.6mにある石材は柱筋から外れ、TP3南側の傾斜下に同じ規格の石材を1点確認し、これらは原位置から外れていると考える。

出土遺物 TP3からの出土遺物はなく、礎石建物の時期は不明である。しかし、P2北側の地表面には棟瓦を含む瓦片が散在しているため、近世以降の建物跡の可能性がある。

(4) 名号のある巨石下の窟について(図7)

TP1東側の名号のある巨石の下部はオーバーハングしており、現況で幅5.5m、高さ1.2m、奥行き1.5mの空間がある。この場所の天井部は平坦で、空間の奥に当たる巨石と地面との接地部分には形の整った立方体の石を人為的にかませている。座禅等を行うための窟として利用していた可能性があるが、巨石の周辺では闘伽水や貯水を行った地点は確認できなかつた。巨石下の空間が修行場として利用されていたとすれば、祭祀行為の場が、窟から巨石前の平坦面へ移動したと考えられる。



写真2 龍渓寺跡巨石下現況(南から)

(5) 龍渓寺跡の石塔(図8・9)

龍渓寺跡の石塔の部材は、名号が刻まれた巨石の西側、同南側の近世以降の祠周辺、山腹の平坦面などで確認した。特に名号が刻まれた巨石周辺で多く確認でき、その数は、五輪塔の地輪2点、水輪5点、火輪5点、空風輪4点、宝篋印塔の基礎4点、笠4点、合計24点であり、宝篋印塔の塔身と相輪は確認できなかつた。また、山腹の平坦面では五輪塔の水輪1点、火輪1点などを確認したが、地中に埋まっている状態で確認したものもある。このうち、各部材のセット関係がある程度推定できる五輪塔(図8-S1～S3。以下、番号は掲載番号を示す。)やTP1の現地調査にて平面図上に図化した石塔及びその関連部材(S4～S8)、名号が刻まれた後に造立された六十六部供養塔(S9)を図示した。

S1～S3は花崗岩製五輪塔であり、梵字の有無や連結面の大きさなどからセット関係を想定した。S1は梵字が各輪の四面に陰刻される。水輪は最大径が中央付近に位置し、火輪は軒下辺が直線的で軒端

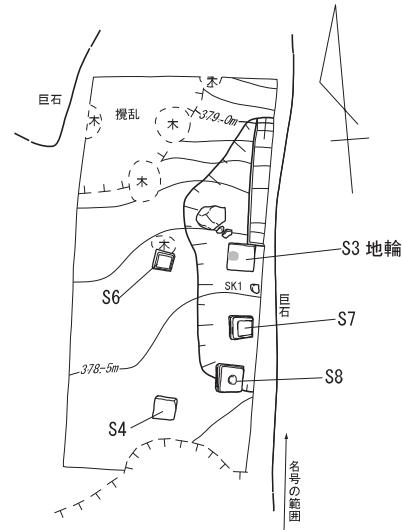
で緩やかに反り上がり、空輪は宝珠形を呈する。S2・S3 は梵字が刻まれておらず、S3 の地輪は TP 1 において上面を検出し、トレンチ調査で高さのみを確認した。いずれも水輪の最大径が中央やや上に位置し、火輪の軒下辺の直線部分が少ない。なお、S3 は水輪上面に深さ 3.8 cm の納骨穴がある。S4～S6 の石材は多孔質で暗灰色を呈し、表 1 では「安山岩か」としたが玄武岩の可能性もある。S4 は五輪塔の地輪で、上面は平坦である。S5・S6 は宝篋印塔であり、S5 の笠は下二段、上五段で、隅飾は二弧素面であり、S6 の基礎は素面で上段は段形である。S7 は花崗岩製宝篋印塔の基礎であり、輪郭内は素面で、上段は繰方座風である。S8 は凝灰岩製の宝篋印塔基礎であり、素面で上段は段形であり、上面中央に枘孔を有する。S9 は駒型の六十六部供養塔である。全体形は五角形を呈し、側面形は扁平である。正面中央に窓、下部に蓮華座を配し、窓は一段彫り窪め、その上部は一度湾曲してから再び立ち上がって湾曲し、頂部に突起を有する。窓には「寛政十二庚申年／六十六部供養塔／七月二十九日」と刻まれ、「六十六部供養塔」の文字内には黒色有機物が付着している。また、側面に「日比野村施主等欽立之」、背面には一段彫り窪めて「行者／下総國相馬郡松下村稻葉庄尤衛門」と刻まれている。

これらの石塔の製作年代は、次のとおりである。S1 は空輪の宝珠形の下間に屈曲部があり、このような特徴は 14 世紀中頃から後半以降に認められる（狭川 2011）。また、S2・S3 は火輪の形態に均質さを欠き、空輪が縦長であることから、15 世紀以降の年代が考えられる。安山岩製・凝灰岩製宝篋印塔の年代は比較資料がないため不明であるが、S7 は輪郭の幅が広く、輪郭内に格狭間がないことから 16 世紀以降と考えられる（小野木 2012）。また、S9 は寛政 12（1800）年の紀年銘が刻まれている。

表 1 龍溪寺跡石塔類観察表

No.	石塔名	部位	大きさ		石材	遺存状態
			最大幅	高さ		
S1	五輪塔	空風輪	21.3	25.4	花崗岩	ほぼ完存
		火輪	35.6	22.3	花崗岩	ほぼ完存
		水輪	28.0	26.8	花崗岩	完存
S2	五輪塔	空風輪	20.2	28.7	花崗岩	ほぼ完存
		火輪	32.5	20.6	花崗岩	ほぼ完存
		水輪	33.5	27.2	花崗岩	完存
S3	五輪塔	空風輪	15.6	21.5	花崗岩	完存
		火輪	25.0	17.9	花崗岩	完存
		水輪	27.2	21.5	花崗岩	完存
		地輪	26.0	17.0	花崗岩	不明
S4	五輪塔	地輪	21.0	12.8	安山岩か	完存
S5	宝篋印塔	笠	(19.3)	(15.0)	安山岩か	隅飾り欠損
S6	宝篋印塔	基礎	19.0	15.0	安山岩か	ほぼ完存
S7	宝篋印塔	基礎	22.0	18.0	花崗岩	ほぼ完存
S8	宝篋印塔	基礎	28.0	23.0	凝灰岩	ほぼ完存
S9	六十六部供養塔	塔身	25.6	65.5	花崗岩	ほぼ完存

*高さに柄は含まない。



*S1, S2, S5, S9 と S3 の水輪より上位は TP 1 の地表面に散在していた。

図 8 龍溪寺跡石塔位置図

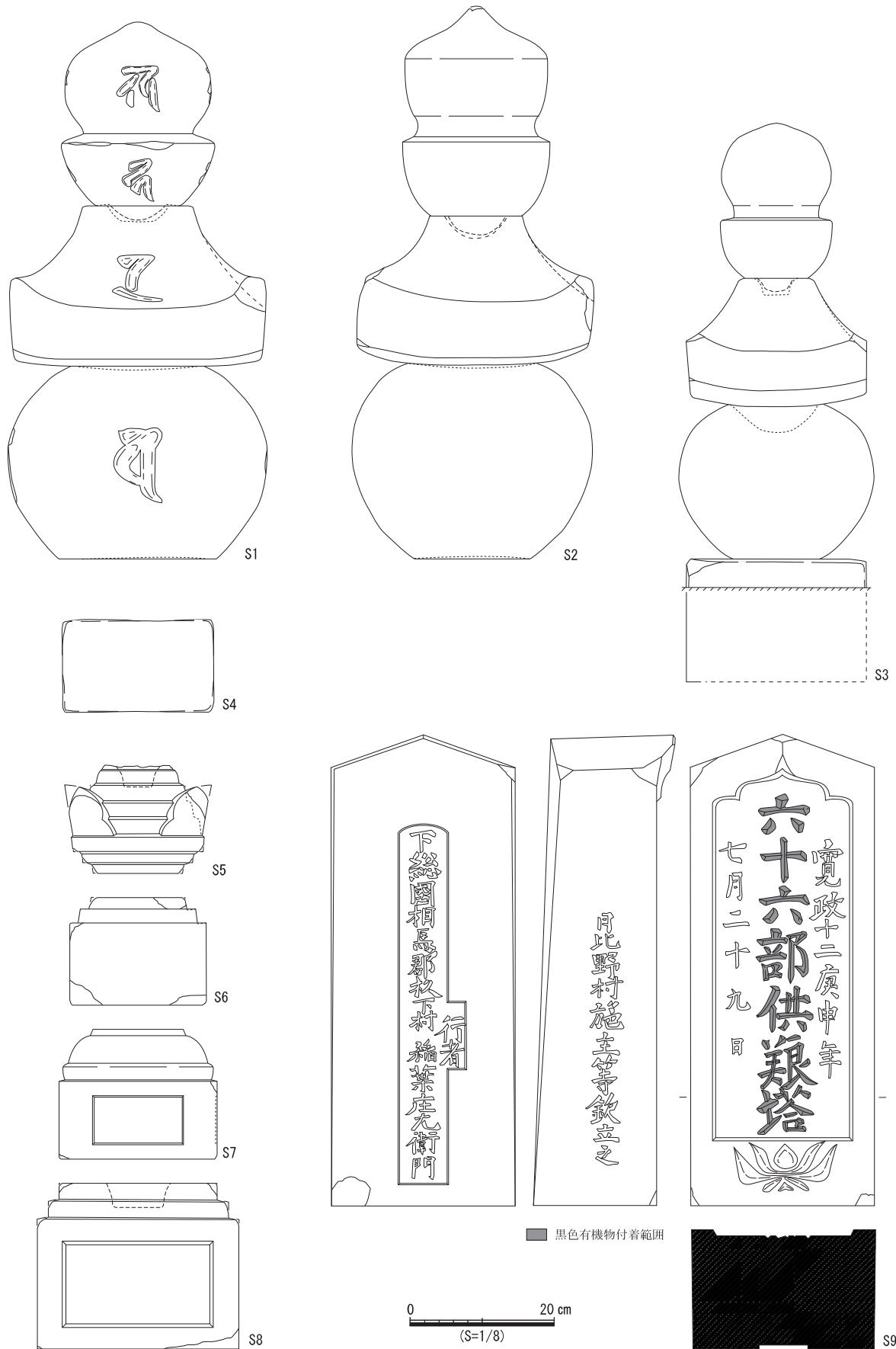


図9 龍溪寺跡石塔実測図

第2節 龍渓寺跡出土炭化材の自然科学分析

1 分析の概要

TP 2 で検出した整地土の上面で石列及び小穴 P 1 ~P 6 を検出し、P 1 及び P 2 の埋土上面で炭化材を確認した。周囲を巨石で囲まれた TP 2 の位置から、炭化材は護摩焚等の祭祀行為を行った痕跡の可能性があると考えた。また、整地土において遺物が出土しなかったことから、炭化材の分析により整地土が機能した時期を確認する目的で、放射性炭素年代測定分析を行った。なお、炭化材片は極小のため、樹種同定分析を行うことはできなかった。

分析の結果、P 1 は江戸時代中期～昭和時代、P 2 は江戸時代前期～昭和時代の遺構であることが判明した。龍渓寺は、明治維新の廃仏毀釈にて焼き払われており、炭化材はその際のものと思われる。

2 TP 2 出土炭化材の放射性炭素年代測定分析

(1) はじめに

龍渓寺跡の TP 2 -P 1 ・ P 2 から出土した炭化材について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。分析は、伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadidze・小林克也(株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ) が担当した。

(2) 試料と方法

試料は、いずれも TP 2 の整地土上面で採取された炭化材で、P 1 検出面から採取された試料 No. 1 (PLD-37273)、P 2 から採取された試料 No. 2 (PLD-37787) の 2 点である。

測定試料の情報、調製データは表 2 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 2 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-37273	試料No. 1 遺構: TP 2 層位: 検出面 位置: P 1 検出面炭化物	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-37787	試料No. 2 遺構: TP 2 層位: 検出面 位置: P 2 炭化物	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

(3) 結果

表 3 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 枞を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、

標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の曆年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：Post-bomb atmospheric NH₂）を使用した。なお、1 σ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に2 σ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

表3 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP±1 σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1 σ)	¹⁴ C年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-37273 試料No. 1	-10.85±0.24	91±20	90±20	Post-bomb NH ₂ 2013: 1697-1724 cal AD (22.5%) 1816-1834 cal AD (15.8%) 1878-1898 cal AD (16.7%) 1901-1916 cal AD (13.2%)	Post-bomb NH ₂ 2013: 1693-1727 cal AD (25.9%) 1812-1919 cal AD (69.2%) 1954-1955 cal AD (0.3%)
PLD-37787 試料No. 2	-11.65±0.34	105±19	105±20	Post-bomb NH ₂ 2013: 1695-1726 cal AD (22.7%) 1814-1837 cal AD (16.8%) 1843-1852 cal AD (6.2%) 1868-1873 cal AD (3.7%) 1876-1892 cal AD (11.6%) 1908-1918 cal AD (7.2%)	Post-bomb NH ₂ 2013: 1688-1730 cal AD (26.9%) 1809-1897 cal AD (55.6%) 1902-1926 cal AD (12.7%) 1954-1955 cal AD (0.2%)

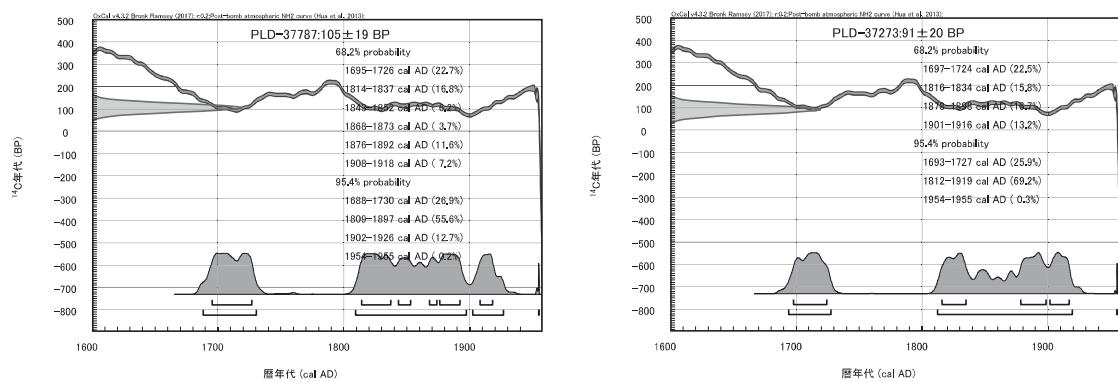


図10 曆年較正結果

(4) 考察

以下、2 σ 曆年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。

P1検出面の試料No.1(PLD-37273)は1693-1727 cal AD (25.9%)、1812-1919 cal AD (69.2%)、1954-1955 cal AD (0.3%)で、17世紀末～18世紀前半及び19世紀前半～20世紀中頃の曆年代を示した。これは、江戸時代中期～昭和時代に相当する。

第3節 横蔵寺旧境内地形測量・遺物分布調査

横蔵寺旧境内は、揖斐郡揖斐川町谷汲に所在する。平成30年度に、地形測量位置図（図11）のうち、平坦面及び通路等について遺物分布調査を実施した。令和元年度に、本堂跡・池、塔跡、仁王門跡が想定される3地点（合計1,300m²、図11）について地形測量を実施した。なお、地形測量及び遺物分布調査における表面清掃作業、基準点測量、水準測量、エレベーション図作成、遺物表面採集作業、遺物採集地点情報の取得・図化作業、遺構・遺物の実測は株式会社イビソクに委託し、遺構・遺物の実測の一部、写真撮影は当センターが実施した。

地形測量・遺物分布調査範囲の平坦面はすべて人力により表面清掃をした。遺構のうち礎石の実測は、手測り測量にて実測図を作成した。図面の縮尺は、20分の1を基本とした。写真撮影は、35mmフィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。

出土遺物の洗浄や注記などの一次整理作業や挿図作成等の整理等作業は当センターが実施した。なお以下に、調査成果についてまとめる。

1 地形測量調査（図12～14）

調査目的 現地確認で建物の基壇と考えられる高まりが複数認められ、そのうち本堂跡、塔跡、仁王門跡では礎石が露出し、本堂の東側には池が隣接している。これら3地点の遺構の遺存状況を把握する目的で、地形測量を実施した。

（1）本堂跡・池（図12） 基壇を中心に礎石、石組、石敷、池の護岸施設などを確認した。礎石から推定される本堂跡の南北軸は東偏24度（N-24°-E）である。基壇は約8.5m四方、礎石から想定される建物は5×5間（礎石の心々間距離は11.1×9.3m）である。基壇の南辺には建物の正面にあたる位置に階段が確認できる。南辺と東辺の一部には基壇外装の可能性がある石列が確認できる。基壇上には、建物柱位置にある礎石列の他にも長幅0.2m以上の石が複数散見され、それらは原位置を保っていない可能性がある。詳細は不明であるが、方形の石組遺構や通路状の石敷状遺構を、基壇の北辺に確認した。池は、ほぼ全周に護岸石が配されており、汀線は、本堂に近い西側では直線的で、北東隅では曲線的である。池中央の中島には護岸石が残り、池中には景石となる巨岩、東岸には石滝組が確認できる。池に流れ込む流路は、北側と東側から2ヶ所あり、どちらも湧水点は斜面際にある。湧水点はやや窪地状になるものの石組などはみられない。池の排水は、南岸にあるコンクリートの集水マスを介して遊歩道の下を通す暗渠構造だが、現状は土砂で詰まり池の南西隅から谷に流れ出ている。

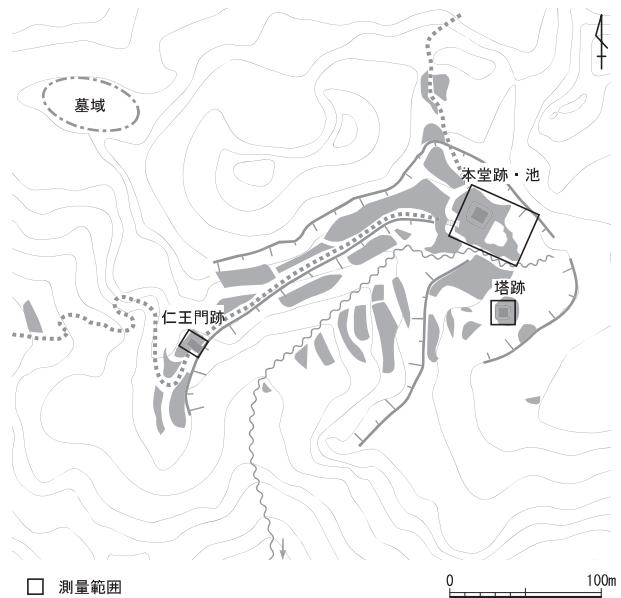


図11 横蔵寺旧境内 地形測量位置図



図12 本堂跡・池 地形測量図

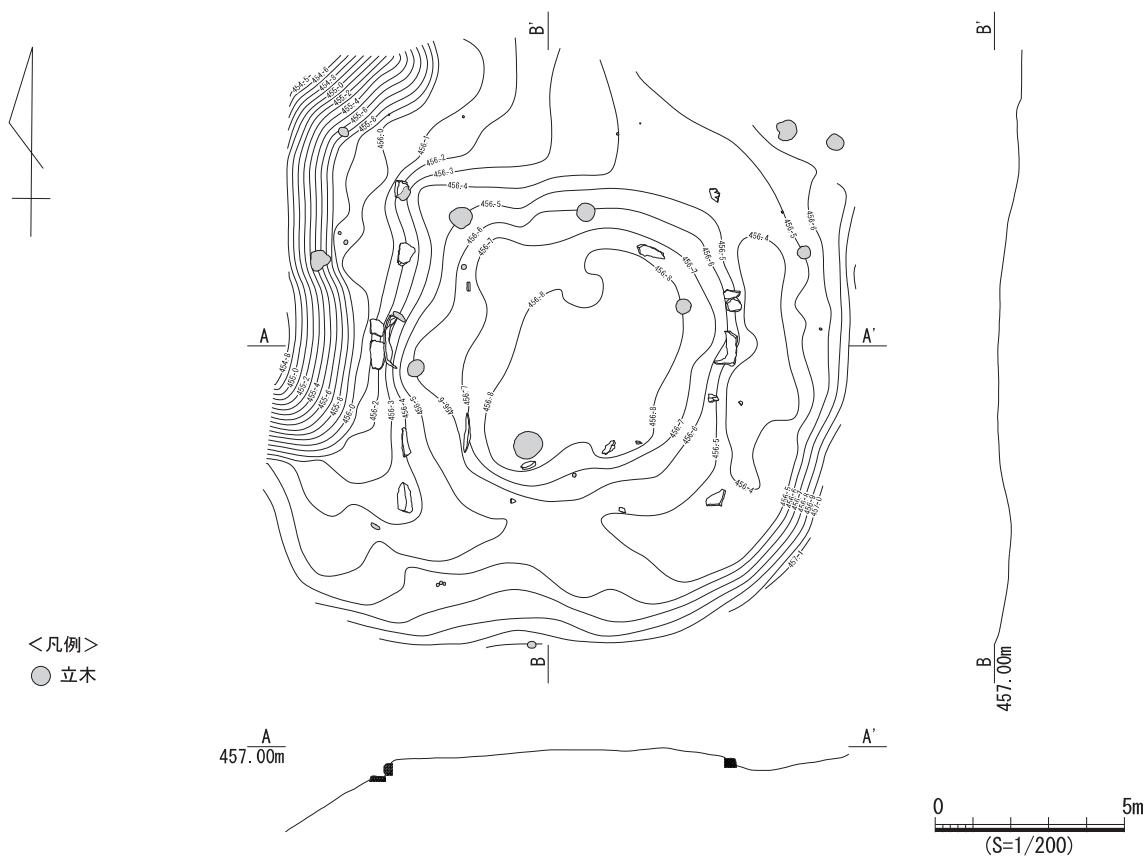


図13 塔跡 地形測量図

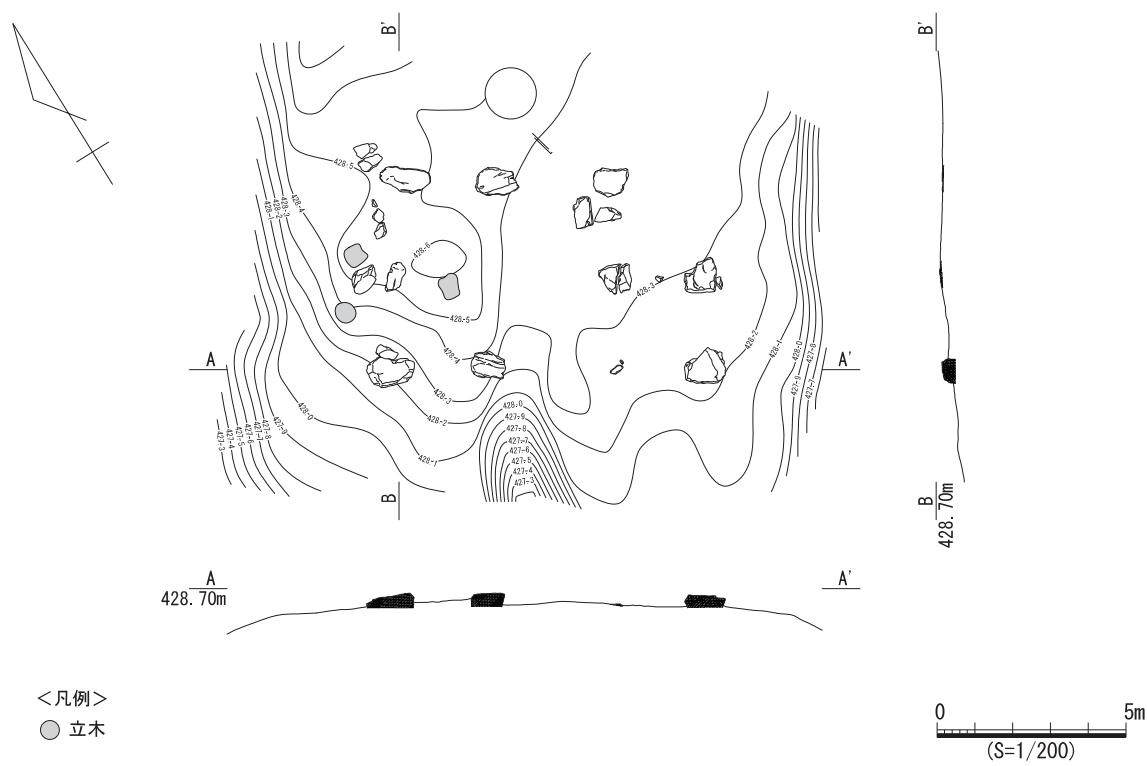


図14 仁王門跡 地形測量図

る。

(2) 塔跡（図13） 推定地では、約8m四方の基壇状の高まりが確認できた。基壇状の高まりの南北軸は真北である。高まりの上面には、4箇所で石の一部を確認できたが、露出部分が少なく詳細は不明である。四隅及び四辺には、基壇外装の地覆石の可能性のある方形石が残存する。基壇の西辺と東辺中央には、階段状の方形石（踏石）を確認できる。西辺の階段は2段あり、北西側下段の平坦面から西側に回り込む谷道から登った位置にある。

(3) 仁王門跡（図14） 仁王門跡は、柱の礎石12箇所のうち9箇所が残存しており、2×3間（礎石の心々間距離は約8.0m×5.0m）の柱間が想定できる。両脇間は約2.5m、通路の中央間は約3mである。仁王門の南北軸は東偏32度（N-32°→E）である。この平坦面は小規模で両側斜面は切り立っており、門の左右に迂回できるような空間はない。礎石から想定される門の立地は、南正面の斜面にある参道から仰ぎみる位置にある。

2 遺物分布調査（図15）

調査目的 寺院に関連する遺構の広がりと性格を把握する目的で、遺物分布調査を実施した。

(1) 分布状況 調査範囲のうち、墓域を除く平坦面群に土器・陶磁器類が広く分布している。特に本堂跡と西講堂跡とされる平坦面で多く認められる。時期が特定できる遺物は、古代に所属する1点を除いてほとんどが中世に所属している。本堂跡や講堂跡より南西下方にある谷の川沿いや隣接する平坦面にも点在しており、中世段階には水平方向だけでなく立体的な坊院の展開が推察できる。

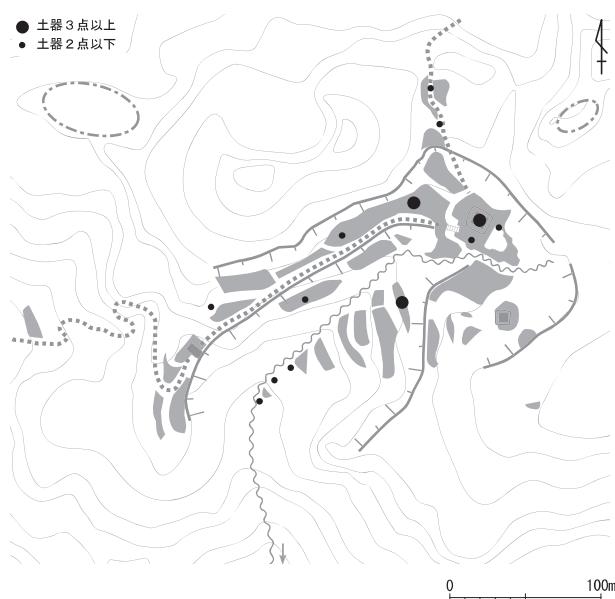


図15 横蔵寺旧境内 遺物分布状況

(2) 採集遺物（図16・表4） 調査範囲の平坦面から、土師器、灰釉陶器、山茶碗、中近世陶磁器類を採集した。このうち、古代から中世に所属する遺物について実測を行った。4・5は土師器の皿で、5の口縁部には多数の油煤が付着しており、灯明皿である。6は灰釉陶器の碗で、口縁部の破片である。所属時期は黒窯90号窯式期である。7・8は青磁の碗で、7は外面に鎧蓮弁文が施される龍泉窯系で、所属時期は13世紀前半である。8は端反碗である。9は山茶碗の碗で、所属時期は尾張型第5型式である。10は常滑の壺で、胴部の外面はタテハケと横方向ヘラケズリで調整される。

(3) 採集地不明遺物（図16・表4） 採集位置や採集状況が不明の遺物について、古代から中世に所属する特に残存状況のよいものを抽出して実測を行った。以下に、遺物の特徴をまとめた。11・12は渥美の鉄鉢で、体部は内湾し口縁部は垂直に立ち上がる。11の内面には線刻文字があり、2字で「□

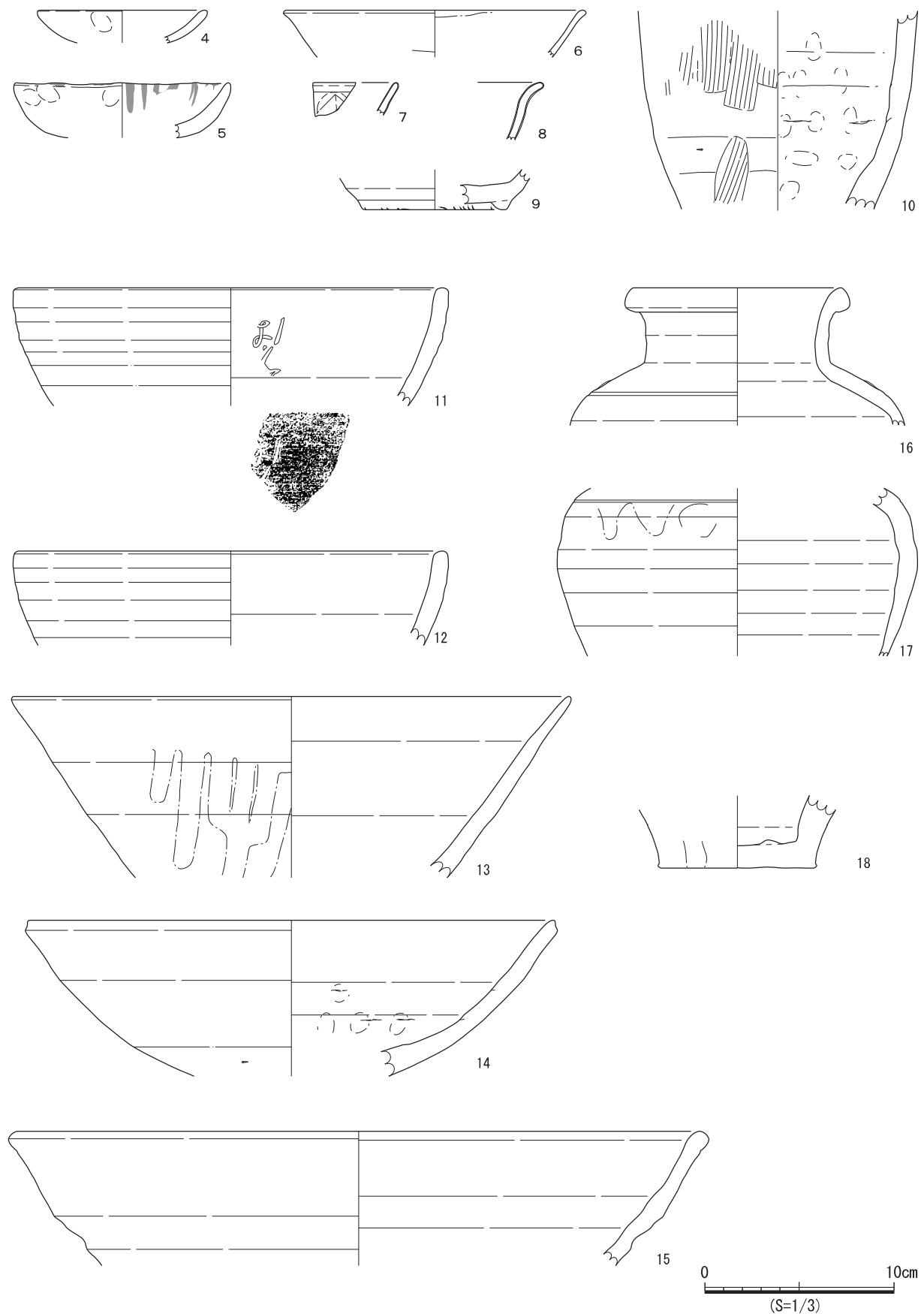


図16 横蔵寺旧境内採集遺物

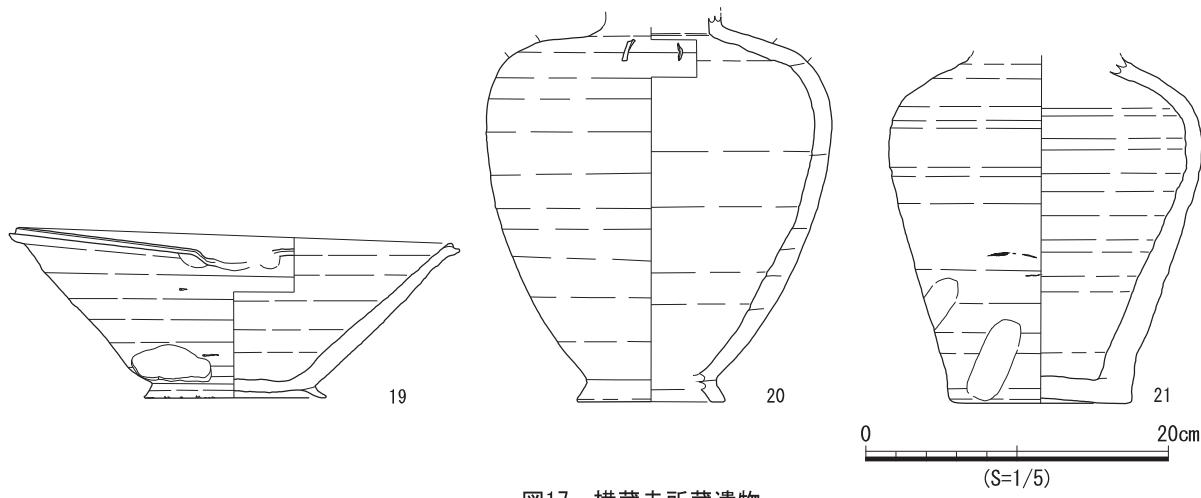


図17 横蔵寺所蔵遺物

は」と判読できる。13は猿投か常滑の片口鉢で、体部は直線的に開き口縁部に向かって薄くなり端部は尖る。尾張型I類である。14は猿投の片口鉢で、体部は丸みを帯び口縁端部は角縁となる。尾張型第5型式である。15は山茶碗の片口鉢で、体部は直線的に開き、口縁端部は丸く收める。尾張型I類第5型式である。16・17は美濃須衛窯産の四耳壺で、肩部には沈線が1条施される。16の口縁部は外反し端部は玉縁状である。16の耳は基部の端が肩部に残存し、17の耳は剥がれた痕跡が肩部に残存する。18は常滑の三筋壺で、底部の破片である。外面に釉だれが確認できる。

3 横蔵寺所蔵遺物について

横蔵寺で所蔵されている3点の遺物について、令和3年度に実測を行った。これらの遺物は、近代の台風ののち、横蔵寺旧境内において地表面に露出していたといい、出土位置や出土状況は不明である。以下に、遺物の特徴をまとめる。

横蔵寺所蔵遺物（図17・表5） 19は山茶碗の片口鉢、20は四耳壺、21は瓶類である。19は、尾張型第8型式である。内面は表面が摩耗し、胎土中の砂粒が外れた小穴（使用痕）がみられる。片口部の下方に5.5cm×3.6cmの孔があるが、故意による穿孔か判断できない。20は、古瀬戸前期様式Ib～IIa期である。肩部が大きく張り、高台が開く。外面には回転ナデを施し、ごく僅かに下部から左斜上方へ施釉時の刷毛の痕跡がみえる。また、肩部には自然釉がかかる。耳部は全て欠損するが、耳部内側にあたる外面にも丁寧に施釉する。頸部以上は欠損し、その断面の傾斜から内外面より故意に打ち欠かれた可能性がある¹⁾。21は、荒い胎土や色調から、猿投産、尾張型第5型式以前に比定される可能性がある。体部は厚く、外面は回転ナデを施した後、胴部下方にのみまばらにナデを施す。また、胴部内面下方は回転ナデが緩い。頸部は欠損するが開きが大きく、広口壺のような形状であった可能性がある。

小結 20・21よりも、19が一世紀近く古く、時期差がある。器種及び左記の時期差は、藤澤2001が指摘する中世墓から出土する蔵骨器とその蓋の特徴に符合する²⁾。出土状況が不明であるため実際に組み合っていたかは検証できないが、19～21は蔵骨器とその蓋として使用されたと考えられる。

表4 横蔵寺旧境内分布調査採集遺物観察表

掲載番号	地点	層位	種別	器種	産地	分類・時期	大きさ(cm)			備考	挿図番号	図版番号
							口径	底径	器高			
4	本堂	表採	土師器	皿			(8.6)	—	(1.7)		16	16
5	池北	表採	土師器	皿			(11.2)	—	(2.9)	口縁部に煤付着、灯明皿	16	16
6	本堂	表採	灰釉陶器	碗	猿投	黒窯90号窯式・9世紀後半	(15.6)	—	(2.5)		16	16
7	本堂西	表採	青磁	碗	中国	龍泉窯系・13世紀前半	—	—	(1.7)	鍋蓮弁文	16	16
8	本堂南	表採	青磁	端反碗	中国		—	—	(3.3)		16	16
9	本堂西	表採	山茶碗	碗	猿投	尾張型第5型式	—	(7.6)	(2.1)	貼付高台、粗穀圧痕	16	16
10	本堂北	表採	常滑	壺	常滑		—	—	(0.5)		16	16
11	不明	表採	渥美	鉢	渥美		(22.4)	—	(6.2)	内面に線刻文字「□は」	16	16
12	不明	表採	渥美	鉢	渥美		(22.4)	—	(5.0)		16	16
13	不明	表採	山茶碗	片口鉢	猿投か常滑	尾張型I類	(29.4)	—	(9.6)	内外面施釉	16	16
14	不明	表採	山茶碗	片口鉢	猿投	尾張型第5型式	(27.8)	—	(8.2)		16	16
15	不明	表採	山茶碗	片口鉢	東濃	尾張型I類第5型式	(36.0)	—	(7.1)	外面自然釉	16	16
16	不明	表採	山茶碗	四耳壺	美濃須衛	13C前半～14C中頃	(11.0)	—	(7.3)	沈線一条	16	16
17	不明	表採	山茶碗	四耳壺	美濃須衛		—	—	(8.1)	沈線一条	16	16
18	不明	表採	常滑	三筋壺	常滑	第1段階3型式	—	(8.0)	(3.8)	外面自然釉、外面釉だれ	16	16

表5 横蔵寺所蔵遺物観察表

掲載番号	地点	層位	種別	器種	産地	分類・時期	大きさ(cm)			備考	挿図番号	図版番号
							口径	底径	器高			
19	不明	表採	山茶碗	片口鉢	東濃	尾張型第8型式	29.8	12.0	11.3	貼付高台、粗穀圧痕	17	15
20	不明	表採	古瀬戸	四耳壺		前期様式Ib～IIa期	—	(9.8)	(25.5)	外面自然釉、外面施釉、貼付高台	17	15
21	不明	表採	山茶碗	瓶類	猿投か	尾張型第5型式以前	—	11.9	(23.9)		17	15

注

・遺物の器種及び所属時期について、藤澤良祐氏（愛知学院大学）の指導を得ているが、文責は編集者にある。

1) 藤澤良祐（2001）は、蔵骨器の頸部欠損について、中世墓で出土した蔵骨器の頸部欠損率と完存率の比較を行っている。

各中世墓の頸部欠損率はほぼ共通し、中世全般を通じて蔵骨器への転用を目的とした打ち欠き行為が普遍的に行われていたとしている。なお、蔵骨器の頸部の打ち欠きは、底部穿孔と同じく、日常容器としての性を抜き取り、非日常容器への転用を意味するものと考えられている（小嶋 1999）。

藤澤良祐 2001 「埋納された古瀬戸-特に大型壺・瓶類を中心として-」『研究紀要』 XVIII、瀬戸市歴史民俗資料館

小嶋そのみ 1999 「中世の検出遺物」『善光寺沢遺跡発掘調査報告書』、吉良町教育委員会

2) 藤澤 2001（注1）で「古瀬戸前期の蔵骨器は、少なくとも半世紀から一世紀の伝世期間を想定した方が良い」と指摘する。

第4節 寿楽寺廃寺跡内容確認調査・太江区内遺物分布調査

寿楽寺廃寺跡は、飛騨国最古の寺院と位置付けられている。飛騨市古川町太江に所在し、国府古川盆地の北隅にあり、宮川とその支流の太江川の合流地点から谷川へ約1km入った河岸段丘上に立地する。当遺跡は、平成10~12年度に当センターが発掘調査を実施¹⁾(以下、過去調査とする。)し、現南光山寿楽寺境内の北側で講堂基壇跡、回廊跡及び僧房跡を検出した。遺物には、白鳳期に位置づけられる鴟尾を含む多量の瓦や塑像のほか、三彩陶器、須恵器、硯、暗文土師器などがある。このうち、回廊跡から出土した須恵器や瓦には「高家寺」「高家」の墨書や線刻のあるものが確認されているが、「高家」は古代の飛騨国荒城郡にあった郷名であり、寿楽寺廃寺跡周辺は古代に高家郷に属し、成立時には郷名から「高家寺」と呼称されていたことが明らかになった。

現南光山寿楽寺の本堂北側には東西に並ぶ2つの高まりがあり、過去の調査で検出した回廊の内側に位置していることから、飛騨市教育委員会によって塔跡及び金堂跡と推定されている。現在は庭園の築山となっており、高まり間には南側に広がる池が造られている。西側の高まりは、裾部分で東西約8m、南北約9m、裾部から頂部までの高さ約1.7mであり、頂部には五輪塔や宝篋印塔などの石塔部材が集積されていた。東側の高まりは、裾部で東西約15m、南北約11mであり、頂部は近代以降の墓域として利用されている。そこで、これら高まりの性格を明らかにすべく、平成30年度に塔跡と推定されている西側の高まりに3か所の調査坑(TP1~TP3)、令和元年度に西側の高まりに1箇所(TP4)、東西の高まり間に1か所の調査坑(TP5)を設定し、内容確認調査を実施した。以下に、各調査坑の調査成果についてまとめる。

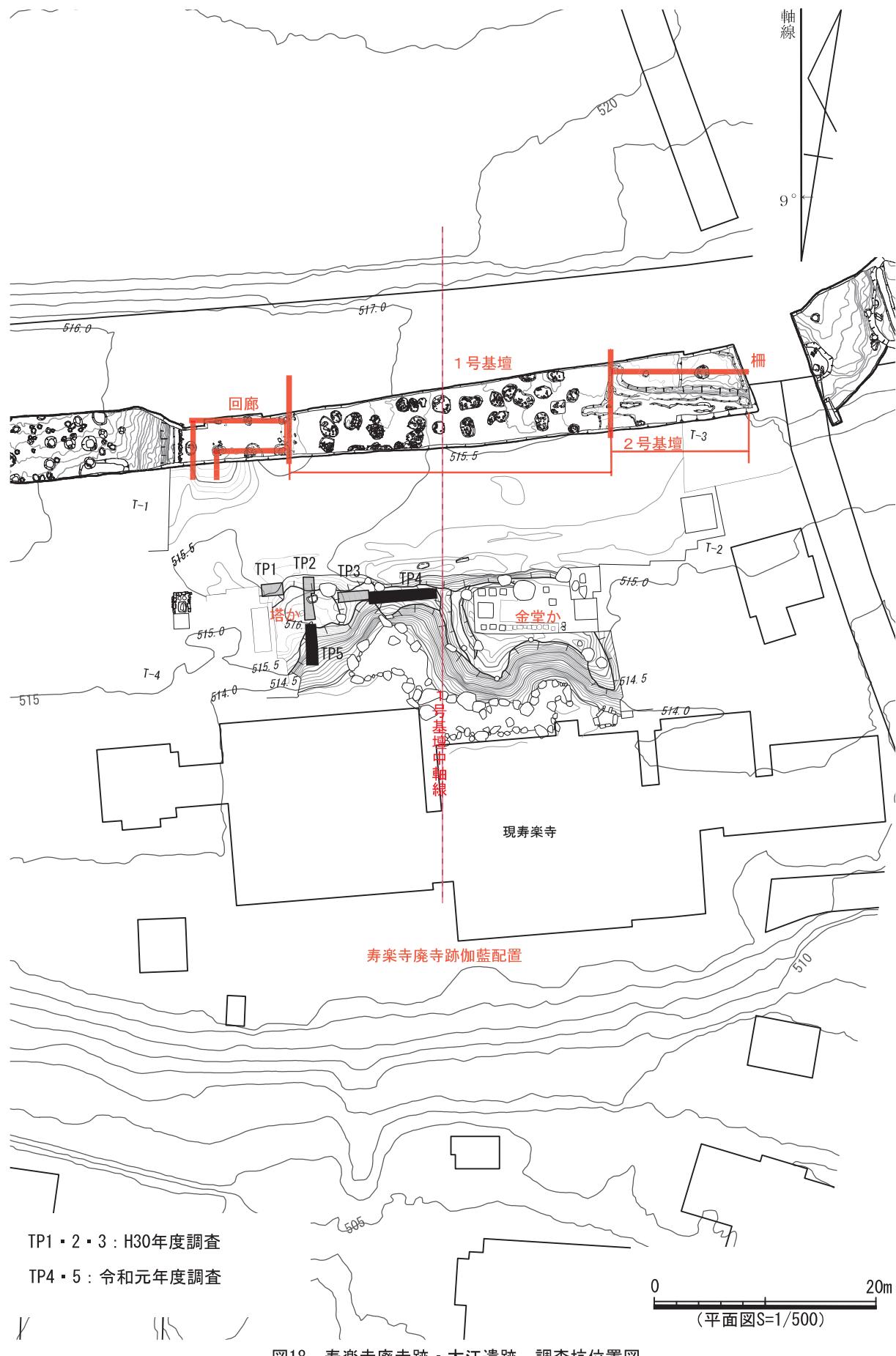
また、寿楽寺廃寺跡の北には、式内社に比定されている高田²⁾神社があり、CS立体図を確認したところその周辺に複数の平坦面が確認されたため、令和元年度に地形観察図を作成するとともに太江区内遺物分布調査を実施した。

今回の調査では、土師器、須恵器、中近世陶磁器などの土器類と古代瓦、砥石、金属製品が出土した(表6・7)。本節では、これらの遺物のうち遺構の性格や時期などを検討するうえで必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した³⁾。

1 寿楽寺廃寺跡内容確認調査(図18~22、24~28、表8~10・12)

TP1 塔基壇の北西隅を検出する目的で、微高地の裾部に東西2m×南北1mの調査坑を設定した。表土を除去すると、中央付近でしまりのあるにぶい黄色土(3層)に達したため、基壇の版築である可能性も想定して精査を行った。調査坑南壁面の土層観察から、微高地の形状に沿って堆積する6層を確認した。6層には礫と瓦片が大量に混入り、土質及び瓦の混入具合からTP2の12層、TP3の6層に対応する可能性があり、搬入土を用いた盛土であると判断した。3~5・7層は、しまりのある土としまりのない土が交互に堆積し、西側に向かって水平に堆積することから、当初は基壇の版築である可能性を考えた。しかし、6層を搬入土による盛土と判断したこと、3・4層をまたぐ礫が確認できることから、版築ではなく、3~5層は盛土の裾固めのための堆積であると考える。

出土遺物 1・3~6層から布目瓦を含む瓦片(丸瓦、平瓦)がコンテナ1箱分出土した。瓦は、各土層内に礫とともに散在していた。瓦以外には、土器類の小片がわずかに出土し、土師器、須恵器、



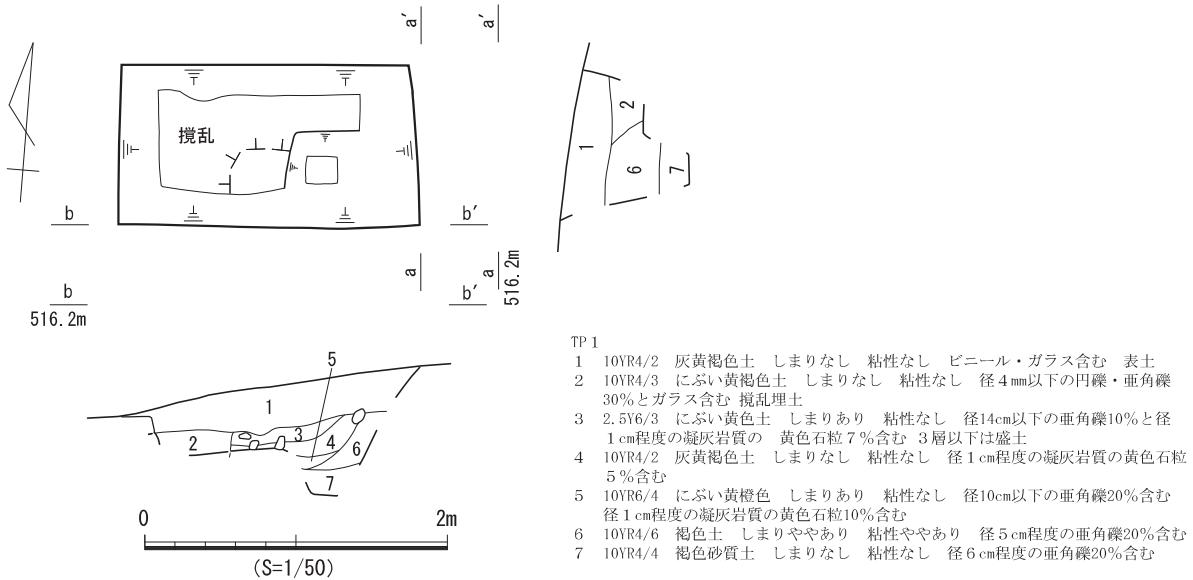


図19 寿楽寺廃寺跡 TP 1 遺構図

近世陶磁器がある。近世陶磁器は3～6層にみられるため、TP 1で確認した盛土は近世以降の堆積であると考える。本調査坑からは、基壇の一部を構成する堆積は確認できなかった。

1層から土師器甕底部、美濃窯産第7小期の摺絵のある輪禿皿、肥前が出土している。3～6層からは美濃窯産18世紀頃の碗、5～7層からは須恵器碗底部、在地産で幕末頃の鍋か土瓶が出土している。東壁精査で16世紀末から17世紀初頭の唐津産の碗が出土している。

TP 2 塔基壇の北辺裾部の検出、基壇の構造を確認する目的で、高まりの北辺裾部から上面にかけて東西2m×南北4mの調査坑を設定した。高まりの上面には石塔等の部材が散乱し、その北側を覆うように幅1.04m×0.72mの扁平な石材が乗っていた。石材下には、原位置を保つ可能性のある部材を確認できたため、集積遺構であると判断し、図化を行った。集積遺構は、中世石塔部材17点（五輪塔空風輪5点、水輪6点、宝篋印塔相輪3点）、近世石灯籠部材（宝珠）1点、石地蔵2点（立像、坐像）から成る。集積遺構を南北方向に半割すると、平面橢円形と思われる掘り込み（SK 1）を検出した。SK 1は、後述するSK 2の埋土である8層上面から掘り込まれている。さらに、SK 1の下から石組みを伴う方形の土坑（SK 3）を検出した。土坑の掘方に合わせて、扁平な石材を横位に立てて配置する。石組み内には角礫が散在するが、石材の面を揃えているように見える。当初は、その規模及び構造からSK 3を中世墓と考えたが、骨片や蔵骨器等の遺物は出土しなかった。また、調査坑の南側では、表土下よりSK 2のプランが確認できたため、調査坑を拡張して精査を行った。調査坑南壁面の土層観察から、SK 2は11層上面から掘り込まれており、11層よりも新しい人為的な掘り込みであると判断した。SK 2は本調査坑外へ広がり、後述するTP 5の北端で遺構の南端を検出した。遺構の重複関係ではSK 1がSK 2・SK 3よりも新しい。SK 1・3からの出土遺物はないが、SK 2から須恵器、近代磁器等が出土したことから、SK 1・2は近代以降と考えられる。

調査坑の北部では、表土（1層）及びコンクリート片を含む2層を除去後、TP 1の6層と対応する堆積（12層）とその下層（13層）を確認した。13層はさらに下方へ続くが、調査坑幅が狭いうえに石を多く含んでいたため、掘削を断念した。12・13層は、本調査坑の南部やTP 5でも確認できる堆積で

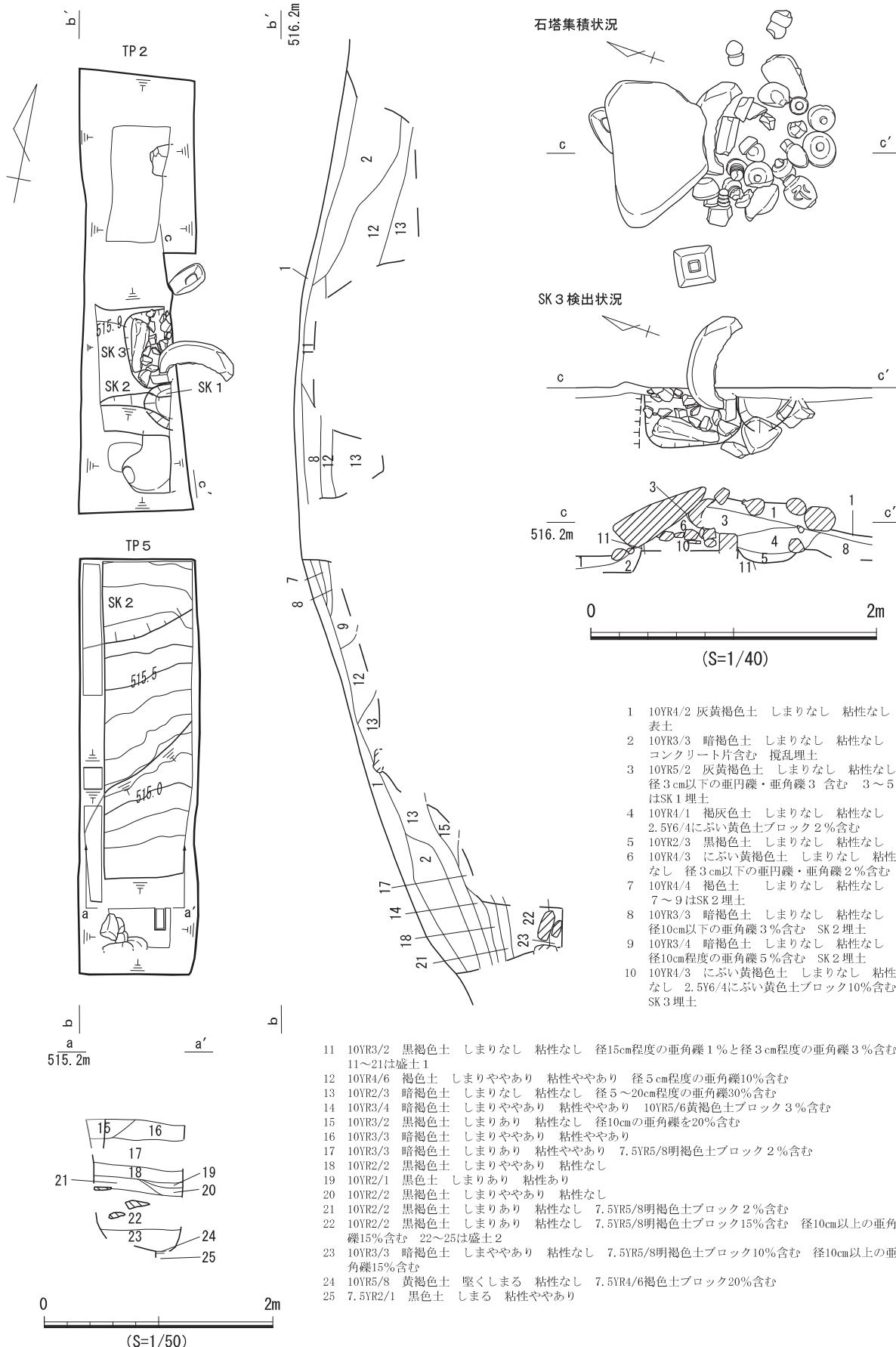


図20 寿楽寺廃寺跡 TP 2・TP 5 遺構図

あり、高まり全体を覆うように盛られている。12層からは須恵器や近代陶器、13層からは須恵器、備前焼盤が出土していることから、12層は近世～近代の盛土、13層は中世の盛土であると判断できる。また、11層は瓦の混入がなく、12・13層と明らかに土質が異なることから、SK3の設置に伴う盛土の可能性がある。本調査坑からは、基壇の一部を構成する堆積は確認できなかった。

出土遺物 1・2・8・12～13層から布目瓦を含む瓦片（軒丸瓦(23)、丸瓦、平瓦）が出土し、出土量はコンテナ3箱分であった。瓦は、各土層内に礫とともに散在していた。瓦以外には、土師器、須恵器、近世陶磁器、近代磁器、砥石が出土した。

須恵器は2層から1点出土している。13層から出土の22は8世紀の在地産須恵器佐波理写しの鉢で、糸切り痕・ヘラ切り痕・使用痕有がある。8層出土の24は産地不明の片口鉢で擂目が無い。13層からは備前大皿1点(25)が出土している。近代陶器が1層から1点、2層から3点、8層から3点、10層から1点出土している。

TP3 塔基壇の東辺を検出する目的で、微高地の東部に、東西3m×南北1mの調査坑を設定した。表土（1層）下の6層は、TP1の6層、TP2の12層と対応し、8・9層はTP2の13層と対応することから、高まり全体が盛土によって形成されている。

調査坑南壁面の土層観察から、人為的な堆積土（17～23層）を確認した。この堆積の上面は、17層から東に向かって緩やかに傾斜し、調査坑外へ続く。いわゆる「土嚢・土塊積み技法」のような堆積単位を確認でき、土質及び堆積方法の点で上層の盛土とは明確に区別することができる。上層の18・20・22層は比較的しまりがある土であるのに対し、下層の19・21・23層はしまりのない土を用いている。また、18～22層には瓦片が混入する。20・22層上面には、据付穴を伴う石材1石を検出した。石材の北側に接する位置でSK2を検出したため、調査坑内で石材が列状に並ぶか確認することはできなかった。29・30層が基壇の一部であるとするならば、20・22層上面の石材は基壇外装の石材である可能性がある。しかし、18～22層には瓦片が混入しており塔廃絶後の堆積と考えられることから、現状では基壇の一部であると判断することは困難である。なお、SK1については、検出当初は1基の土坑としたが、土層観察の結果、6層上面からの掘り込みであり、SK3については東端の立ち上がりを確認したことから土坑と認定したが、後述するTP5-SK2と埋土の様子が類似する。

出土遺物 1・4・6～9・12・17～21層から布目瓦を含む瓦片（軒丸瓦(27)、丸瓦、平瓦）がコンテナ5箱分出土した。瓦は、各土層内に礫とともに散在していた。瓦以外では、縄文土器、土師器、須恵器、中近世陶磁器、近代陶器、砥石、金属製品（香炉）が出土した。1層からは瀬戸窯産登窯10～11期の広東碗が1点出土した。2・4'層からは美濃須衛窯産13世紀の四耳壺の胴部下部破片が1点出土した。3層からは古代の土師器甕の破片が1点、被熱を受けた古瀬戸中期の鉄釉花瓶(29)が1点、幕末から近代の伊万里が1点、在地産と思われる近代陶器が1点出土した。6層出土の26は7～8世紀代の生焼けの須恵器壺で内面に漆付着している。6・9・12層出土の30は瀬戸後IV新の擂鉢で、6層出土の31は瀬戸美濃登窯Iの擂鉢である。金属製品の香炉(52)は銅製で1層から出土している。

TP4 H30年度のTP3の調査では、TP2-12・13層とは異なる人為的な堆積土(17～23層)を検出し、塔基壇の一部である可能性が考えられたため、TP3に続けて東側へ伸ばして堆積土の性格を確認するために設定した。推定塔跡から推定金堂跡にかけて古代の基礎地業の可能性のある(29～31層)の上に、

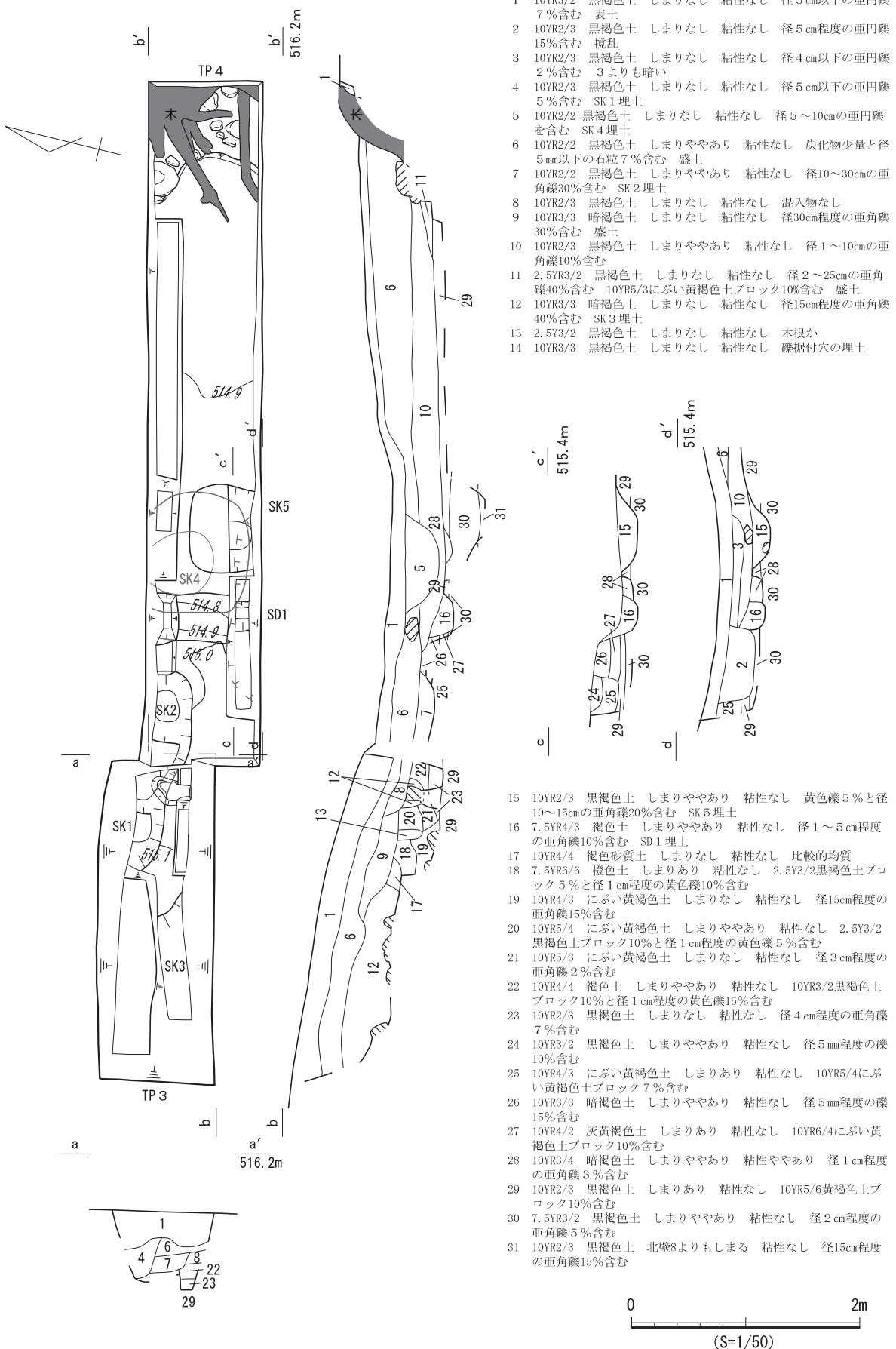


図21 寿楽寺廃寺跡 TP3・TP4 遺構図

17~27層が堆積することを確認した。17~27層は、TP3と同様に版築状ではなく、「土嚢・土塊積み技法」のような堆積状況であった。

SD1 西の高まりの東端と考えられる位置で検出された、南北方向の溝状遺構である。重複関係では26・27層よりも新しい。埋土に通水の痕跡はなく、遺構の性格は不明である。

SK2 遺構の北側は調査坑外となるが、検出した範囲では遺構の平面形は橢円形である。調査坑西端では平坦であるが、遺構の東側では一段下がる。また、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は单層で、TP3では礫を多く含んでいたがTP4では少量であり、埋土は人為的に埋め戻された可能性がある。

SK4 6層上面で検出した。完掘後に後述するSK5を確認したことから、近世以降の掘り込みと考えられる。

SK5 28・29層上面で検出した。埋土には瓦片と径15cm程度の角礫を多量に含んでおり、角礫は混在するというよりは埋土の下方に詰まっていた。埋土から近世の擂鉢(38)が出土しており、近世の遺構と考えられる。

出土遺物 1・2・6・10・15・24~27・29~31層から布目瓦を含む瓦片(丸瓦、平瓦)がコンテナ3箱分出土した。瓦以外には近世陶器、金属製品が出土している。10層で全体にねじれた鉄製の角釘(54)、銅製の鉢(53)が出土し、53は器壁の薄さに比べて口径は非常に大きく上面には2条の沈線があり、隅丸方形の器形になる可能性がある。6層からは近世肥前の碗1点(37)と窯体が1点、10層から瀬戸美濃登窯Iの擂鉢(38)が出土している。

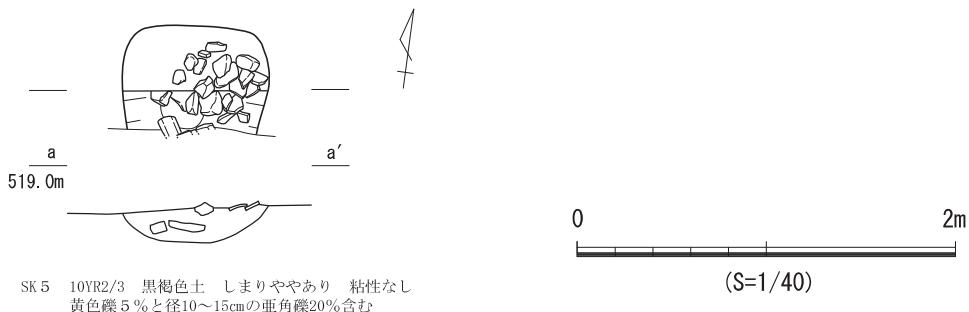


図22 TP4-SK5遺構図

TP5 平成30年度調査におけるTP2の12・13層とTP3の17~23層の広がりを把握するとともに、調査地が南に向かって傾斜するため基盤層を確認し、基本層序を把握することを目的として調査を実施した。表土である1層を掘削して1層基底面で遺構検出を行い、併せて西壁沿いに土層堆積状況を確認するためトレンチを掘削した。その結果、調査坑の中央では拳大程度の亜角礫を多く含む12層・13層を確認し、調査坑の北端ではTP2-SK2と考えられる掘方、調査坑南半では搅乱を検出した。これらのうち搅乱の認定は、掘方の北端が発掘区外の地形の傾斜変換点と一致し近代磁器1点(赤絵)が出土したことによる。搅乱を完掘し、15層以下の土層堆積状況を確認するため調査坑南端を深掘りし、人頭大の礫を多く含む23層の下で堅く締まる土層(24層)を確認したが基盤層に達せず、また15~25層にかけて礎石据付穴等の遺構は確認できなかった。なお、TP2南端と同様にSK2直下に12層が堆積する可能性が高いことから埋土を掘削しなかったが、SK2の9層はTP2南端で確認していないためSK2とは異なる堆積の可能性もある。SK2はTP5西壁を除いて埋土を掘削しておらず、壁面の立ち上が

りは皿状であるため盛土の単位である可能性もある。6層を除去後に遺構検出のための精査を行ったが、遺構が検出されなかつたため、調査坑の南半にサブトレンチを設定し掘り下げた。標高 515.29m で褐色砂質土層（17 層）を検出し、褐色土を追うように再度精査を行つたところ、SK 2 と、10 層下の 20・22 層の境に据付穴を伴う石材 1 石を検出した。この石材の長軸が南北方向であったため、列状に配置されているか確認する目的でサブトレンチを北側に拡張したところ、SK 4・5 を検出した。調査坑東壁面の土層観察から、SK 4 は 6 層上面、SK 5 は 8 層上面から掘り込まれており（図 21、a-a' 断面から）、SK 4 が新しい。両遺構とも埋土には瓦片を含んでいる。

盛土 1 TP 5 でも TP 2 の 12・13 層を確認したが、TP 2 の 11 層に対応する土層は確認できなかつた。12・13 層は土層のしまりがなく亜角礫を多く含むことから、盛土と判断した。規模については、TP 2 の 12・13 層、TP 5 の 13 層は調査坑外に続くため不明である。ただし、盛土の厚さについては、TP 2 で厚さ 1.02m 以上である。14~25 層はブロック土を含むことから人為堆積と考えられ、標高 513.66 m~514.92m、厚さ 1.26m である。これらのうち、14 層は 15・17 層に比べるとしまりが弱く二次堆積の可能性もある。また、15・17 層はしまりがあり 18~23 層とは性格が異なる可能性もある。

盛土 2 盛土 1 には瓦を含んでいるが、22~25 層には瓦を含まないことや埋土の特徴から、「盛土 2」として区別する。22 層中には人頭大の礫を多く含み、24 層は 14~23 層とは明らかに異なり固く締まるが、25 層も含めて人為堆積と考えられる。なお、24 層上面の標高は現本堂周辺の現地表面とほぼ同じである。

出土遺物 遺物は散在して出土し、特徴的な出土状況は認められなかつた。1・2・9・13・14・17・18・21 層から布目瓦を含む瓦片（丸瓦、平瓦）がコンテナ 1 箱分出土した。1 層からは 6 世紀末~7 世紀初の畿内系の須恵器（39）が 1 点出土している。

石塔 寿楽寺廃寺跡の石塔の部材は、中央付近に TP 2 を設定した盛土上、TP 4 の東側にある近世以降の墓域、TP3・4 の南側にある池周辺で確認した。その数は、五輪塔の水輪 8 点、火輪 2 点、空風輪 8 点、宝篋印塔の相輪 3 点、笠 3 点、合計 24 点であり、五輪塔の地輪と宝篋印塔の塔身・基礎は確認できなかつた。

このうち、TP 2 で検出した集積遺構を伴う盛土上には 17 点の石塔の部材が集積しており（図 28）、部材ごとに形態の異なるものを選択して 8 点（図 27-S11~S18。以下、番号は掲載番号を示す。）を図示した。また、TP 2 を設定した盛土上にある他の部材 1 点（S20）、TP 4 の東側にある近世以降の墓域内で確認した部材 1 点（S19）、現本堂裏の庭園内にある部材 2 点（S10、S11）を含め、合計 12 点を図示した。なお、図化した部材の石材はいずれも多孔質の凝灰岩である。

S10~S15 は五輪塔で、S10~S12 は空風輪、S13 は火輪、S14・S15 は水輪である。S10 は大型で、風輪・空輪ともに下方のくびれが深く、風輪の側線は上端まで緩やかな曲線を描く。空輪は最大径が中央やや上にある宝珠形を呈し、上端の突起は発達していない。なお、風輪下には枘周りの内割りが認められる。S11 は風輪上方が直線的であり、空輪は下方のくびれが浅く、最大径が中央よりも下にある饅頭形を呈する。また、風輪下端と枘との間には平坦面がなく、内割りも認められない。S12 は風輪下方が欠損している。風輪・空輪ともに側線が直線的で、空輪下方は大きく抉れ、上端は突起が認められない。S13 は下面幅に対して上面幅が広く、全体的に扁平な印象を受ける。軒上辺は反りが強く、軒下辺は中央から緩やかに反り上がり、軒端は団面左側が外傾、同右側が内傾する。枘孔は、上面に深さ 5.3 cm の方形孔、下面に深さ 5.8 cm の円形孔が残る。なお、団面左側面から背面にかけて、銳利な

刃物によって切断しようとした近世以降の痕跡が残ることや、当廃寺跡の空風輪の柄はすべて断面円形であることなどから、上面の方形孔は近世以降に改変された可能性がある。S14・S15 はいずれも四面に梵字が陰刻されている。S14 は最大径が中央やや上に位置し、上下面ともに柄周りの内割りが認められる。また、上下面の直径に対して柄が大きく、上柄は直径 8.5 cm、長さ 4.2 cm、下柄は直径 8.1 cm、長さ 3.1 cm を測る。なお、図面裏側の約半分が割れている。S15 は 5 よりも扁平で、下方の側線が直線的になっている。下面の柄周りの内割りが認められず、上柄は高さ 0.8 cm で、下柄は欠損している。

S16～S21 は宝篋印塔で、S16～S18 は相輪、S19～S21 は笠である。S16 の下請花は肉厚彫りで花弁の先端が丸く、凹凸が顕著である。一方、S17 の下請花は線彫りで花弁の先端が尖り気味である。いずれも部分的に摩滅が認められるが、下請花は八葉と考えられる。また、S16・S17 ともに九輪は浮彫りで、S17 はやや歪みが生じている。S18 は伏鉢に山形の文様を線彫りし、下請花と九輪も線彫りで表現されている。S18 も摩滅や欠損が著しいものの、山形の文様は十、下請花は二十葉と考えられる。S19 は下二段、上八段であり、隅飾は二弧で輪郭を巻く。隅飾の外面傾斜角度が強く、上弧は茨から中央に向かって緩やかに膨らんで立ち上がる。笠幅に対する隅飾基底面の占有率が広く、隅飾間の距離は 5.5 cm である。笠上段の各段の上面は外傾しており、下面には深さ 10.2 cm の方形孔が認められるが、後補の可能性が高い。なお、図面裏側の約 3 分の 2 が割れている。S20 は上八段であり、隅飾は三弧で輪郭を巻く。隅飾の外面傾斜角度は不明で、中弧と上弧の膨らみは乏しい。隅飾間の距離は 5.0 cm で、笠上段の各段の上面は外傾している。下面には現状で深さ 3.4 cm の孔の痕跡が認められる。S21 は上六段、下二段であり、隅飾は二弧で輪郭を巻く。隅飾の外面傾斜角度が強く、上下の弧は直線部分が多い。隅飾間の距離は 6.6 cm で、笠上段の各段の上面は水平若しくは外傾している。下面の周縁は幅約 1 cm の縁があり、その内側は全体的に 4～5 mm 崩んでいることから、塔身をはめ込んでいたと考えられる。

寿楽寺廃寺の石塔の年代については言及できず、今後の飛騨地方の石塔の編年研究等の進展を待ちたい。なお、宝篋印塔については飛騨市指定文化財である寺林の宝篋印塔の事例から、S18 の相輪と S21 の笠がセット関係である可能性が高い。

小結 今回の調査では以下の 3 点を確認した。**①** : TP 5 では、推定塔跡から推定金堂跡にかけて基礎地業の可能性がある堆積土（29～31 層）を確認した。今回の調査では基盤層を確認できなかつたため、地業の詳細については今後の課題である。**②** : TP 3・4 では、**①**の上で確認した盛土（17～27 層）は、瓦片を含んでいることから塔廃絶後の堆積土と判断した。TP 1・2・5 では同様の土塊状の堆積状況は確認されなかつたが、TP 2・5 の 11～21 層にも瓦片を多く含んでおり、同一時期の盛土である可能性がある。**③** : TP 5 では、**①**の上で**②**とは異なる盛土の一部（11 層）を確認した。この盛土は金堂跡推定地の高まりの一部と思われる。

土層堆積状況の解釈を含めた遺構の性格については今後の調査に委ねる必要があるが、現時点では以下のとおり考えられる。平成 11 年度発掘区(10C 区)における礎石据付穴の検出面では標高 515.0m、TP 3・4 の 29 層上面では標高 514.8m、現本堂北側の現地表面では標高 513.7m である。TP 5 の 24 層上面は標高 513.66m で、現本堂の現地表面とほぼ一致し、かつ硬くすることから、24 層以下については基礎地業の可能性がある。つまり、平成 11 年度発掘区から TP 5 にかけて旧地形が大きく傾斜し、古代においては基礎地業の後に斜面地に盛土の上で基壇を設置したと推測され、瓦を含んでいない TP 5 の 22・23 層はその盛土の一部である可能性がある。

出土遺物で特記すべきは、香炉や銅鉢など仏具に関連する遺物が含まれ⁴⁾、出土須恵器は6～8世紀のもので、中には畿内系・在地産金属器の写しがある。生焼け須恵器の内面には漆が付着している⁵⁾。飛騨市の地域に備前や肥前、伊万里が出土している⁶⁾。鷦尾が1点出土しており、過去の調査で出土の74-701～701と比較したところ、これらとは別個体であると考えられる。33の土製品は壁土か塑像の可能性があり、二次焼成を受けている（第5節参照）。内容確認調査で出土した古代瓦1,173点のうちの340点(29%)が、割れ口も含めて赤く変色や煤が付着していること等から、二次焼成を受けていると思われる。壁土が二次焼成を受けているという分析結果が特に重要で、壁土は塔跡推定地からの出土であり、塔が燃えて寺院機能が終息する例がよくある⁷⁾ため、寿楽寺廃寺跡の終焉を物語っているのではないかと思われる。

2 太江区内遺物分布調査（図23・25・26、表11）

遺物分布状況（図23） 地形観察図（第5分冊第3節参照）で図化した平坦面は、石積みが伴い、積み方から中世と推定し、その時期の遺物が散布すると想定し分布調査を実施したが、結果は、165点のうち、縄文土器9点、土師器4点、須恵器135点、古代瓦1点、近世陶磁器16点であった。また、A区から22点、B区から37点、C区から106点採集し、高田神社北の平坦面から最も多く104点を採集し、須恵器や古瀬戸がある。A区からは、最も広い平坦面から須恵器を多く採集し、9世紀の須恵器(41)がある。B区は基壇や集石のある尾根の西にある谷で、須恵器の破片が多く出土している。C区は高田神社の北西平坦面から、須恵器瓶・甕類の破片が多く採集している。

採集遺物（図24・25） 須恵器は7～8世紀代のもので、胎土が黒色味の強く砂粒を多く含んだ粗い土の在地産の須恵器がほとんどであるが、尾張・美濃須衛からの搬入品もある。これらの須恵器の破片は甕が多く大きさの揃った細破片ばかりで、ローリングを受けず故意に割って捨てている。出土位置は高田神社本殿の北裏山麓の平坦面に多く、祭祀か墓に関係する可能性がある。須恵器には在地産の他に、猿投窯産・美濃須衛窯産の搬入のものが出土し⁸⁾、これら搬入品はB区からのみの出土である。灰釉陶器の出土が無く、1点のみ須恵器より分厚く内面の当具痕を擦り消した珠洲産と考えられるものがある⁹⁾。B区内では猿投産・美濃須衛産の須恵器が集中的に出土している。

小結 遺物を多数採集した地点は、高田神社北裏(C区)、高田神社東谷奥平坦面(A区)、高田神社西谷山麓部(B区)の3地点あり、須恵器が最も多く採集され、在地産以外の猿投、美濃須衛、珠洲かの搬入品が見られる。搬入品はB区に偏り、C区からは故意に打ち欠いた7～8世紀の須恵器破片が多数出土している。今回の調査では、中世の遺物はほとんど出土しなかったが、平坦面群等の遺構の時期や性格については今後の課題である。

注

1) 財団法人岐阜県文化財保護センター2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第74集

2) 大下永 2021「飛騨北部における武家拠点周辺地域の構造と変遷—綾小路・江間から金森へ」『戦国織豊期の地域社会と城下町 東国編（戎光祥中世織豊期論叢4）』、戎光祥出版に、太江地区には「左近」「高田」等、武家や神社を想起させる字名が伝わり、また地割から中世武家拠点存在が想定できると報告されている。

3) 遺物の年代観や器種別分類等については、以下の既存の研究を参考とした。また、古代瓦は三好清超氏に、須恵器は渡邊博人氏に、中近世陶磁器は藤澤良裕氏に、金属製品は久保智康氏に分類や時期について御指導をいただいたが、本節における

記載内容の責任は編集者にある。

赤塚次郎 1996 「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」『鍋と甕そのデザイン』第4回考古学フォーラム

内堀信雄、井川祥子 1996 「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』第4回考古学フォーラム

愛知県史編さん委員会 2015 「第2節 古墳時代の須恵器生産」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系、愛知県

各務原市教育委員会 1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』(各務原市資料調査報告書第4号)

斎藤孝正 1995 「猿投、美濃、美濃須衛窯遍年と他窯遍年対比表」『須恵器集成図録』第3巻 東日本I、雄山閣

渡邊博人 2008 「美濃須衛窯について」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』、日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会

愛知県市史編さん委員会 2015 「第4節 平安時代の瓷器生産」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系、愛知県

愛知県市史編さん委員会 2007 「第2節 灰釉陶器から山茶碗生産へ」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 濑戸系、愛知県

愛知県市史編さん委員会 2007 「第3節 古瀬戸生産の成立と展開」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 濑戸系、愛知県

愛知県市史編さん委員会 2007 「第5節 尾張藩政下の瀬戸窯業」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 濑戸系、愛知県

4) 久保智康氏の御指導による。

5) 渡邊博人氏の御指導による。

6) 藤澤良祐氏の御指導による。

7) 林正憲氏の御指導による。

8) 渡邊博人氏の御指導による。

9) 藤澤良祐氏の御指導による。

表6 寿楽寺廃寺跡内容確認調査出土遺物点数一覧表

	土器類							土製品		石器・ 石製品	金属 製品	合計
	縄文 土器	土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗	中世 陶器	近世 陶磁器	瓦	壁土			
TP 1	0	2	1	0	0	0	5	82	0	0	0	90
TP 2	0	6	6	0	0	0	2	282	0	3	0	299
TP 3	1	3	2	0	0	5	3	429	1	1	1	446
TP 4	0	0	0	0	0	0	3	285	0	0	2	290
TP 5	0	1	1	0	0	0	0	95	0	0	0	97
合計	1	12	10	0	0	5	13	1173	1	4	3	1222

※破片数は接合後の点数

表7 太江区内分布調査採集遺物点数一覧表

	土器類							土製品	合計
	縄文 土器	土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗	中世 陶器	近世 陶磁器		
A区	5	1	11	0	0	0	5	0	22
B区	1	0	33	0	0	0	2	1	37
C区	3	3	91	0	0	0	9	0	106
合計	9	4	135	0	0	0	16	1	165

※破片数は接合後の点数

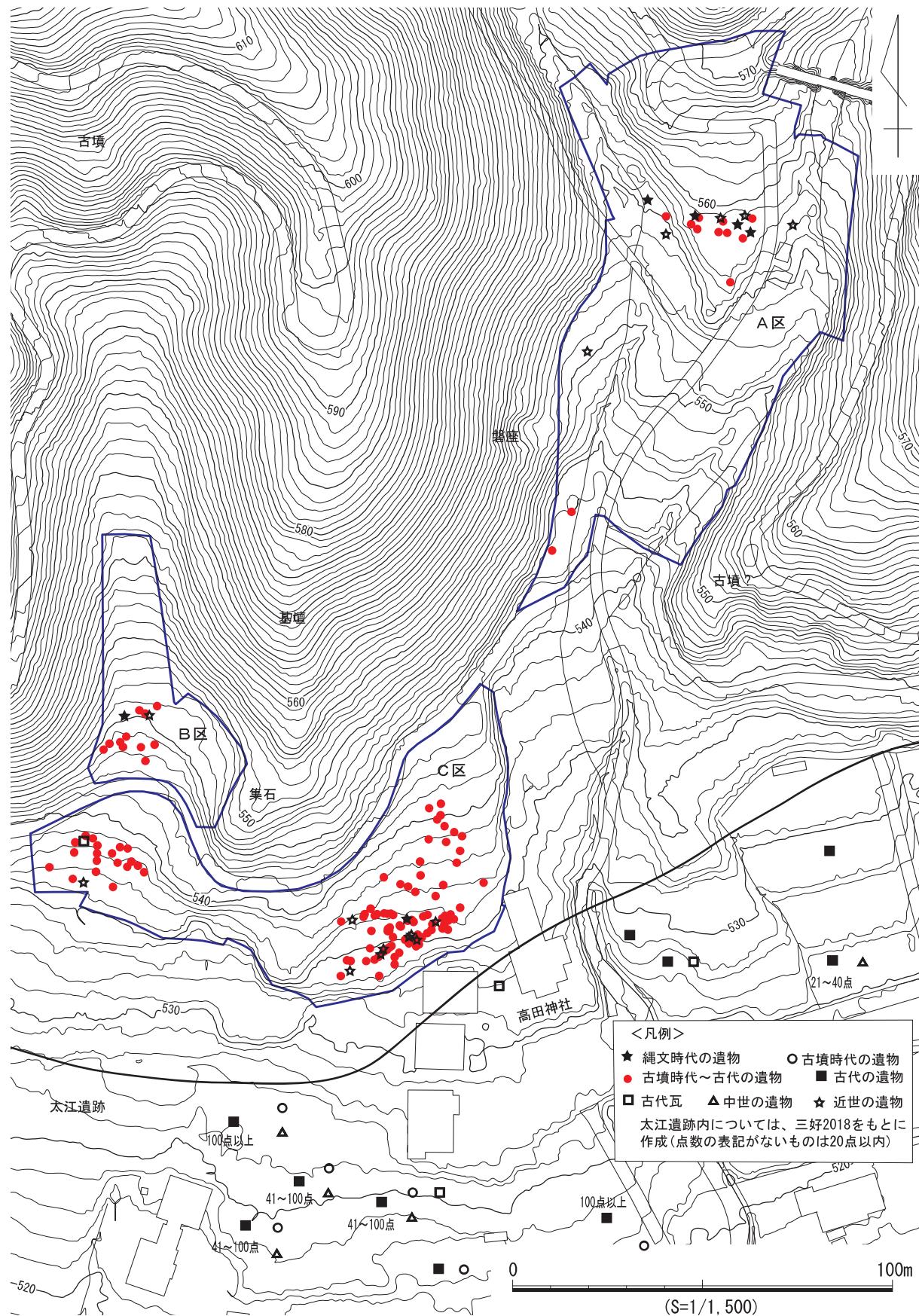


図23 飛騨市古川町太江字猪谷周辺 採集遺物分布

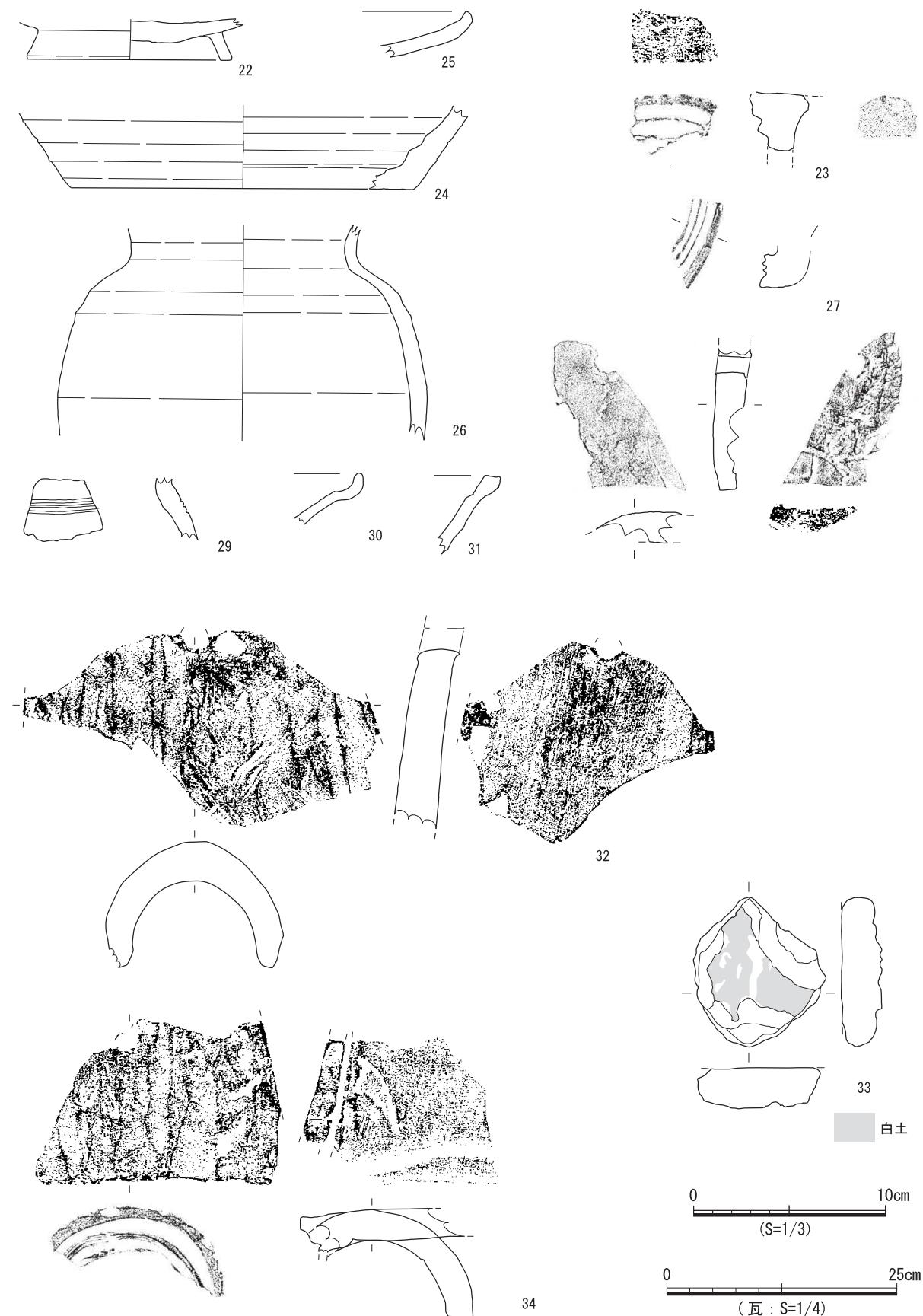


図24 寿楽寺廃寺跡出土遺物（1）

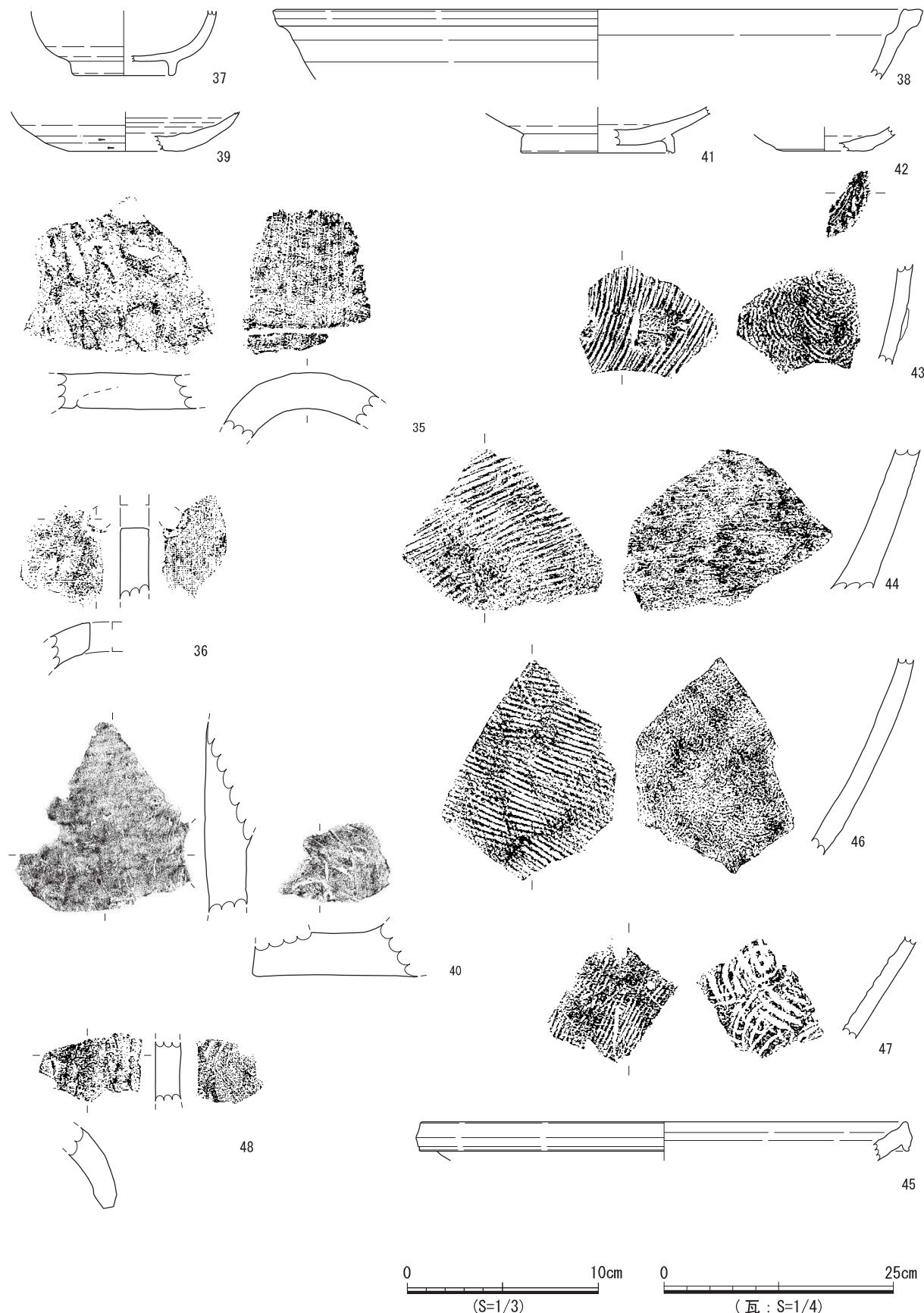


図25 寿楽寺廃寺跡出土遺物(2)、太江区内分布調査採集遺物(1)

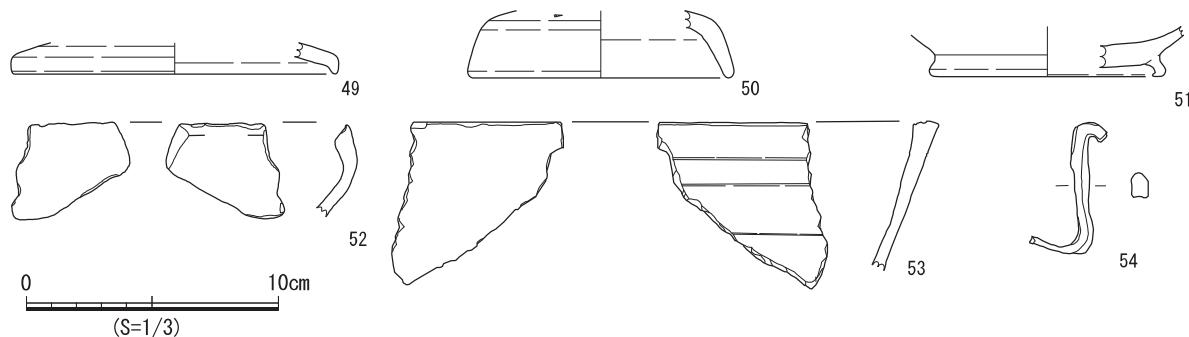


図26 寿楽寺廃寺跡出土遺物（3）、太江区内分布調査採集遺物（2）

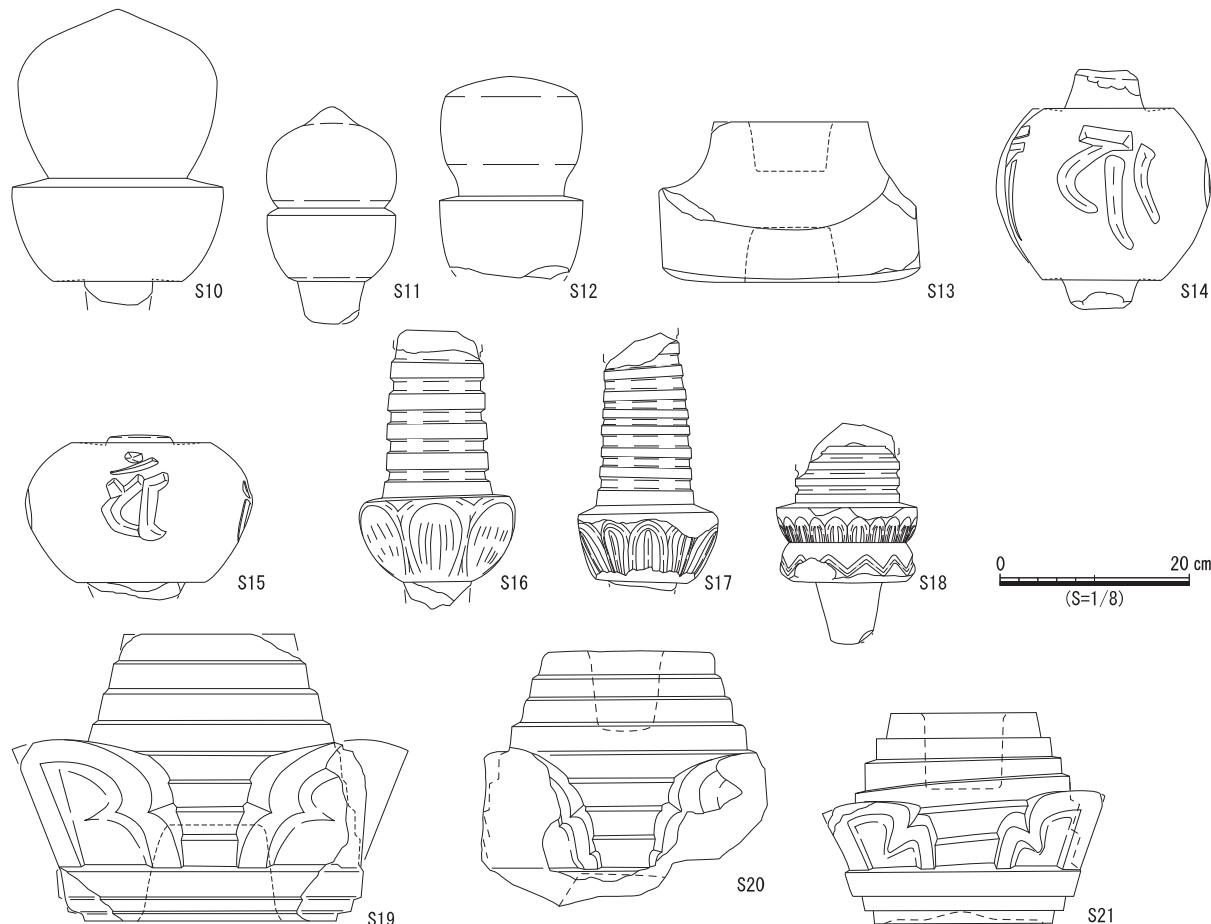


図27 寿楽寺廃寺跡石塔実測図

表8 寿楽寺廃寺跡石塔類観察表

No.	石塔名	部位	大きさ		石材	遺存状態
			最大幅	高さ		
S10	五輪塔	空風輪	22.4	29.0	凝灰岩	柄欠損
S11	五輪塔	空風輪	15.2	(21.3)	凝灰岩	下方欠損
S12	五輪塔	空風輪	13.6	18.5	凝灰岩	ほぼ完存
S13	五輪塔	火輪	27.2	17.0	凝灰岩	軒端欠損
S14	五輪塔	水輪	(21.7)	18.1	凝灰岩	半分以上欠損
S15	五輪塔	水輪	24.0	14.8	凝灰岩	柄欠損
S16	宝篋印塔	相輪	16.4	(27.0)	凝灰岩	上方・柄欠損
S17	宝篋印塔	相輪	15.1	(26.4)	凝灰岩	上方・柄欠損
S18	宝篋印塔	相輪	14.9	(16.9)	凝灰岩	上方欠損
S19	宝篋印塔	笠	(36.2)	30.4	凝灰岩	半分以上欠損
S20	宝篋印塔	笠	(29.9)	(25.9)	凝灰岩	半分以上欠損
S21	宝篋印塔	笠	(28.3)	22.2	凝灰岩	ほぼ完存

※高さに柄は含まない。

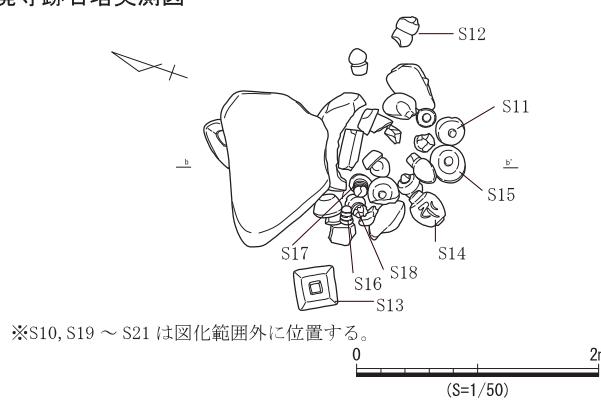


図28 寿楽寺廃寺跡石塔位置図

表9 寿楽寺廃寺跡内容確認調査出土土器観察表

掲載番号	遺跡名	地点名	遺構名	層位	種別	器種	産地	時期	大きさ(cm)			備考	挿図番号	図版番号
									口径	底径	器高			
22	18JR	TP2		13	須恵器	鉢	在地	8世紀	—	10.7	(2.1)	金属器写し、ヘラ切り痕・糸切痕・使用痕有り	24	18
24	18JR	TP2		8	陶器	片口鉢		不明中世か	—	18.0	(4.4)	擂り目無し	24	18
25	18JR	TP2		13	陶器	大皿	備前	桃山時代	(48.0)	—	(2.4)	内面～口縁部外面自然釉薬付着	24	18
26	18JR	TP3		6	須恵器	壺	在地	7～8世紀	—	—	(11.3)	内面に漆付着、焼成不良	24	18
29	18JR	TP3		6	古瀬戸	花瓶	瀬戸	古瀬戸中期I・II	—	—	(3.5)	沈線3条	24	18
30	18JR	TP3		6・9・12	瀬戸	擂鉢	瀬戸美濃	後IV新	(33.2)	—	(2.6)		24	18
31	18JR	TP3		6	瀬戸美濃	擂鉢		登I	(23.0)	—	(4.1)		24	18
37	19JR	TP4		6	陶器	碗	肥前	近世	—	5.2	(3.3)		25	18
38	19JR	TP4		10	瀬戸美濃	擂鉢		登I	34.0	—	(3.7)		25	18
39	19JR	TP5		1	須恵器	坏身	畿内系	6C末～7C初	—	6.0	(2.1)	ヘラ切り痕有	25	18

表10 寿楽寺廃寺跡内容確認調査出土土製品観察表

掲載番号	遺跡名	地点名	遺構名	層位	種別	器種	産地	時期	大きさ(cm)			備考	挿図番号	図版番号
									直径・幅	長さ	厚み・高さ			
23	18JR	TP2		2・12	瓦	軒丸瓦		古代	径(16.0)	—	—		24	17
27	18JR	TP3		6	瓦	軒丸瓦		古代	—	—	—	外縁重弧文	24	17
28	18JR	TP3		6・9・12	瓦	丸瓦		古代	—	—	—	穴あり	24	17
32	19JR	TP4	SK5	M1	瓦	丸瓦		古代	径8.4	長(8.9)	—	穴有り、内外面取り、模骨痕無し、径小さい	24	17
33	19JR	TP4		6	壁土			古代	幅(6.4)	長(8.0)	厚(2.1)	表面に白土塗布	24	18
34	19JR	TP4		6	瓦	軒丸瓦		古代	径(14.0)	長(8.4)	(7.2)	I型式、綻置型、接合痕有外縁素文、内縁有段	24	17
35	19JR	TP4		10	瓦	軒丸瓦		古代	径(14.0)	—	(7.2)	III型式、接合痕有り	24	17
36	19JR	TP4		6	瓦	丸瓦		古代	—	—	—	穴有り	24	17
40	19JR	TP5		2	瓦	鴟尾		古代	—	—	(10.0)		25	18

表11 太江区内分布調査出土土器・土製品観察表

掲載番号	遺跡名	地区	遺構番号	層位	種別	器種	産地	時期	大きさ(cm)			備考	挿図番号	図版番号
									口径	底径	器高			
41	19T1	A	石積上	表探	須恵器	碗		9世紀	—	8.0	(2.4)	黒雀90号窯式に近い	25	18
42	19T1	B	平坦面	表探	土師器	皿		古代	—	4.4	(1.4)	ロクロ土師器	25	18
43	19T1	B	平坦面	表探	須恵器	甕	在地窯産	7～8世紀	—	—	—	横方向取っ手剥がれ	25	18
44	19T1	B	平坦面	表探	陶器	甕	珠洲か	中世	—	—	—	内面横刷毛、厚い	25	18
45	19T1	B	平坦面	表探	須恵器	甕	猿投窯産	7世紀	25.5	—	(2.0)		25	18
46	19T1	B	平坦面	表探	須恵器	甕	在地窯産	7～8世紀	—	—	—		25	18
47	19T1	B	平坦面	表探	須恵器	甕	在地窯産	7～8世紀	—	—	—		25	18
48	19T1	B	平坦面	表探	瓦	丸瓦		7世紀後半	—	—	—	丁寧に凸面を削り面取り	25	18
49	19T1	C	平坦面	表探	須恵器	蓋		7世紀	12.8	—	(1.2)		25	18
50	19T1	C	法面	表探	須恵器	坏蓋	在地窯産	8世紀	10.2	—	(2.7)		25	18
51	19T1	C	平坦面	表探	須恵器	碗	在地窯産	8世紀	—	9.0	(2.0)		25	18

表12 寿楽寺廃寺跡出土金属製品観察表

掲載番号	遺跡名	地区	遺構番号	層位	種別	器種	産地	時期	大きさ(cm)			備考	挿図番号	図版番号
									口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚み)			
52	18JR	TP3		1	金属製品	香炉か		中世か	(34.2)	—	(2.7)	銅製	26	17
53	19JR	TP4		10	金属製品	鉢		中世か	40cm以上	—	(6.5)	銅製、上面に沈線2条、隅丸方形か	26	17
54	19JR	TP4		10	金属製品	釘		古代か	8.0	0.9	0.9	鉄製、角釘	26	17

第5節 寿楽寺廃寺跡出土土製品の元素マッピング分析

1 分析の概要と成果

分析の経緯 令和元年度の調査でTP4の6層より土製品(33)が出土した。この形態の遺物は過去の調査も含めて当遺跡からは初めて出土し、外面が平らで白色の彩色があり内面にはスサが多数混入し、壁土の可能性が考えられた。令和2年度に33の白色彩色の成分分析を実施し、白土であることがわかった。当遺跡では平成11年度当センターの発掘調査で、2号基壇から塑像(爪先)(74-48)が出土しており、白色の彩色や内面にスサが多数混入する胎土が33と類似し、過去の調査では壁土の出土例がなく、出土例がある塑像の一部である可能性も考えられた。令和3年度に74-48の外面に付着する白色顔料について元素マッピング分析を実施し、33の顔料との比較を検討した。

分析の概要と所見 33及び74-48の外面に付着する顔料は白色粘土で、33は二次焼成を受け、74-48は白土塗布が厚くアルミニウム含有量が多いという相異点から別個体のものと考えられる。

2 はじめに

分析対象は、TP4の6層より出土の土製品(33)と、2号基壇出土の塑像(74-48)の外面に付着する白色顔料である(表1)。この2点の元素マッピング分析を行って、白色顔料部と胎土の元素分布の

表13 分析対象

掲載番号	遺構	層位	種別	寸法(cm)		
				長さ	幅	厚さ
33	TP4	6層	壁土	6.5	6.4	2.0
74-48	2号基壇	上層	塑像	7.2	8.2	3.9

差異を調査した。TP4の6層は、白鳳時代の塔基壇の可能性がある黄褐色土層(18~22)の上、表土(1)直下の層にあたる(図20参照)。33は被熱しているとみられるが、発掘調査では焼けた痕跡のある遺構は確認されていないため、元素マッピング分析を行って、白色顔料部と胎土の元素分布の差異を確認する調査を実施した。分析は竹原弘展・藤根久(株式会社パレオ・ラボ)が担当した。

3 試料と方法

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置の一種である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000TypeIIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1.00mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器(Xerophy)である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪い。本装置は、試料ステージを走査させながらの測定により元素マッピング分析が可能となる。

測定は、白色顔料の付着する面に対して非破壊で行った。まず、元素マッピング分析を行い元素の分布図を得た上で特徴的な箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は元素マッピング分析では15kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間15000sを1回走査、パルス処理時間P3にポイント分析では15kV、電流自動設定、ビーム径100μm、測定時間1000s、パルス処理時間P4に設定した。定量分析は標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

4 結果

元素マッピング分析により得られた、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、バックグラウンドのマッピング図を、図版1-1に示す。また、各マッピング図に示したa～dのポイント分析により得ら

れた、土製品(33)の半定量値を表14に、塑像(74-48)の判定量値を表15に示す。

表14 半定量分析結果 (mass%) 【土製品】

位置	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	備考
a	27.49	65.27	0.77	0.26	2.33	0.28	0.58	0.01	3.02	
b	25.59	64.53	1.20	0.32	2.87	0.85	0.72	0.05	3.86	白色部
c	23.88	60.89	1.90	1.04	4.54	0.86	0.88	0.07	5.94	
d	18.08	69.99	1.51	0.66	3.20	0.78	0.52	0.32	4.94	胎土

表15 半定量分析結果 (mass%) 【塑像】

位置	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO ₂	Fe ₂ O ₃	備考
a	34.96	56.23	0.45	1.03	2.69	1.03	0.48	0.06	3.07	
b	30.00	58.86	0.39	1.52	3.55	0.68	0.41	0.24	4.34	白色部
c	18.73	69.24	0.70	1.27	2.83	0.98	0.71	0.08	5.47	
d	16.99	72.71	0.94	0.55	2.12	0.54	0.72	0.06	5.38	胎土

2点ともに、元素マッピング分析では、白色部は胎土と比較して、アルミニウム(Al)の輝度が若干高く、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)の輝度が若干低い高い傾向がみられた。ポイント分析においても、白色部はアルミニウム(Al₂O₃)の含有量が多い傾向がみられた。カルシウム(Ca)は白色部にほとんど含まれておらず、貝殻を用いた胡粉(CaCO₃)等のカルシウムを含む顔料ではない。また、鉛(Pb)も検出されなかったため、鉛白(2PbCO₃·Pb(OH)₂)等の鉛を含む顔料でもない。ケイ素(Si)やアルミニウム(Al)を主体とするいわゆる白土に分類されると考えられる。

白色顔料が白土とみられたため、実体顕微鏡下で極微量採取して水で封入した簡易的なプレパラートを作製し、偏光顕微鏡観察を行った。顕微鏡写真を図版1-2・3に示す。白土の中には、例えば山田寺(村上2002)など、火山灰が利用されている例もあるが、今回採取した試料からは非晶質粒子も観察されたものの、火山ガラスは観察されず火山灰ではなかった。全体的に細かい粒子が凝集しており、例えばカオリンなどの白色の粘土鉱物を主とすると推定される。

以上の結果は、33と74-48は比較的似た特徴を示しており、33が同じ塑像の一部である可能性も考えられる。

5 考察

33及び74-48の外面に付着する白色顔料について分析した結果、白色粘土と推定された。顔料としては白土にあたる。全体的に細かい粒子が凝集しており、白色の粘土鉱物を主とすると推定される。

33と74-48の相異点は、33は二次焼成を受けている点と、白土の塗布が塑像の方が厚い点と、74-48に塗布されている白土の方が33に比べアルミニウム(Al₂O₃)の含有量が多い点で、全く同じ材料ではないといえる。発掘区からの白土塗布遺物の出土はこの2点のみであるため、現時点では土製品の性格については言及できないが、表面が平坦である点から壁土の可能性もあり、塑像である場合は白土の成分の違いから別個体のものであると考えられる。また、壁土である場合は、マッピングで模様が浮かんでいないため、絵画は無いようである。

参考文献

岐阜県文化財保護センター2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』P265

成瀬正和 2004「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要26』

村上隆 2002「山田寺出土壁土の化学的調査—特に「白土」を中心に—」『山田寺発掘調査報告』奈良

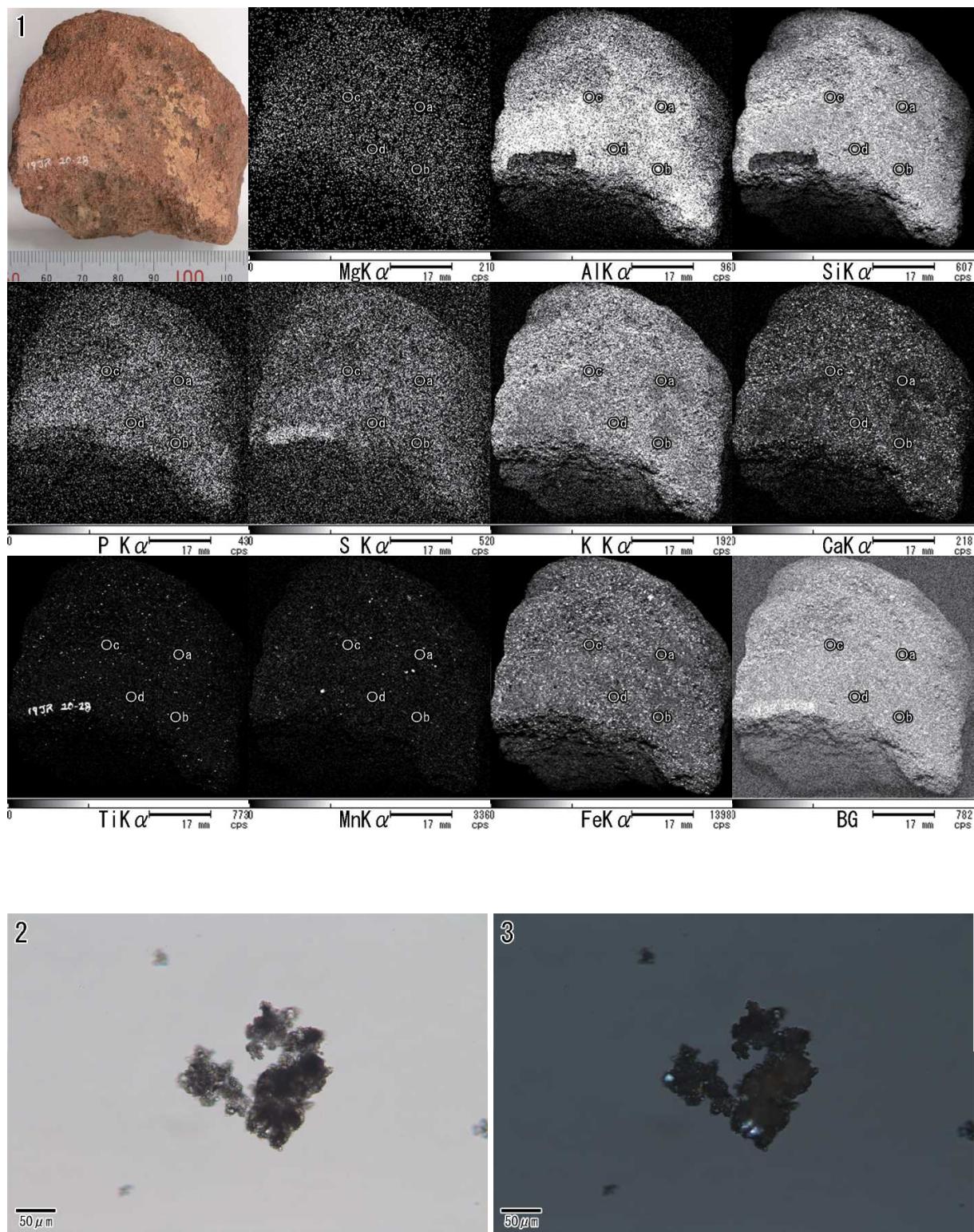


図29 元素マッピング分析結果および偏光顕微鏡写真【土製品】

- 元素マッピング図 (Mg : マグネシウム Al : アルミニウム Si : ケイ素 P : リン S : 硫黄 K : カリウム Ca : カルシウム Ti : チタン Mn : マンガン Fe : 鉄 BG : バックグラウンド)
- 白色顔料の偏光顕微鏡写真 (2. 開放ニコル、3. 直交ニコル)

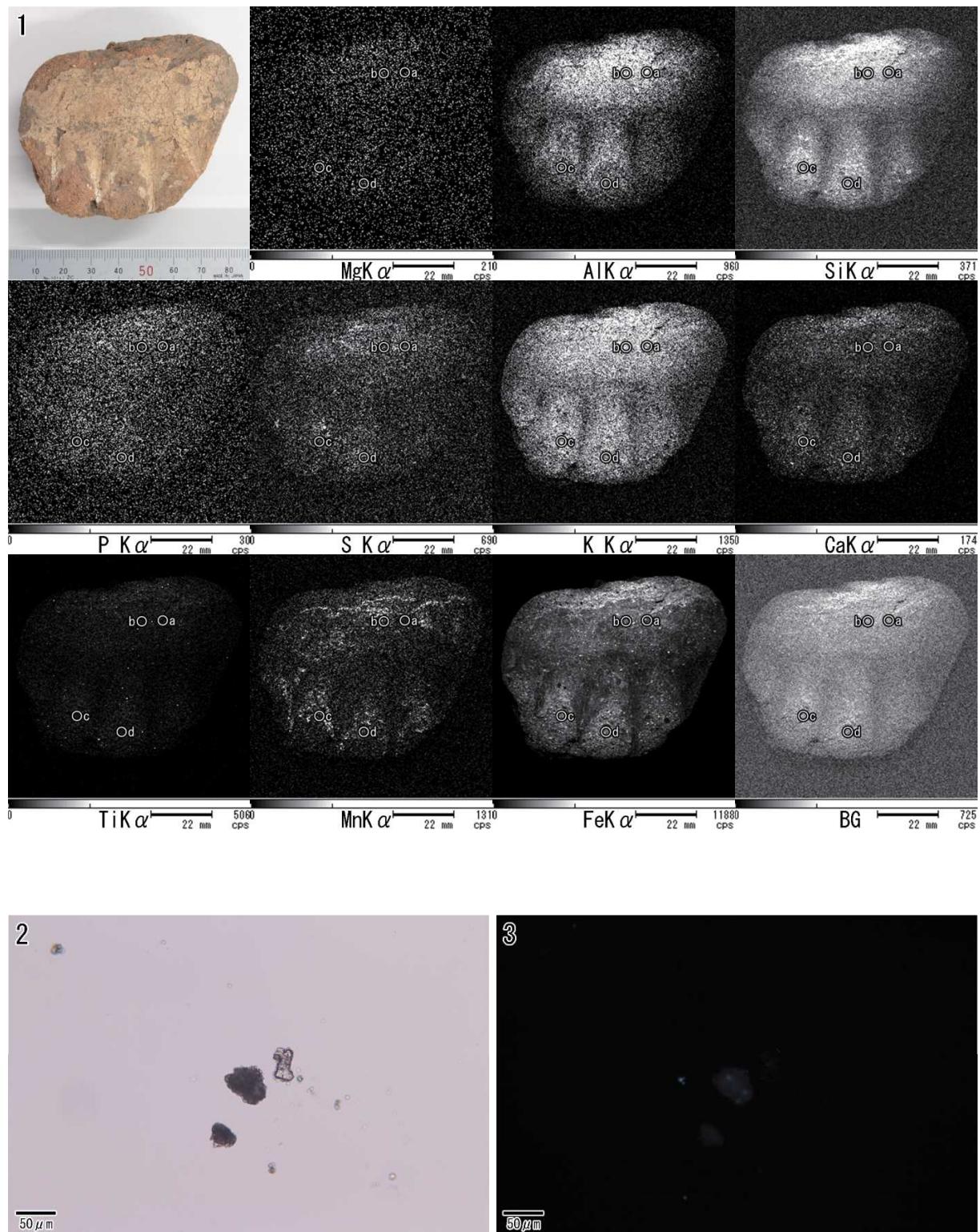


図30 元素マッピング分析結果および偏光顕微鏡写真【塑像】

- 元素マッピング図 (Mg : マグネシウム Al : アルミニウム Si : ケイ素 P : リン S : 硫黄 K : カリウム Ca : カルシウム Ti : チタン Mn : マンガン Fe : 鉄 BG : バックグラウンド>)
- 白色顔料の偏光顕微鏡写真 (2. 開放ニコル、3. 直交ニコル)

第8章 各論

第1節 他地域との比較からみた岐阜県の古代寺院

菱田哲郎

はじめに

岐阜県古代・中世寺院跡総合調査の成果では、具体的な個々の寺院についての情報を集積したうえで、総括として、時期別の推移や立地の状況、また寺院規模などについて検討がおこなわれており、とりわけ実地の踏査による現況確認により、多大な成果が上がっている。こうした成果を受けて、とくに古代の寺院について見えてきたことを中心にその意義を探ってみたい。これまでの研究で明らかになっている畿内をはじめ列島内諸地域の動向や背後にある政策とも関連付けながら、岐阜県の調査で新たに明らかになったことを位置づけ、古代寺院研究の深化につなげられるようにしたい。

1 飛鳥白鳳寺院の立地

国分寺造営以前の寺院については、瓦葺きであることから従来からもその捕捉が進んでいる。その立地についても、著名な弥勒寺跡のように、郡家に隣接もしくは周辺に位置する寺院が多く確認できる。また、それと密接な関係があるが、交通路とも相関が見られ、東山道に代表される陸路のほか、河川も重要な要素となっている。このような状況は、同じ時期の寺院について一般的な現象と言え、各地の豪族たちが檀越になり、氏寺造営を進めた姿を表していると考えられる。

持統8（694）年の5月に諸国に金光明經一百部が送置され、その翌年から毎年、正月に諸国で金光明經の読誦がおこなわれるようになるなど、諸国国府での仏教行事の開始にともなって、その勤修のための僧侶が各國に配置されたと考えられる。そのため、国府周辺の寺院が重要な役割を果たしたと考えられ、大宝令に現れる国師もまた国府周辺の寺院に滞在したと推測される。播磨国の辻井廃寺、丹波国の觀音芝廃寺など、国府所在郡の寺院が早くに僧房をもつこともこのことと関係すると考えられる（菱田 2019）。美濃国の場合、美濃国府が不破郡に置かれ、その遺跡が垂井町で発見されている。その周辺にある宮代廃寺や宮廁寺跡は、国府周辺の寺院としての重要性をもっていたと想定してよいだろう。美濃国分寺が同じ不破郡に位置することも、これら国府周辺の寺院の機能を引き継ぐという点から理解できる。

奈良時代までは各地の寺院に常住する僧侶はそれほど多くはなく、さかんに都鄙間交通をおこなう僧侶の存在が、『日本靈異記』の記述などから復原されている（鈴木 1994）。寺院の瓦にはこうした僧侶の交通が表れていると考えられ、美濃、飛騨については、僧侶の来訪の記録も残されており、中央の大寺系の瓦をもつ寺院についてもこうした点からの検討が必要である。

靈龜2（716）年のいわゆる寺院併合令では、荒れた諸寺の統合や寺院に対する監察が定められたが、ここに国家が寺院を把握する定額寺制が始まったと考えられる。国家からの援助の引き換えに、その管掌を受けることがこの制度の特徴である。額を定めるとあるように、寺名、とくに仏教の教義にもとづく法号を定めることが定額寺の特徴であり、定額寺になった寺院は、斑鳩寺＝法隆寺のように、

地名と法号とを寺名にもつ。美濃国では、もともと地名にちなんだ武儀大寺が弥勒寺とも呼ばれていることに表され、厚見寺が柄山瓦窯の文字瓦からわかるように「中林寺」と呼ばれているのも法号の可能性がある。各地で奈良時代に定額寺になった寺院は、記録が少ないため、確実に挙げていくことが困難であるが、比較的長期に存続する寺院が定額寺に叙せられていると想定でき、補修瓦を多くもつ飛鳥白鳳寺院が該当すると考えられる。

2 奈良時代における山寺の創始

国分寺の造営は諸国の仏教にとって大きな変化をもたらすできごとであった。僧寺に20人、尼寺に10人の僧尼が定員として設けられ、各地での僧侶たちの活動が本格化することとなる。寺院における教学とともに、周辺の山林を舞台とする修行も進められることになったと考えられる。このため、国分寺の近くでは山寺の建立が始まっており、たとえば播磨国では、峰相山鷁足寺や書写山円教寺において奈良時代の遺物が発見されており、こうした寺院の創始が国分寺造営に近い時期にあることが明らかになっている（菱田 2019）。また、比叡山を拓いた最澄ももともと近江国分寺の僧侶であり、滋賀郡の石山にあった国分寺の周辺の山林という立地から比叡山が選ばれたと推測できる。このように、諸国の国分寺僧の山林修行が新たな靈場を拓く契機になった。

美濃国においては、美濃国分寺が位置した西濃地域において古代に遡る山寺が多く存在することが顕著な特徴である。多芸七坊と総称される垂井町から養老町にかけての山中に展開する寺院は、いずれも天平期に遡る創始伝承をもつが、実際に柏尾寺や栗原九十九坊廃寺など、古代に遡る遺物が得られている寺院もあり、これらの創建が奈良時代から平安時代前期に遡ることが推測できる。そして、多芸七坊からは美濃国分寺がよく見え、逆に国分寺から見える養老の山中に山寺が設けられたと言える。これらの諸寺に国分寺僧の活動を重ねることは妥当であろう。より、国分寺に近い位置では、大垣市の円興寺旧境内がある。国分寺の東北2kmあまりの位置にあり、多くの平場が連なり、かなり大規模な山寺であったことが推測されている。残念ながら平場から採集されている遺物は中世以降であり、古代に遡る確証はないが、円興寺の寺伝では延暦期に創建が置かれており、やはり国分寺との関係で拓かれた可能性は高いと考える（堀田 2011）。

多芸七坊や円興寺旧境内など、実際に広大な山寺を形成するのは中世になってからであり、古代の姿を想像することは難しい。これは各地の著名な山寺にも当てはまることがあるが、創始の段階では、草堂のようなささやかな施設があったにすぎなかつたと想像される。発掘調査で明らかな事例では、丹後国分寺の背後の山中にある成相寺が挙げられる。その旧本堂の調査では、12世紀の建物基壇の近くで8世紀末の土器が出土し、寺院の創始がその時期まで遡ることが推測でき、寺伝が記す奈良時代初めの創建も大過ないことが明らかとなっている。中世になって発展する山寺の中で、古代の遺構を探すことは困難がともなうが、成相寺の場合は「日本堂」の伝承がほぼ正しかつたことが発掘調査によって裏付けられている（河森編 2015）。中世以降に上書きされる遺跡から古代の遺構をあぶり出すという努力が重要な成果をもたらすと言える。今回の岐阜県の調査から明らかなように、柏尾廃寺跡や栗原九十九坊跡のように、創建時の地点を遺物から特定できる意義は大きいと考える（加中編 2020）。今後の調査によって、それぞれの山寺の古相を探ることが重要である。

飛騨においても国分寺僧の山林修行との関係が想定できる山寺がある。国分寺の北方5kmほどの位置にある日焼遺跡と三枝城下層遺跡が該当し、前者では10世紀の仏堂が発掘調査で検出され、それに

遡る8世紀後半の遺物が出土している。後者では、北東の平場でやはり8世紀後半～9世紀初めの土器が出土している。規模は小さいと想像されるが、飛騨国分寺の山林修行の場として山寺が拓かれたとみてよいだろう。

山林修行は国分寺僧やその前身寺院の僧侶の特権ではない。数は少ないが、僧侶の止住した寺院の中には修行のための山寺を設けた例が知られており、平地寺院と山寺とが一対となる存在形態が知られている。岐阜県内では、飛騨の石橋廃寺跡と光寿庵跡がその典型であり、距離的に近いだけではなく、共通する瓦をもっており、両者が有機的な関係であったことが明らかである。ここから導き出されることは、平地の寺院に僧侶が存在した場合、そこを起点として山寺の開拓がおこなわれるという法則性である。同じ飛騨の杉崎廃寺跡も伽藍を構成する平地寺院であるが、大型の僧房を設けている点が特徴的であり、ここに止住した僧侶の山林修行が想定できる。周辺の山寺が古代に遡る可能性がないか検討を要する。

3 桓武朝を中心とする仏教の変化と古代寺院

『続日本紀』宝亀元（770）年十月丙申条（28日）によると、山林寺院での読経悔過は、天平宝字八年の勅により禁止されたが、宝亀元（770）年に僧綱の申請により許可されている。こうした中央での紛余曲折はあるが、次第に山林浄處での禪行が重視され、山寺の必要性が高くなっていたと考えられる。平安遷都後は、この傾向がさらに強くなったと考えられ、京内の寺院造営が抑制されるのに対し、周辺では数多くの山寺が平安時代前期に建立されている（梶川 2007）。この状況は定額寺にも表れており、奈良時代末頃から定額寺に列する寺院として山寺がしばしば登場するようになる（菱田 2007）。美濃には3カ所の定額寺が史料に表れ（表16参照）、そのうち一乗山菩提寺は国府所在の垂井郡の菩提山の麓に所在する。また、山県郡の岩井山延算寺は、長良川北岸の山中にあり、大野郡の谷汲山華嚴寺もまた著名な山寺である。菩提寺の沿革では天長元年に空海によって拓かれたとされ、『類聚国史』によれば、天長5（828）年10月3日に肥後の淨水寺などとともに定額寺になっている。延算寺も寺伝では延暦24（805）年に最澄によって拓かれたとあり、『日本三代実録』貞觀六（864）年五月十四日条に「以美濃國山縣郡延算寺、預之定額。」とあり、また平安初期に遡る薬師像も現存する。これらから、新設された山寺がほどなくして定額寺に列せられていく様子がうかがわれる。先述したように、伽藍を構成する平地寺院が早くに定額寺に叙せられていたが、平安時代初め以降、新設の山寺が次々と定額寺になっていく状況が美濃においても確認することができる。この定額寺制の転換は、平地の寺院よりも山寺を重視する政策を反映し、山寺建立が促進される状況をよく示している。

山林寺院での悔過が史料に表れるように、寺院における法会もまた広く普及するようになったと考えられる。南都の寺院では燃灯にともなう灯明皿が大量に出土するなど、法会の痕跡を考古学的に捉えることが可能である。岐阜県内の寺院では、まだこうした資料に恵まれていないが、法会にとって不可欠な淨水を得るという点では、今回の調査においても山寺の中で水場が発見されており、法会の勤修の場として山寺を評価できるようになってきた。このようなことがらも、今後の発掘調査等での解明が待たれる点である。

この悔過を中心とする法会は、9世紀ごろの寺院では人気があった法会である。東大寺二月堂のような双堂は、この悔過を勤修する建物として建てられた。仏堂の前に礼堂をもつ双堂の起源と言える建物を検出した京都府神雄寺跡では、燃灯に用いられた多量の土器のほかに、「悔過」と墨書された土

器が出土しており、礼堂が悔過の場にふさわしいことがわかる（大坪編 2014）。関東地方では、集落遺跡の近くで仏教的な器物を出土する一画が発見されることから、「村落寺院」と呼ばれてきている。こうした寺院においても双堂の建物がしばしば見つかっており、悔過の普及として捉えられている（須田 2006）。岐阜県内の古代寺院では、まだ礼堂もしくは双堂の遺構は確認されていない。今後の検討の中で考慮していく必要がある。

延暦 22 (803) 年に最澄が建立したという伝承をもつ横蔵寺は、その旧境内が山中に残されており、今回の調査においても、本堂やその周辺の平場について詳しく観察されている。発掘調査がおこなわれていないので、寺伝の通り平安前期に遡るかどうかは不明であるが、他の山寺と同様、中世に拡張された広大な寺域の一角に創建時の地点が眠っていると想定される。旧本堂跡は、5間×5間の建物が礎石から推測でき、たとえば延暦寺西塔の常行堂のような三間四面の宝形造りの建物を想定することが可能である。これは天台宗が好んだ形式であることがわかっており（山岸 1990）、最澄の創建を伝える横蔵寺にふさわしいと考えられる。また、この旧本堂の東側には池があり、さらにそこに浄水を供給する泉がある。こうした清浄な水を得られる環境もまた、法会をとりおこなう空間として好所であることを物語る。旧本堂の創建時期は不明であり、塔跡や他の平場の年代など、まだまだ解明すべき課題は多いが、初期山寺の重要な遺跡として評価できよう。

横蔵寺は、比叡山に匹敵する天台宗の拠点となっているように、山寺の多くは天台宗や真言宗の寺院として存続し、とりわけ中世に発展することが多い。史料のうえからもその古代における存在が確かめられる先述の定額寺三ヶ寺も天台宗と真言宗の山寺であり、両宗の浸透を見ることができる。山寺の中には、奈良時代に遡る可能性もつものもあることから、平安時代になってそれぞれの教団の教勢に組み込まれていったと推測される。

表16 美濃国定額寺一覧

寺名	国郡	編入年代	西暦	備考
菩提寺	美濃国	天長 5 年 10 月	828	類聚国史
延算寺	美濃国山県郡	貞觀 6 年 5 月	864	日本三代実録
華嚴寺	美濃国大野郡	延喜年間		※

本表は石村喜英、速水侑、大江篤の文献を参照して作成した。

なお※印は額を与えられたことのみ記される寺院である。

4 岐阜県における古代寺院の数的変遷について

今回の岐阜県の調査では、現存する多くの寺院についても寺伝等をとりあげ、その創建伝承についても検討を及ぼしている。信憑性の問題から、これまで学術的には評価されてこなかった寺伝であるが、上述した定額寺の例のようにある程度の真実を反映していることは十分に考えられるようになっている。改めて調査成果に注目すると、創建年代を平安前期に置く寺院が多いのが特徴的である。総括の寺院数を参照すると、9世紀前半の成立数は62ヶ寺で、古代では8世紀前半の82ヶ寺に次いで多い。もちろん、伝承による成立年代なので、実態との乖離があると想定されるものの、いわゆる白鳳寺院の造営ピークのうち、平安時代前期にもそのピークがあることが暗示される。上述してきたように、岐阜県内には天台宗や真言宗の寺院が多くあり、そのため最澄や空海の事績に結びつけるため、平安時代前期に成立が置かれる場合が多いと想像できる。しかしながら、定額寺の例などは、この時期に実際に成立した寺院があることを示し、また採集遺物によって年代を確かめられる寺院も存在す

る。こうした点から、9世紀前半における寺院数の増加は、ある程度実態を反映しているとみてよいのではないだろうか。

関東地方において、瓦葺きでないいわゆる村落寺院が多く発見され、各地で造立された寺院がことのほか多かったことが明らかになっている。その造立のピークは9世紀にあり、この時期の他の地域の寺院の動向が課題となってきた。畿内やその周辺では、山寺の造営がこの時期に進むこともあり、やはり寺院造営の盛期として9世紀を考えることが可能である（吉川 2019）。瓦というわかりやすい素材を用いない寺院が普及しており、寺院数の推移を遺跡から明らかにすることに困難がともなうが、山寺の調査が進む中で、古代に遡る事例が増加しつつあると言える。また、今回の調査では、9世紀前半に成立したとする寺院のうち、立地が明らかな37ヶ寺中27ヶ寺が平地に立地する寺院であった。関東地方の村落寺院のように、やはり平地に仏教施設が次々と造られている状況を想定できよう。長期に展開する寺院の中に、伝承だけでなく実際の成立が9世紀にまで遡る寺院は意外に多いのかもしれない。今後は、こうした寺院境内の発掘調査が進められ、確実な年代の根拠を得ていくことが課題である。

おわりに

岐阜県内における古代中世寺院の調査は、膨大な寺院を対象に記録を作成し、実地調査をおこなったものであり、今後の基礎資料になることは間違いない。地域における寺院の消長を考えるうえでも重要な材料であり、とりわけ意識しないとなかなか把握が難しい山寺について、基本的なサーベイをおこなった点が注目される。この成果は、各地の寺院を考えていく比較材料になると思われ、とりわけ瓦葺きでない寺院を検討していく際の手がかりとなるに違いない。本稿では、これまで明らかになってきている古代寺院の推移と重ねあせて成果を眺めてきたが、むしろこの成果から新たに古代寺院像を結ぶことを目指すべきかもしれない。多くの学ぶべき成果をさらに精緻化するためにも、さらなる調査検討がおこなわれることを祈念したい。

〈引用文献〉

- 大坪州一郎編 2014『神雄寺跡（馬場南遺跡）発掘調査報告書』、木津川市教育委員会
 梶川敏夫 2007「平安京周辺の山林寺院と安祥寺」『皇太后的山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』、柳原出版
 加中雅章編 2020『栗原九十九坊跡』、岐阜県文化財保護センター
 河森一浩編 2015『成相寺境内』、宮津市教育委員会
 鈴木景二 1994「都鄙間交通と在地秩序—奈良・平安初期の仏教を素材として—」『日本史研究』380号
 須田勉 2006「古代村落寺院とその信仰」『古代の信仰と社会』六一書房
 菊田哲郎 2007「定額寺の修理と地域社会の変動」『仁明朝の研究 承和転換期とその周辺』、思文閣出版
 菊田哲郎 2019「遺跡からみた古代寺院の機能」『シリーズ古代史をひらく古代寺院』、岩波書店
 堀田一浩 2011「元円興寺跡」『大垣市史考古編』、大垣市
 山岸常人 1990『中世寺院社会と仏堂』、塙書房
 吉川真司 2019「古代寺院の数的変遷」『古代寺院史の研究』、思文閣出版

第2節 岐阜県における中世寺院遺構の展開

藤岡英礼

はじめに

近年、寺院調査は発掘調査や地表面観察などを交えて、かなりの進展が見られるようになってきた。ただその多くは限定された山岳地や地域に対して、特定の目的・課題のために取り組まれたものが多く、旧国単位を見据えた公的な分布調査は岐阜県が全国で初めてとなる。結果、古代にくらべて研究が遅れているにも拘らず、多種多様な中世期の遺構が膨大に発見されてしまった。

中世期の寺院研究は、宗教学はじめ文献史学や民俗学でも蓄積が多い分野であるが、実はそれら史資料は膨大な寺院数に対し、ごく一部の限定された事象に過ぎないことが明白となった。もっともこれら遺構をどのように把握すべきか、その方法や視点は明確ではない。

本調査では一応、中世を鎌倉時代から戦国期までとしているが、その年代設定も問題で、吉田一彦氏が述べたように寺院独自の年代観を模索する必要があるだろう¹⁾。

考古学分野を重視した分布調査においては、宗教史的な問題も重要だが、同じ天台宗傘下であっても、石窟などの少ない近江と、多い北部九州といったように地域的な偏差があり、地域社会において寺院がどのような手段で社会基盤を確立したかも問題になろう。無論、寺院を寺院足らしめているのは、宗教性であるとは論を待たないが、実践の場である寺院遺構への眼差しは、宗教史や教学、建築物や造像の諸研究に比べて遙かに遅れている。そこで本稿では岐阜県下に残された膨大な遺構に対し、その展開を軸に様相の整理を試み、ささやかながら今後の調査の布石としたい。

1 中世寺院の前提

寺院において中世と古代の決定的な違いは、寺院（寺社）に関わる人々の多さと、これに裏打ちされた寺院規模の拡大や、寺院数が格段に増加したことである。その原動力となったのは坊院（塔頭）群—平坦面群の展開であり、その差異は山寺で最初に顕在化した。

古代において山寺は、国衙（国府）や国分寺に付属し、国境や郡境の山中といった遠隔地に置かれるケースが多い。8世紀半ばまでには成立した可能性がある池田山系の大滝寺跡（仮称、垂井町大滝、図31）は、美濃府中の北西5.5Kmの人里離れた稜線直下の山腹にある。50×20mの平坦面を最上部に、等規模の平坦面を付属させ、帯状の平坦面と小規模な平坦面を上下に配置しながらも、全体的には110×80mの範囲を方形状にまとめているが、寺内には軸となる直線的な道路はなく、小規模な展開に止まっている。存廃時期は明らかでないが、複数の平坦面を方形状にまとめる手法は、近江国では平安初期に定額寺として年分度者が給せられた金勝寺（滋賀県栗東市、図32）などに共通している。

この手の山寺は10世紀代に廃絶するケースが多い。駿河国（静岡県）と三河国（愛知県）の境にある大知波峰廃寺（図33）は、複数の仏堂にそれぞれ拝堂を付して信仰のバリエーションを増やそうとしたが、結局11世紀代には廃絶してしまう²⁾。そもそも遠隔地の山寺は、平地と山地の二元的関係が期待されており、山寺自体の拡大は意図されていなかった。

ところが、最澄はこれに反駁するように山寺自体の発展・拡大を志向した。比叡山寺（延暦寺、滋賀県大津市）は最澄段階で一定の広がりを確認できるが³⁾、十二年籠山行などは不徹底で教義による寺院の発展に

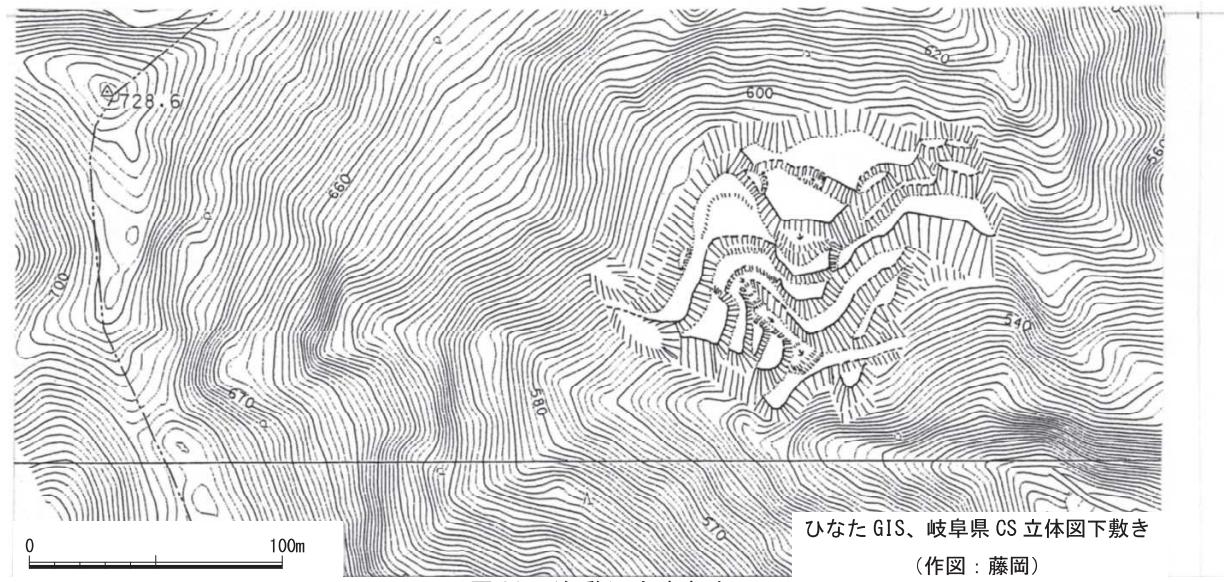


図31（仮称）大滝寺跡

(作図：藤岡)



図 32 金勝寺

(作図: 藤岡)

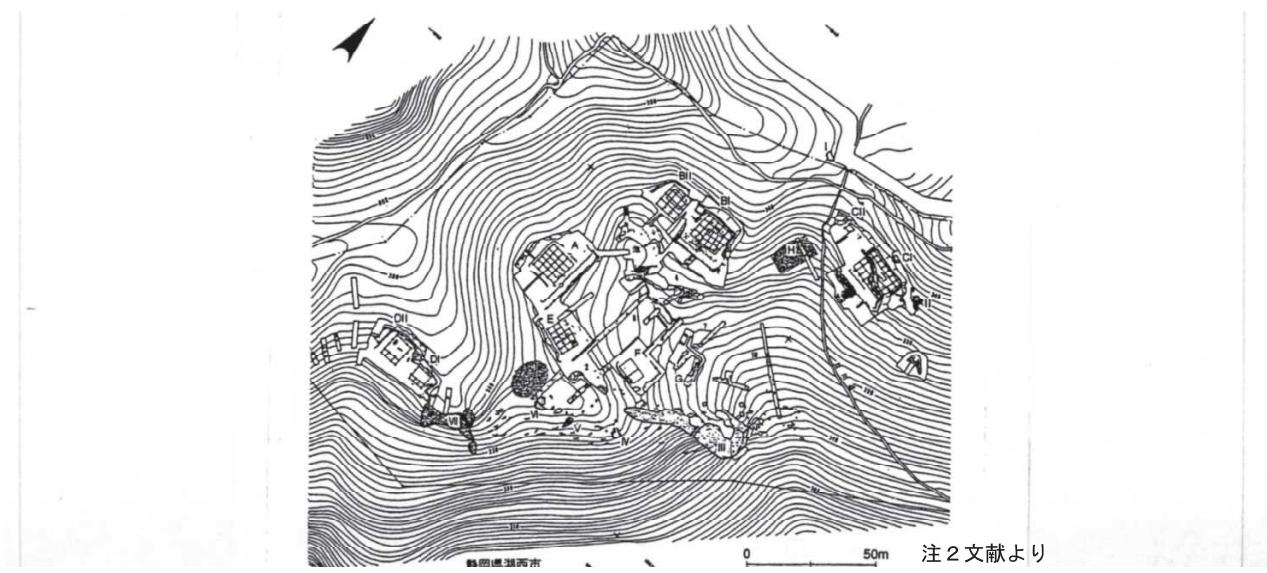


図 33 大知波峠廃寺

は限界があった。最澄は尾根（谷）ごとに本堂の建設を構想していたが、『叡山大師伝』所載の最澄「遺言」（弘仁3（822）年）には、「房をあてがうことについては、上等な者には小竹で編まれた丸い坊を、中等な者には三間四方の板屋を、下等な者には一丈四方の固室を（あてがえ）。房を造る料、修理の分については、秋に、諸国の一升の米、城下の一文の錢を施してもらうことを行なえ」として⁴⁾、山寺への坊人集結とそれに伴う僧房の展開に道筋を付けようとした節があり、これは、寺院に成立当初から内在する世俗勢力の進出を寺内の「房」に包摂することにつながっていく。

最澄の中興伝承を持つ国分寺周辺の山寺—円興寺旧境内（大垣市青墓町）⁵⁾は、中心伽藍周辺に地形に沿った（制約された）帯状の平坦面が付くと共に、諸施設が山内各所に散在するが、その形態は比叡山延暦寺で古い遺構形態を残す東塔虚空蔵尾や檀那院に類似している。この発展に乗り遅れた遠隔地の山寺は廃絶するか、奥の院化し行場圏の一部として象徴的な磐座や石窟などが部分的に機能し続けるか、宿に特化した生き残りを余儀なくされていく。

一方、寺院は山寺の独自的展開とは別に、神祇信仰との関わりを強めていく。残念ながら本調査は現行の神社を調査対象から外してしまい、明治期の神仏分離・廢仏毀釈で廃絶した神宮寺（宮寺）の多くが検討できていない。今後の課題となるが、不備を承知の上で幾つか事例を見ておこう。

国衙（国府）の真南2.5Kmの地点にあり、10世紀には美濃国一宮となっていた⁶⁾南宮社（仲山金山彦神社）には、すでに「中山南神宮寺」という神宮寺が存在していた。当寺は天慶3（940）年の平将門調伏祈祷で、大元師法を修法する泰舜ら（東寺系）と四天王法を修法する明達ら（叡山系）が相乗りしている⁷⁾。このセットは対新羅調伏祈祷と同様だが、四天王法を修した四王寺（山口県下関市）は山岳地に造営されている。南宮社での調伏祈祷も神宮寺内だけでなく山上にも及んだことが想定され、薬師堂直下の平坦面群を山麓に延ばすことで、山寺と平地寺社は接近した可能性がある。

飛騨国は、岐阜県下で最古の寺院建立—「飛騨国伽藍」の記録が知られ⁸⁾、白鳳期から寺院が展開しているが、古代の山寺は飛騨国分寺の付属と目される千光寺だけのようである。同寺は現在も法灯を伝えるが、その遺構は山腹に開いた帯状の中心伽藍に沿って平坦面を4段程度張り付けたもので、面的な広がりは乏しいものとなっている。千光寺は近世には飛騨国一宮・水無神社（高山市一之宮町一之宮）の別当を務めていたが、遠隔でありそれぞれが別に機能した。

飛騨一宮・水無神社は、神体山である「位山（標高1,528m、高山市と下呂市の境にある）」信仰を背景に成立したとされる。位山をめぐっては、当社から東方27.5Kmにある乗鞍岳か、南西7Km地点にある現在の位山とするのか議論が分かれている¹⁰⁾。仮に乗鞍岳説が正しいければ、一宮は広大な行場を背景に抱えた山麓の登攀口を拠点化した可能性があるが、あまりに遠隔に過ぎ、次第に神社と寺院の併存に行場が加わったコンパクトな境内が志向されたと見られる。

次に岐阜県下に多い白山神社と関連寺院の遺構を見ておこう。白山信仰の概要は本編に譲るが、美濃国の大拠点であった美濃馬場—長瀧寺（郡上市白鳥町長瀧）は、寺伝では養老2（718）年に泰澄が勅命により建立した法相宗寺院を、天長5（828）年に天台に改宗したという。ただ白山社（白山神）の名は、天慶から天徳ごろ（938～960）の選集とされる『美濃国神名帳』⁹⁾には登場しない。

むしろ、10から12世紀にかけて本地垂迹説の流布で仏教に習合した白山信仰を、天台宗系の長瀧寺が白山三所権現や美濃下山七社の形で組織化し、勢力拡大と共に泰澄伝承に仮託して、他所に移らせながら拠点を各所に建設したものとえる。下山七社の一つ岩本社（白山神社）は鎌倉末から南北朝期には現在の郡上市

白鳥町中津屋から越前街道・長良川を南下して洲原神社（美濃市須原）に移ったとされる。その遺構は神社と寺を並置し背後に行場を有しており、全体をコンパクトにまとめている。

長瀧寺は建長7（1255）年に立荘された飛騨国河上荘（高山市）の支配では、新宮社（高山市新宮町）に白山社を合祀し、末寺の高雄山神宮寺を並置し拠点とした。ただ当社は、飛騨國府や国分寺が存する平野部に近接するにも関わらず、坊院の大規模な展開は認められない。長瀧寺の周縁末寺・社は石徹白の白山中居神社（円周寺、郡上市白鳥町石徹白）もそうだが、総じて面的展開に乏しい。

京都—伊吹山—越前馬場（白山平泉寺）を結ぶルート沿いにある能郷白山神社（本巣市根尾能郷）は、白山妙理権現を祀る能郷山（標高1,617m）から南に9.5Km下った登攀口に位置する。白山信仰としては長瀧寺の教線よりも古態を有するとされ、現状は本殿と神宮寺跡から構成されている。神宮寺跡は直下に2坊ほどが展開したようだ。背後の尾根上には80×140mの平坦地があり、最奥部には25×30mほどの基壇と目される単体の土壇がある。これが本堂なのか社殿なのか不明だが、社殿と本堂を並置した長瀧寺系とは異なる一体的な運用が為されたのかも知れない。

このように、山寺と平地寺院は距離を隔てて並立していたが、それぞれが自律性を保ちながら接近を遂げた結果、狭い空間の中で多元的な構造を持つ遺構を生むようになったと思われる。

2 直通（直線）道路と平坦面群の展開

山寺と平地寺院は接近したもの、双方の発展は別物であった。ところが法妙寺（桜堂薬師、瑞浪市土岐町）は、12世紀後半から15世紀後半に山麓部が拡大し本堂を構えると、山上域の本堂は旧本堂となり、開山（三諦上人）供養塔を中心に墓地化—靈場・奥の院化してしまう。

南宮山は承久の乱で一時期衰退したが、時期は不明ながら、南宮社や神宮寺を中心据えて、引き込んだ街道を軸に直線道路を複数配し、古代以来の大領神社や宮代廃寺を飲み込む形で社僧・社家を展開させて面的な拡大を試みた。山上の2院（宝珠院・千手院）は、近世に生き残った十坊の中では、執行・別当・三和尚に就けず、寺院運営の中枢から外されており¹¹⁾、山麓部が拡大するにつれて奥の院化—靈場化していく。

南宮山の議論は近世から遡及したものだが、どのような過程で山麓部が拡大するのか、栗原九十九坊跡（垂井町栗原）で見ておこう。この遺跡は「久保双寺」と称し、その名の通り二つの寺域からなる。最初は山上部に二つの中心伽藍を築き、次に双方に付属する栗棘庵跡などの平坦面群を東に伸びる尾根上に離壇状に展開し、最終的には両伽藍を統合する山麓に中核となる平坦面（現在の御嶽神社や墓地周辺）を置き、それに繋ぐ直線道路沿いに方形を志向した坊院群を配置した。山麓部の拠点化は、山上の展開とは異なり、中核施設を除けば構成員の平坦面が比較的フラットに配置される惣寺組織的な編成を行っている。これに各坊院が持つ集団や権益を集落という形で定住・固定化すれば、一気に面的な拡大を遂げるのではなかろうか。何れにしろ直線道路+坊院群（塔頭群）の面的拡大は、山上部の否定の上に成り立ち、山麓部の里山における新しい展開と看做すべきものであった。

次にそれらの内部構造を見ておこう。飛騨国の大威徳寺は、台状地形を呈した山上に大規模な伽藍を築くが、内部や外縁に直線道路で区画した方形状の平坦面群を配置する。特徴的なのはここから外れた谷部に小規模な平坦面群を離壇状に配置することである。このパターンは長命寺（滋賀県近江八幡市、図34）など近江国では広汎に認められ、直線参道沿いの衆徒を中心とする坊院群の合議制（惣寺）から外されるなど、承仕や山伏などの低い立場一下位集団の坊となる事例が多い¹²⁾。

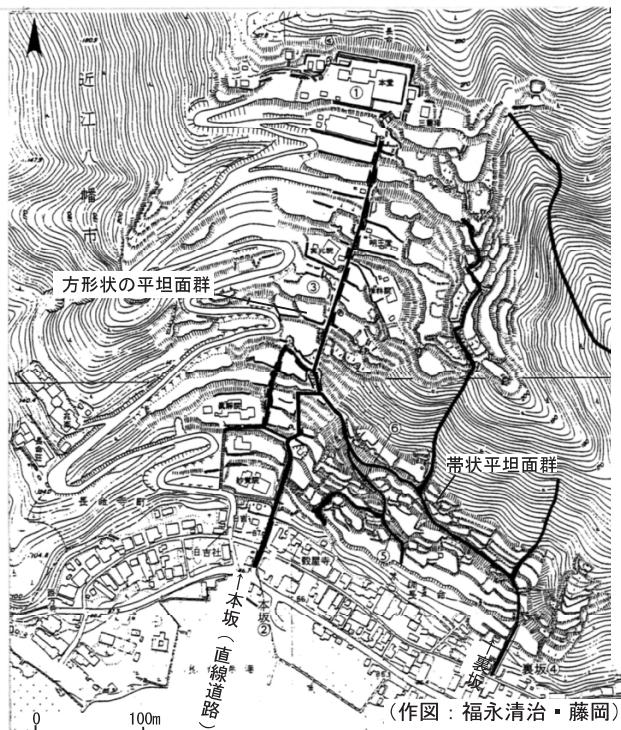


図34 長命寺

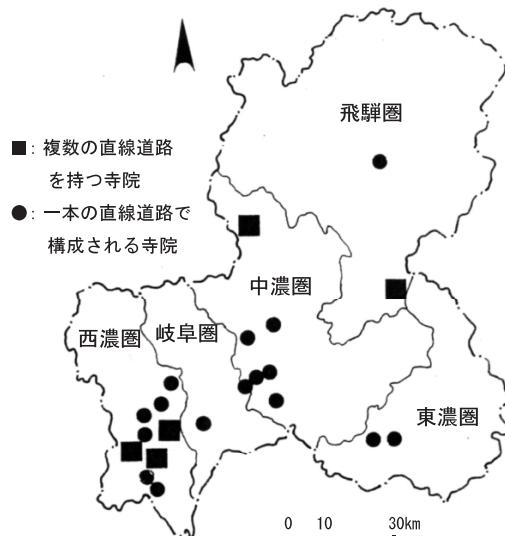


図35 直線道路を持つ寺院の分布

このような遺構は美濃国では、南宮社と長瀧寺など大規模な寺院で認められるが、飛騨国でも大威徳寺にとどまっている。下位の集団が担った機能は、当該寺院とは別のエリアに存在するか、外部にある別の宗派や集団が担ったのかも知れない。一方、西濃の龍泉寺廃寺跡（養老町龍泉寺）では、直線道路+坊院群の最上部にある中心伽藍に墓域が並置され、葬送機能を含めた一元化を遂げて寺域を拡張するパターンに発展する。下位集団のエリアとしてのまとまりは明らかでないが、報告書によれば「12世紀初頭を端緒とし、14世紀後半から15世紀に最盛期を迎え、16世紀後半に急激に衰退した」とする¹³⁾。本堂から山麓に延ばした直線道路沿いに坊院群（独立僧坊群）を構える形態は、台状地形で面的に展開するものと、一本の直線道路を軸にするパターンに大別されるが、岐阜県に多いのは後者である。その造立の下限は何時頃になるだろうか。

養老元（717）年創建と伝える武芸八幡宮（関市武芸川町八幡）は、觀応2（1351）年に国人の森又太郎源泰朝が社殿を再興した際に、本殿・拝殿・鐘楼・隨心門・寓所、別当・神宮寺・大聖寺をはじめ参道沿いに14の堂・庵・寺・坊院を建設し、戦国期までに門前が形成されていた¹⁴⁾。顔戸八幡神社（御嵩町顔戸太平）は、大門のすぐ西に恵觀寺という真言宗の社僧院（別当・神宮寺）が明治初年まであったが、元は鎌倉時代の建長年間（1249～56）に塔頭48ヶ寺を数えた大寺院で、応永27（1420）年に堯仁僧正が中興し、東山道に接続し勢力を維持していた¹⁵⁾。どうやら美濃国の一山寺院の造営は南北朝期から室町期前半をピークとするようだ。

丹波国の和田寺（兵庫県篠山市）は、嘉慶3（1389）年に山上寺院（東光寺）から分かれ、山麓部に別の本堂を営む山下寺院として成立した。移転にあたり本堂から山門へと境内を貫く直線道路を設け、両脇に独立僧房（坊院）群を配している。和田寺の造営には在地の土豪・国人が参与し、子弟を入寺させて所領集積の拠点としながら、守護権力から相対的に独立した勢力を形成しており¹⁶⁾、単純な一山寺院では寺家から在地勢力へと造寺の主体が変化していっている。

ところでこれら一山寺院タイプの分布は、美濃国では西濃の養老・南宮・池田山系で群在が確認できる。

他には中濃の天王山において禅定寺（大矢田神社、美濃市大矢田）と大聖寺（武芸八幡宮、関市武芸川町八幡）が2kmと近接するが、地域の中でも分布に濃淡があり、旧郷・旧郡単位よりも濃密なので、院領や国衙領の影響も考え難い。はたして各寺が何を背景に巨大寺院となり得たか明らかでないが、図35を見ると東濃圏や飛騨国では急激に減少するという特徴がある。

国は離れるが三河国では惣寺組織を持つ普門寺（豊橋市）が、本堂（元・元々堂）の下に坊院群を有し¹⁷⁾、一見すると一山寺院タイプに見えるが、実は下位の僧坊群は方形の独立僧房を志向しておらず、参道に対する出入口が不明瞭である。形態的には栗原九十九坊跡の中心伽藍に付属した平坦面群が拡大したように見える。東国の山寺も地域によって偏差もあるが、一山寺院形態の山寺は近江国以西ほど多くは分布していない。尾張国の分布が今後の課題だが、誤解を怖れずに線引きするとすれば、岐阜・中濃圏辺りが西国と東国の分水嶺になる可能性がある。

一山寺院タイプは平地にも分布する。延暦寺・日吉大社の莊園拠点となった日吉社（神戸町神戸）は、保元元（1156）年に寺領である平野荘（神戸町のほぼ全域）をめぐり、朝廷から延暦寺、日吉社に不法を禁じられるなど¹⁸⁾、12世紀には世俗な色彩を強めていた。その遺構は、神社の直線道路沿いに置かれた僧坊グループと、外縁に置かれた最澄伝承を持つ神護寺（善学院）や密厳寺（勧学院）のグループが、内部に引き込んだ街道を軸に、各々のエリアを拡大させながら、巨大な町場へと発展させたものである。境内の中に存在したことになった町場は、町割りが最澄の手によると伝承し、町場と境内の論理的一体化に結び付けている。

円鏡寺（北方町北方）は東と西の二つの谷組織があったとされるが、坊院群は早くに廃れ、これを浸食する形で境内の外側を走っていた街道沿いの町場が拡大する。一方、新長谷寺（関市長谷寺町）は永正から天文年間（1504～1555）に街道を付け替えて町場の拡大・再編に対処し¹⁹⁾、境内と町場を並置（分離）した。地形の制約がある山地に比べて、平地は集落域が拡大し易いが、町場が境内を凌駕するのは新長谷寺を見る限り戦国期に入ってからだと思われる。

3 小規模寺院の実態～真言律宗と天台談義所から本願寺系寺院へ

鎌倉新仏教にカテゴライズされる入る浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・時宗・真言律宗・禪宗などは、中世後期に教線を拡大した禪宗や、戦国期に活躍した本願寺系寺院を除けば中世を通じて、岐阜県下での活動範囲は限定的で、寺院遺構も単立の小規模なものが多い。それでもこれらが存在し得たのは、惣寺組織から外れた下位にある諸集団を山内に抱えた南宮山や長瀧寺、大威德寺など特別に大規模な寺院が少数で、面的に拡大したとしても寺院の性格に幅が無く内部が等質の集団（平坦面）となる寺院では、例え新仏教系の寺院と宗教観や思想で対立しても、経済的・社会的に相互補完を結び²⁰⁾、社会的な機能を周囲に委ねる必要があつたためであろう。

新仏教系で、比較的活発に活動したのが大和国西大寺を本拠とする真言律宗である。律宗寺院（道場）は、湊・津といった交通の要衝に占地し、土木や物流、三昧などの社会インフラを押さえるケースが多いが、明徳2（1391）年9月の「西大寺諸国末寺帳」によれば、美濃国では金蔵寺（山田）・長康寺（大井）・報恩寺（牛藪）・小松寺（西田原）4つの律宗寺院を構えていた²¹⁾。

このうち、治承年中（1177～81）に平重盛が創建し、天台宗に属したと寺伝する小松寺（関市西田原、現在は黄檗宗）は、街道から少し離れた場所に立地する。その遺構は一町四方に満たない方形状を呈し一般的な武士居館の規模（一町四方）と規模・形態ともに類似する。ただ遺構的な広がりは無く、ネットワーク上

に存在していても、自身が景観上の中核とはなり得なかった。

天台宗系でネットワークが意識されるのは天台談義所である。これは天台教学の系統的な教育機関の一種で、地方寺院や僧侶をつなぐセンター的な役割りも果たした。談議所は一山寺院の構造を持つ寺院に置かれるものがあるが、構成する坊院の全てが談議所の機能を担った訳ではない。一方、旧等妙寺境内遺跡（愛媛県鬼北町）は、談義所機能が寺域をとりまく外縁の行場圏域を含めた広大な世界と一体的に語られている²²⁾。それを踏まえて岐阜県下の談議所寺院を見ておこう。

美濃国の談議所寺院は、尾上寛仲氏によれば国府周辺に展開する寺が多く、垂井・深瀬・府中・下宮・弓削寺・興福寺・中川・芝間（墨俣）・摩尼寺の談所が知られる。多くが所在や実態が不明だが、下宮は日吉社の密巖寺（神戸町）が担うなど、一山寺院の中でも中核的な坊院が担っていたようだ²³⁾。

単立寺院では深瀬談議所・慈明院（天台宗、山県市西深瀬）が該当する。貞治2（1363）年の創建と伝え、国人永井氏が檀那となって菩提寺にしたとされる。近世以降は現在地に移ると見られるが、北東 120mほどの地には山裾を切込む形で、20m四方の平坦面とそれを取り巻く数段の帯状平坦面を配する。直線道路は無く、一般的な小規模寺院のカテゴリーに入るが、類似した形態は柏原談議所で知られる成菩提院（滋賀県米原市）があり、単立型の談議所も注目されよう。もっと慈明院の経営基盤は必ずしも安定せず、15世紀後半には談議所の機能は薄れ、国人永井氏の菩提寺と化したようである²⁴⁾。何れにしろ美濃国の談議所寺院は、旧等妙寺のような一山あげてとはならないようだ。

なお、紙幅の都合上十分に議論できないが、戦国期に台頭する本願寺勢力の遺構に触れておきたい。美濃国の本願寺系寺院の多くは蓮如や証如以降に活発に活動したが、その規模は方一町前後のものが多い。本願寺系寺院（道場）は、河内国や近江国南部といった畿内周辺では、集落の再編に多分に関与し、集落を堀で囲繞した軍事的な環濠集落を寺内町（都市）や農村レベルで形成した。

ところがその分布も近江国北部では、土豪居館や天台山徒の寺院（居館）が、本願寺系寺院に転化する例が他と遜色ないにも関わらず、集落が環濠化した例は極めて乏しく、同名居館群をそのまま（一部は寺院化して）継承して、総体として「寺内」と称する場合が多い。本願寺寺内と一口に言っても、遺構形態は多分に前段階の集落形態に規制されていた。守護などから寺内特権を得る（主張する）にあたり、「寺内」としてのまとまりは必須であったが、これは本願寺系寺院に限らず、禅宗や天台宗寺院にも広汎に認められる。それに對し岐阜県下の本願寺系集落はどのような形態になるであろうか。

図36 は北方町の円鏡寺・門前と隣接する西順寺（北

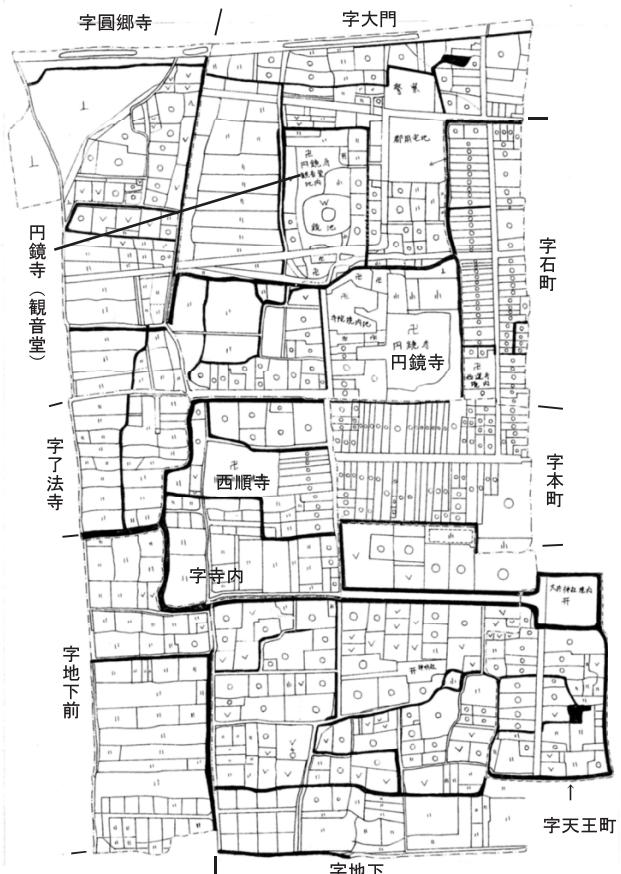


図36 円鏡寺・西順寺（寺内）周辺地籍図

方町清水)を中心とする「寺内」の地籍図である。西順寺はもとは円鏡寺の坊院であり、文応元(1260)年の創建というが、蓮如期に転宗し証如期の天文10(1541)年に西順寺が本願寺本山に近侍するなど、円鏡寺から自立し戦国期には寺内を形成して、円鏡寺門前と寺内は近世を通して都市機能を巡り綱引きを続けていく。

西順寺は、江戸時代に土塁が存在していたが、現地でも地籍図でも土塁が見えない。慶長5(1600)年7月17日付けの寺内掻書には「寺内ふしん(普請)」とあって「惣堀ヲ構」えたようである²⁵⁾。関ヶ原合戦に伴い一時に軍事化したと思われるが、遺構を見る限り軍事的な環濠化は不十分である。

美濃国の本願寺寺内は、仁木宏氏の検討により多くが禁制の発給を受け、一定程度の寺内特権を保持したが、寺内が本願寺系寺院を中心とした軍事集落のまとまりを示すとは限らず、様々な形態があると指摘されている²⁶⁾。一向一揆勢力が強盛な美濃国においても、軍事化(城郭化)はせいぜい寺院境内と木戸口に止まったと見るべきであろう。

一方で僅かだが環濠化した寺内も存在する。大野寺内(大野町寺内)と平尾寺内(垂井町平尾)である。双方とも地籍図上では本願寺系寺院に土塁や堀(濠)が存在し、集落を囲繞する環濠が明らかである。特に大野寺内は、集落を囲繞する環濠の南側に、両側に短冊型地割りを持つ街道が接し、都市的な場が並置されたようだ。それは近江国の尊勝寺寺内(長浜市)にも共通した形態であり、豊臣期の寺内政策に伴って築かれた外發的かつ一時的なものであった可能性がある。このため地元には定着せず、徳川期には暫時解消されていったのかも知れない。

4 岐阜県での禅宗寺院の展開

天台系の一山寺院に換わり、造営のピークを迎えるのが禅宗寺院である。禅宗寺院は、室町幕府で美濃国の初代守護となった土岐頼貞が、父の菩提所—光善寺を臨済宗の興禪寺(廃寺。瑞浪市土岐町市原中島)に改宗したのを機に、美濃国内で広く展開した。守護が開基した禅宗寺院は表の通りだが遺構的な特徴を見ていく。

比較的初期のものとして、土岐氏の開基ではないが土岐氏の別業(別荘)に寺基を構えたものに永保寺(多治見市虎渓山町)がある。暦応2(延元4、1339)年に光明天皇の綸旨で勅願所となり、現在は北側に保寿院・徳林院・続芳院の3院が残るみだが、元は30に及び、永保寺の寺務は塔頭が輪番で務めていた²⁷⁾。永保寺は室町時代を通じて土岐氏の影響下にあり関係者が多数入寺した。境内中心部(伽藍)が土岐川に面した谷部にある一方、塔頭群はそれを見下ろす段丘上にある特徴的な立地をなす。城に比肩する大溝に囲まれた塔頭群は、半町から一町四方規模で、1×2町の中心伽藍より小規模だが、塔頭群の間を通る直線参道は中心伽藍への繋がりが悪く、その自律性が強調される。

三代守護・頼康が開基した瑞巖寺(揖斐川町瑞岩寺)は、北朝の後光厳天皇を匿った小島頓宮で知られる。粕川の河岸段丘上300×200mの範囲に数10に及ぶ塔頭群が展開したが、本堂を軸とする直線道路がなく、全体がフラットに配置されていて塔頭群の凝集性が強調される。瑞巖寺は粕川を挟んだ北岸に市場を臨むが、プラン上はアクセスせず、天台系の一山寺院とは異なる様相を見せている。

土岐氏の守護職は、4代守護の康行が室町幕府将軍の足利義満と対立・没落した康応元(1389)年の「土岐康行の乱」を契機に、西濃の池田郡を拠点としていた土岐頼忠(西池田家)系に交代した。

頼忠開基の寺院では禅蔵寺(池田町願成寺)が知られる。当寺は図化されていないが、元は堂塔に加えて

16の塔頭があり、この中の6院は土岐一門の菩提寺として建立されたという（『濃飛両国通史』）。その遺構は30×50mを測る中心伽藍の中心軸が惣門や山門に直結せず、築地塀や石垣などで屈折させながら一折れさせる宗風様式²⁸⁾とするため、中心伽藍の求心的な拡大に制約があった。延ばされた直線（直通）道路沿いには4段ほど。そして中心伽藍の周縁に幾つかの平坦面があるが、全体は170×130mの方形状のまとまりの中にあることから、禅宗寺院の求心性とは中心伽藍の周縁に塔頭を置くもので、天台系に多い直線道路を外に向かって延伸する展開とは別物となっている。その上、愚渓寺旧境内（御嵩町中）のように、境内最奥部に置かれた中心伽藍に対し、尾根上の高台に塔頭群が見下ろすように展開するものが多く、本堂と塔頭エリアの規模が比肩する点は変わらない。

かかる禅宗寺院の在り様は、隣国の近江国にある永源寺（滋賀県東近江市、臨済宗、図37）も同様である。延文6（1361）年に近江国守護六角氏頼が寂室元光を迎えて開基した同寺は、愛知川の河岸段丘に面した300×70mの中心伽藍の周囲に、「四派本庵」と呼ぶ末寺が近在にあった。四派本庵には塔頭の多くが付属しており、中心伽藍から相対的に独立し、規模も中心伽藍に比肩する。しかも地域の有力国人が参与していた。中心伽藍には付属の塔頭ではなく相対化されていた²⁹⁾。

禅宗寺院は中央寺院に連なる重層構造にあり師壇関係も華やかだが、官寺の寺格である五山一刹（後に準十刹）—諸山に連なったとしても、草創期の永保寺を除けば特別に寺基が巨大になる訳ではなく、寺格と面的発展は別物であった。むしろ禅宗寺院は中心伽藍の求心性よりは、塔頭群の凝集が志向されたといえる。塔頭群は中心伽藍を相対化しつつも集結することで、寺域を巨大化するのである。

ところで、応仁の乱で大徳寺が衰退すると、美濃国では大徳寺の末寺で林派と扱われていた妙心寺派が教線を拡大する。妙心寺派の動向は省略するが、この流れはこれまで守護土岐氏から、守護代斎藤氏への実権交代に位置付けられたものもあった。しかし京都妙心寺の復興や美濃国での造寺に守護が開基したものも少なくなく、守護・守護代体制による宗教施策と見るべきであろう。

もっとも妙心寺派への転派は、同派が寺格に囚われないこともあって、国人や在地有力者の帰依と造寺を誘引したと思われる。不二庵（八百津町黒瀬。通称は古大仙寺）は、大安寺（各務原市鶴沼。6代守護・土岐頼益が開基）の末寺として、木曽川水運の湊町—黒瀬を抑える地に、古田彦右衛門信正が斎藤氏の支援の許で建立したと言う（

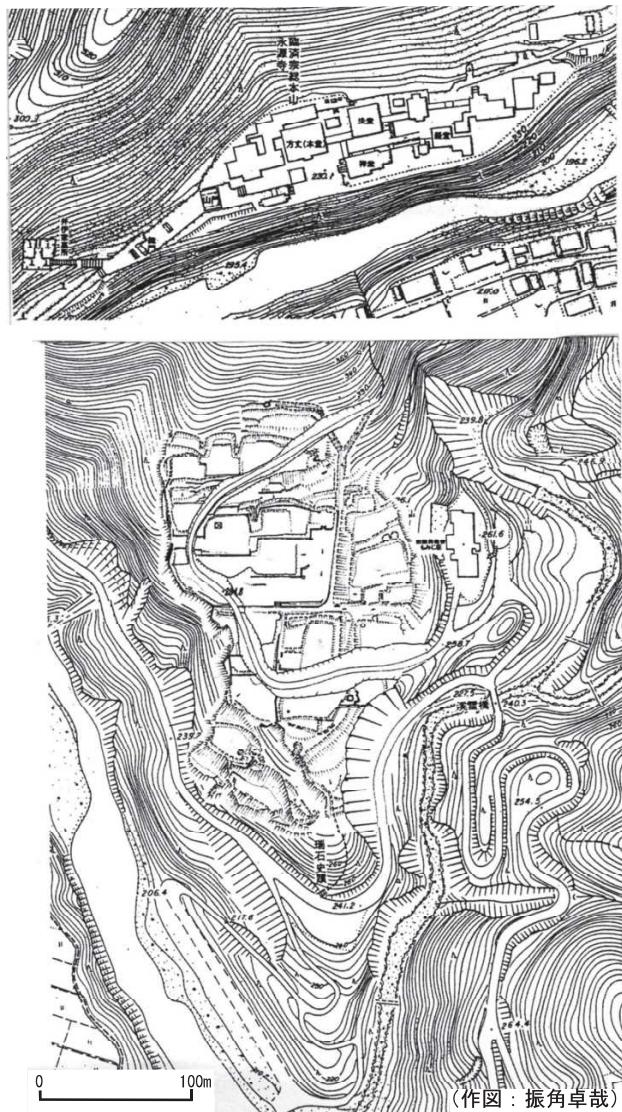


図37 永源寺（上）、識虛庵（下）

〔作図：振角卓哉〕

『美濃大仙寺史』。庵と称しながら「東西四十五間、南北六十間」と一町前後の規模を持つが³⁰⁾、明応元（1492）年に妙心寺派の東陽英明が不二庵に入寺（古大仙寺）。明応10年に大仙寺に改号され、永正元（1504）年に土岐氏政房の帰依で土岐氏の祈願所となる（『美濃大仙寺史』）。この動きを見ると守護権力は、土豪・国人らが創建した寺院を、守護の拠点寺院の許に妙心寺派として末寺化し、さらに土岐氏の祈願所に据えて、守護権力を核とする宗教体系に位置付けようとしたことがわかる。これは点在する物流拠点の掌握に結び付き、時宗や律宗の得意とした津・港といった交通・物流の掌握とは競合したと言える。

本節の最後に武家による寺院への進出について触れておく。武家権力（勢力）は応仁の乱期に西軍方として影響を及ぼした、守護代的な斎藤妙椿は、文明5（1473）年からの木曾氏らの侵攻に対し、顔戸城（御嵩町顔戸）を顔戸八幡神社の直線道路横の段丘崖に築城し、文明12（1480）年に死去するまで在城した。城の規模は150×167mで、城内の開墾は著しいが、大規模な横堀で城域を囲繞する。ただ妙椿以後は拠点城郭としての活用ではなく、寺院勢力に対する圧伏には至らなかった。

武士勢力は、宗教的権威を当て込んで聖地への進出を計り、結果、聖地における城郭化を目論んだとされる。しかし美濃国では聖地部分への面的築城した事例は顔戸城や大桑城くらいであり、山寺よりも高い山地に城が占地していたとしても、支城関係にあったかは論証できない。

飛騨国で一山寺院と呼べるのは、大威徳寺、水無神社がある。禅宗では安国寺（高山市国府町西門前町）くらいたが、その分、テクニカルな縄張りを持つ山城が多数分布し美濃国とは対照的な様相を示す。高田神社・寿楽寺廃寺跡（飛騨市古川町太江）の境内に国司姉小路家綱が拠点として築いたとされた十樂館は、痕跡すら見出せず、寺院と城館は不干涉の印象すらある。

岐阜県下では聖地の否定（武家の城の進出）は不十分であった。美濃国の守護・守護代にしても、土豪・国人らの拠点城郭を支城の形で系列化するよりは、先述のように妙心寺派をテコにした末寺・祈願所化の方がスムーズであり、求心的な軍事体制への転換には至らなかったと思われる。

5 まとめにかえて

以上、遺構展開の視点から岐阜県下の中世寺院について、他地域との事例を交えながら素描を試みた。許より議論としては浅薄であり、宗教的な議論を避けた上に、調査自体が神社や磐座・石窟、行場、墳墓窟などを十分に扱えず、白山や木曾御嶽、乗鞍岳、高賀山など靈場への眼差しを欠いている。調査範囲を含め、論じ残した課題もあまりに多い。

とは言え、宗教史や民俗学、歴史学が取り残した部分も大きく、それを極力、宗教史に抛らずに遺構の視点から解釈しようと模索した。様々な宗派、集団が集まる平坦面は、土木技術の領域であり、あまり顧みられないが、宗派を越えた横断的かつ普遍性を持つと同時に、これらがどのような意思の許で建設されたのか、宗教勢力の社会化の視点で見る必要があるだろう。その中で各地域、引いては日本の中の地域性や時期区分が見えてくる筈だが、岐阜県の分布調査はその挑戦の第一歩といえよう。

注

1) 吉田一彦「日本仏教史の時期区分」大隅和雄編『文化史の構想』吉川弘文館

2) 後藤建一 2007『日本の遺跡 22 大知波峠廃寺跡』同成社

3) 久保智康 2001「古代山林寺院の空間構成」『古代』110

表17 美濃国守護土岐氏関係の禅宗寺院

番号	開山 (守護)	山(院)号 寺院名	所在地 (旧都名)	禅宗寺院開基当初				中興・転派			
				禅寺創建時期	開山	宗派	寺格	中興時期	中興者	宗派(転宗)	
△	1	光衡	吟鶴山永松寺	土岐市肥田町 浅野	文治元(1185)年				万治2(1660)年	雲居国師	臨濟宗妙心寺派
※	2	光衡 (頼貞)	天徳寺	瑞浪市土岐町 一日市場	不明		臨濟宗				臨濟宗妙心寺派
	3	光衡	光善寺 (興禪寺)	瑞浪市土岐町 中島	建武年中 (1334~36)か	仏光 又は 夢窓疎石	臨濟宗				
	4	①頼貞	瑞雲山定林寺 (定林寺跡)	土岐市泉町 定林寺	建武年中 (1334~36)	無学祖元	臨濟宗 仏光寺派	十刹			
※	5	①頼貞	玉林山龍泉寺	土岐市泉中窪町	不明		不明		不明	不明	
※	6	①頼貞	天徳寺	瑞浪市土岐町 一日市場	不明	一寧一山	臨濟宗か				
	7	①頼貞	神潤山龍門寺	岐阜市神光→ 七宗町神潤	延慶元(1308)、 康応元(1389)	一寧一山	臨濟宗 一山派	諸山	天文24(1555)年	光庵宗鑑	臨濟宗妙心寺派
※	8	①頼貞	上野山正光寺 (観音堂)	揖斐川町谷汲 岐礼字堂ヶ洞	不明	除正光坊	単立		建武年間	夢窓疎石	
△	9	①頼貞	松雲山 示現寺	七宗町上麻生 葛屋内	不明	実性	臨濟宗		暦応元(1338)年		臨濟宗 大徳寺末 妙心寺派
	10	②頼遠	老梅山東香寺 (東光寺)	富加町大平賀	正和4(1315)年	夢窓疎石	臨濟宗 南禅寺派		寛文10(1670)年	金嶺	臨濟宗妙心寺派
△	11	②頼遠	妙楽寺	川辺町上木田	暦応2(1339)年	夢窓疎石	臨濟宗				
	12	②頼遠	廬山大悲院	美濃市洲原立花	安元元(1175)年	覺阿			暦応2(1339)年	夢窓疎石	臨濟宗
	13	②頼遠	正伝寺 (米田寺)	八百津町和知	暦応3(1340)年	夢窓疎石	臨濟宗		明応元(1492)年	東陽英朝	臨濟宗妙心寺派
	14	③頼康	萬松山瑞巖寺	揖斐川町瑞岩寺 字沼	延元年、 建武3年(1336)	大林善清	臨濟宗		寛永年間(1624~ 44)	空山	臨濟宗妙心寺派
	15	③頼康	大貴山長國寺	揖斐川町日坂 字中村	応永元(1394)年		天台宗		応永12(1406)年	天谿嶺綴	曹洞宗
△	16	③頼康	五光山(靈葉山) 正法寺	岐阜市小野	觀応2年	嫩桂正榮	臨濟宗	諸山	寛正6(1465)年	⑧土岐成頼・ 雪江宗和	臨濟宗妙心寺派
△	17	④康行	碧雲山永安寺 (竜安寺)	美濃加茂市 伊深町寺洞	建徳2・ 応安4年(1371)	僧海禪師	臨濟宗		慶安~寛文頃		臨濟宗妙心寺派
△	18	⑤頼忠	洞雲山長藏寺	美濃市上野	延文元(1356)年	平心処齊 (覚源)	臨濟宗 円覚寺派		江戸中期		臨濟宗 妙心寺派
	19	⑤頼忠	仏巖山禪藏寺	池田町願成寺	延文元(1356)年	平心処齊 (覚源)	臨濟宗				
	20	⑥頼益	齐北山大安寺	各務原市鵜沼 大安町	応承2(1395)年	笑堂常訴	臨濟宗 大応派 (南禪寺派)		慶長元(1596)年	春叔	臨濟宗妙心寺派
※	21	⑦持益	南豊山承国寺	各務原市 鵜沼古市場	享徳~ 康正年中 (1452~55)	純仲全銳	臨濟宗 夢窓派 (建仁寺派)	十刹			
	22	⑧成頼	善恵寺	八百津町細目	貞応2(1223)年	証空	浄土宗		享徳元(1452)年	土岐成頼・ 守護代斎藤妙椿	西山淨土宗
△	23	⑧成頼	龍雲山瑞林寺	美濃加茂市蜂屋 町上蜂屋 (加茂郡)	文明年中 (1469~87)	仁清宗恕	臨濟宗 妙心寺派				
	24	⑧成頼	金宝山瑞龍寺	岐阜市寺町	応仁2(1468)年	悟溪宗頓	臨濟宗 妙心寺派	準十刹			
※	25	⑨政房	承隆寺	岐阜市茜部	明応~ 永正年中 (1492~1504)	不明 (東陽英朝か)	臨濟宗		明暦3(1657) 年	愚堂未寛	臨濟宗妙心寺派
	26	⑨政房	瑞応山南泉寺	山県市大桑	永正14(1517)年	仁岫宗寿					
	27	⑨政房	松雲山法泉寺	閔市武芸川町 谷口		仁岫宗寿	臨濟宗 妙心寺派				
	28	⑩政頼 (11・12) 頼芸	玉樹山立藏寺	閔市西日吉町 (武儀郡)	宝永2年		曹洞宗				
△	29	⑫頼純	南泉寺	山県市大桑		仁岫宗寿					

※現在廃寺となっているもの
△近世以降に移転したもの

- 4) 大竹普訳 2021 『現代語訳 最澄全集 第一巻—入唐開宗篇』国書刊行会
- 5) 大垣市青墓町。『叡山大師伝』の美濃高野山寺にあたると考えられている。
- 6) 『延喜式』「神祇神名帳」に拠る。
- 7) 『貞信公記』天慶3年(940)正月廿二日条
- 8) 『続日本紀』朱鳥元年(686)10月条
- 9) 「美濃国神名帳」比叡山兜率谷鷦鷯院所蔵。翻刻は岐阜県郷土史研究協議会、1979年による。
- 10) 藤枝和泉・川上隆編 1998 『飛驒一宮水無神社の歴史』水無神社
- 11) 垂井町 1996 『新修垂井町史 通史編』
- 12) 中世の一山寺院は、土木技術の発展により山腹において地形を克服した方形状の平坦面を形成していく。その成立時期は確定し難いが、衆徒層を中心とする独立僧坊（本堂とは別の本堂・本尊や庫裏などを持ち、参道に対して門や築地を構え、独立的な空間とした坊院）と、前時代と同様に小規模で削平の甘い、帯状の平坦面に分化していく。後者には承仕や聖、山伏など、惣寺組織（合議制など）から外された下位の集団が居住する坊が充てられた。近世には独立僧坊とは遜色ない景観に仕上がっていく。
- 13) 養老町教育委員会 2016 『竜泉寺廃寺跡分布測量調査報告書』養老町埋蔵文化財調査報告書第10集
- 14) 武芸八幡／衆僧中に宛てた、永禄10年(1567)10月の織田信長の寺社領安堵判物(折紙)には「寺社領并門前之諸役、如前々、不可有相違」とある(武芸八幡宮所蔵、武芸川町史713頁)。
- 15) 御嵩町史編さん室 1992 『御嵩町史 通史編上』御嵩町
- 16) 今田町教育委員会 1998 『和田寺・西光寺山—今田町の山岳寺院遺跡』今田町文化財調査報告書第四集
- 17) 豊橋市教育委員会 2016 『普門寺旧境内』豊橋市埋蔵文化財調査報告書114
- 18) 神戸町 1969 『神戸町史 上巻』
- 19) 関市教育委員 1996 『新修関市史 通史編』
- 20) 河内将芳 2004 「宗教勢力の運動方向」『日本史講座 第5巻』、東京大学出版会
- 21) 松尾剛次 2017 『中世叡尊教団の全国的展開』、法藏館
- 22) 鬼北町教育委員会 2021 『史跡等妙寺旧境内2』鬼北町埋蔵文化財調査報告書11
- 23) 尾上寛仲 2014 「柏原談議所の成立」他(尾上『日本天台史の研究』、山喜房佛書林)
- 24) 永井氏の許で同寺に残された寄進状には、1463～81年にかけて「談義所前」、「談義所亥ノ道キワ」、「談義所西」と称した田地があり、15世紀後半に談議所機能が衰え、永井氏が菩提寺に再編した可能性がある。(高富町史資料編)。
- 25) 老泉量 2020 『戦国期美濃地域本願寺教団史の研究』龍谷大学学位請求論文
- 26) 仁木宏 2021 「中近世移行期美濃国における権力と都市—織田権力位置づけの試み」(仁木宏他編『天下人信長の権力構造』、高志書院)
- 27) 多治見市 1980 『多治見市史 上』
- 28) 大仙寺 1981 『美濃大仙寺史』
- 29) 振角卓哉 2008 「瑞石山・永源寺」「退耕庵」「仏日山・退藏寺」『『忘れられた靈場をさぐる』3、栗東市文化体育信仰事業団)
- 30) 不二庵の規模は『大仙寺文書』(「寛文十四年稻葉方通大仙寺領安堵状」)による。なお、禪寺の規模を議論していないが、愚溪庵宛て土岐政房書状(年次、『愚溪寺文書』)では「当庵事以庵号被成寺号候者可然候哉、近年衆僧数多在寺の由候目出候」として、守護代は寺とよべる規模に関わらず庵と号するのは「可然候哉」と容認していた。

第3節 文献からみた古代・中世の寺院

上川通夫

はじめに

考古学による岐阜県域（美濃国と飛騨国）の古代・中世寺院の調査数は、1,918 か寺に及ぶという（近世以降成立を含めると 3,464 か寺）。おそらく大方の文献史学者がおぼろげに抱いているイメージからすれば、思いもよらぬほど多い。伝来・残存する古文書や古記録を手がかりとする、いわばピントの実態解明の背後に、どれほどの史実が存在したのかを想像する上で、認識の基準を与えたことに目を見張ると同時に、むしろ飛躍的に認識をあらためる必要さえ促された思いがする。全国の実態への想像をも喚起するこの報告内容は、今後の学術調査の方向性を示すとともに、寺院史や仏教史の問題としてだけではなく、古代史・中世史の実態と意味を知るための豊かな学術情報として長く威力を発揮するに違いない。またその意味で、古代・中世の寺院遺跡が歴史遺産として顧みられ、創造的な歴史意識の身近な根拠となることが期待される。

そのように考えた上で、この稿では、文献史学の視点と方法を用い、考古学によるこの報告書との接点を探ってみたい。ごく粗雑な論述にならざるを得ないが、歴史的世界を再構成する手がかりになればと思う。ここでの視点と方法は次の通りである。

寺院遺跡は寺院史や仏教史の痕跡そのものである。岐阜県域という地理的・行政的な区分は、地方史という枠組みを想起させる。ただここでは、寺院や仏教を歴史的、社会的な産物として捉え、それらをとり巻き成り立たせる時代社会の動向全体を視野に入れるようつとめ、それらを支えた歴史的主体を念頭に置く。寺院は僧侶の住む仏教の拠点であるだけではない。たとえ高所の山寺であっても、脱俗孤絶の非社会的な純宗教空間とは言い切れず、政治・行政・交通などとの関連があり、近隣の地に生活する多様な生業の俗人と直接・間接の関わりをもっていた。はたして住民にとって寺院とは何であったのか。そのような問いを意識してこそ、今日、身近な歴史遺産としての価値を見いだすことができる。残された断片的な文献は多くを語らないが、寺院や仏教を政治的、経済的、社会的に支える活動や仕組みに関する記事に特徴がある。いわば外側に関することである一方、歴史社会の本質に関する断片記事であることもある。

そこで、古文書や古記録を博搜した『岐阜県史 資料編』などの自治体史を手がかりに、特に經典等に書き加えられた奥書、仏像の像内銘文、寺院の由来を記す縁起などに注目し、寺院の歴史的な環境を探る。そこからは、古代の国郡制や中世の荘園制といった、行政・土地制度を軸とする社会編成の一部が垣間見られる。さらにその基礎には、住民生活の砦である村があり、その立地条件は生業と関係して營まれているはずである。寺院の特徴の一つは、社会編成や村落生活との関係で意味をもつ、その立地であろう。さらには、寺院は、近隣地域の住民社会では完結しない広域世界との関係、つまり交通や巡礼を媒介とした、美濃・飛騨にとどまらない外部世界との関係がある。以上のことを見頭に置きたい。

1 さまざまな文献

古代仏教は、東アジア世界における列島社会の国家形成と不可分の権力事業として導入されたので、

その拠点たる寺院は自然発生的な信仰拠点というよりも、国家統治の政治主体が設定する権威的な新結集施設であり、地方では地元統治の政治的地位をめぐる競合が寺院建立として表れることがあった。美濃・飛騨においても、主に7世紀後半から本格化する寺院建立は、郡衙と一体の弥勒寺跡が地元豪族の政治的地位と関係したらしいことなど、その典型事例である。8世紀半ば以降に建設された両国の国分寺・国分尼寺が国府・官道と一体の平地に営まれたことも、全国一律の動向に沿う例である。ほぼ同時に山寺が営まれはじめているが、国境や郡境との関係が意識されたのかもしれない。それは、平地を基盤とする律令制支配にとっての盲点たる山林地帯に対して、領域支配を不可欠とする国家の前衛拠点として置かれた外来宗教施設だった可能性がある。9、10世紀は、律令制の変質過程であると同時に統治制度の再編成が試みられる時代だが、地方ならぬ地域の住民による生活基盤に組み込まれた寺院を見いだすのはなおむつかしい。

地域に不可欠の拠点に位置づけられた寺院が明確に出現するのは、11世紀後半頃からである。郡司や在庁官人の行政職を求めて実力支配を築こうとする領主が営む氏寺がある一方、新興豪族による婚姻と地縁の関係を介した結集を意図して、いわば没世俗の仏教寺院が世俗社会の砦となる。そのことをうかがわせる代表例は、武儀郡洞戸町（関市洞戸高賀）^{れんげ ぶじ}蓮華峯寺の菩薩像にある天治元年（1124）の像内墨書きである¹⁾。なお蓮華峯寺については報告書第3分冊に、地形観察図とともに掲載されている（寺院番号05186b）。

文字配列等は『岐阜県史』にゆだねるが、内部背面には、「天治元年歲次甲辰歲八月四日奉造顕口」と記すほか、人名が列記されている。その人名には、異姓間または同姓間の夫婦が多い。唯一上段に記される「僧良朝山氏」は、寺僧にして仏像の開眼導師たる僧良朝が山氏の出身者であるという可能性もあるが、通常の記載方法から判断すれば、僧良朝と山氏出身女性が夫婦であることを意味する（山氏は古代の山辺氏。延暦四（785）年五月改姓、『続日本紀』）。このほか、高橋清末と家女（同氏出身の妻）、語清元（夫）と額田氏（妻）、高橋安行と藤原氏、高橋安恒と尼口口、僧口口と家女、高橋口口と重

原氏、という夫婦がいる。僧珍口と尼妙口も1行に列記されており、夫婦かもしれない。他に額田氏が見え、判読不明の墨痕もある。この例は、蓮華峯寺に残る古仏の一体であり、本尊ではなく、本来の安置寺院は不詳とすべきであるが、語氏について、「語部美濃七人」（『延喜式』卷七践祚大嘗祭）と



図38 蓮華峯寺觀音菩薩像
(丸尾彰三郎編 1972『日本彫刻史基礎資料修正 造像銘記篇 第2巻』中央公論美術出版から転載)

の関係を想定すれば、ほぼこの地の仏像だと考えてよかろう。ここには、山氏、高橋氏、語氏、額田氏、藤原氏の男女が婚姻関係でつながり、さらに新仏に結縁することで地縁を形成しようとしているらしい。僧や尼も婚姻関係にあるようで、それぞれは山氏以下の氏族出身に違いない。一族から出家者を出しつつ、寺院を拠点に据えて、地域づくりに踏み切っているのである。ここには地名が記されていないが、地方行政区画よりも実質的な地縁範囲を念頭に置く意識があつたのかもしれない。

また、よく認識しておきたいことは、この観音菩薩像をまつった寺院は、その本堂や伽藍、境内といった宗教空間の重要性を前提としつつも、近隣外部に広がる世俗空間と一体であったことである。ここでは、地域の住人構成や領域範囲などを知ることはできないが、現実的に寺院を支えた主体が伽藍の外に住んでいたことは確かである。古代寺院に備わる伽藍内の僧坊とは違い、中世寺院の場合、地元出身僧尼が住む院坊、それらの出身母体としての近隣地域、という姿が想像される。

12世紀の別の事例として、瑞浪市の桜堂（法明寺）を見たい（報告書第4分冊、地形観察図あり、寺院番号08033、08033b）。この事例は、成立契機としては中央の政治権力との関係が強い。桜堂に関しては、笛山遺跡（桜堂経塚）が知られているが、和歌山県那智大社の経塚から出土した銅鑄製經筒（東京国立博物館保管）には、法明寺に関連する次のような保元元（1156）年の銘文がある²⁾。

美濃國土岐郡延勝寺御庄

洲田郷法明寺

八部如法経樓一口有縁無縁

出離生死頓証菩提為也

保元元年九月廿二日

取筆僧道西

莊嚴結縁衆

物部守貞秦氏

ここに見える「法明寺」は後にいう桜堂のことである。「洲田郷」に関しては、桜堂所在地の瑞浪市土岐町の周辺が津田郷と呼ばれていたという³⁾。「延勝寺」は、久安5年（1149）に平安京の東に接する白河に建設された近衛天皇御願寺である。「美濃國土岐郡延勝寺御庄」とは、御願寺延勝寺を経済的に支える美濃國土岐郡の荘園、という意味である。荘号は地元地名ではない。その荘園にある「洲田郷」は、郡の下位行政区という意味もあるが、むしろ新たな生活領域を制度的に囲い込んだ地域のことであろう。その中核に「法明寺」が営まれており、この経筒はそのような寺院の成立を記念している可能性がある。保元元年9月22日は、この経筒を法明寺で供養した日、または那智経塚に埋納した日、いずれかであるが、いずれにしても法明寺で供養されたと考えられる。

「取筆僧道西」は埋納する『法華経』を法明寺で書写した僧、「莊嚴結縁衆」は法明寺僧を中心とした地縁で結びついた地元在住者たち、「物部守貞」とその妻「秦氏」は地元代表者、ということであろう。物部守貞夫婦の背後にいる住民の姿が見えにくい点は、中央権力との強い関係で成立したという事情のあらわれであろう。ただしその後の寺院としての展開は、住民の主体性いかんによつたはずである。



図39 瑞浪市桜堂（法明寺）鳥瞰図（南西から、瑞浪市教育委員会提供図に加筆）

この報告書で示された考古学の膨大な成果から学ぶ際、文献史学では『岐阜県史 史料編』をはじめとする史料集で紹介された古文書や金石文などをも参照し、より実態に近づきたくなる。しかし文献で知りうる寺院数は、確認された寺院遺跡に比べてずっと少ないうえ、文献の残存様態は著しく偏在しているという当面の制約がある。ただ、そのような条件を改善する方法の一つとして、主に寺院で生成した仏書、つまり經典やその注釈書、儀式次第、伝授書類などを、歴史史料として見直し、探査することが有効である。すでに古代・中世史研究では定着している方法であるが、膨大に伝来する仏書の所蔵状態や全貌はまだまだ不明で、個別の寺院について調査未着手であることが多い。『岐阜県史 史料編 古代中世二』には、經典奥書などをよく載せていて、今日の研究段階でも重要な頼りである。また個別にも、『可児市史調査報告書 第1集 薬王寺の一仏像・建築・大般若経』のように、総合調査の一部として『大般若経』の悉皆調査に取り組まれた成果もある⁴⁾。この点、文献史学として努力を傾ける課題が大きい。そのような調査・研究に展望を与える例として、ここでは恵那郡飯高寺の12世紀代の一文献に注目したい。

いいだかでら まんじょうじ
飯高寺（萬勝寺、飯高觀音）は、千手觀音を本尊とする天台宗寺院であり、報告書第4分冊にも地形観察図とともに記述があるが（寺院番号 10015）、寺院所蔵の古代・中世の文献については知られていない。しかし寺外の文献で、これまで目立たなかつたが、『群馬県史 資料編5』に収載された、応安4年（1371）書写の「胎藏界灌頂隨要記」（千葉県香取市徳星寺蔵）の奥書がある⁵⁾。この密教書には、天承2年（1133）以来代々の天台宗僧間で伝受されてきた経路が書き連ねられている。その伝授経路は、延暦寺東塔→尾張国小牧北持堂→「美州恵奈飯高寺」→常陸国下津間御荘内八幡宮→上野国新田莊世良田山長樂寺というものである。飯高寺にこの書物が伝わったのは、永万元年（1165）に実豪が書写したからだという⁶⁾。この時代、都では後白河院政下で平清盛が台頭する政治体制下に

あり、荘園制を基礎とする社会構造のもとで寺社勢力の動きも活発である。飯高寺は、国衙行政下にあった古代由来の山寺が浮沈の渦中にある中で、中世山寺に転生したのかかもしれない。その場合、寺院所在地の小世界だけではなく、寺院間の広域世界とのつながりが、新時代を乗り切る上で有効な活動内容になっているらしい。「胎藏界灌頂隨要記」なる一仏書が伝える史実の意味は大きい。今後の調査、研究の課題を考えるための重要な事例であろう。

2 寺院と社会

仏書という文献から、世俗の社会との関係で寺院を位置づける、という文献史学の方法がある。たとえば各地で書写された『大般若経』600卷など、その奥書には寺院名とともにその所在地名が記される場合がある。ここでは精緻なデータ整理はできないが、中世以前の寺院を社会との関係で理解する一方法として、概観してみたい。

仏書の末尾に奥書を記す際、書写した寺院や納入する寺院の名を、所在地名とともに書き加えることがある。記載方法はまちまちであり、書かれていらない場合の方が多いが、ある程度は史料として拾うことができる。ここでは、美濃と飛騨の寺院について、国・郡という行政単位よりも下位の「庄(荘)」「郷」、さらにはより生活世界に近いと推定される「村」を伴う史料に注目する。「庄」(荘園)は権門領主による支配の単位として国衙領から切り取られたもので、住民の生活単位を意味していないが、支配と被支配の制度的な接点として、地元生活者を規制する仕組みとして無視できない。「郷」は国衙領内の行政単位として「庄」と似た意味をもつが、もとの郷や荘の内部に形成された「さと」である場合もある。それは「村」にも近い。「村」の場合も、大小さまざまな実態のなかには、支配の単位である場合があり、必ずしも住民の生活にそくして自立的に形成された世界とは言い切れない。しかしながら、古代からの歴史的な由来を想像しつつ、生活上の結合体としての意味が浮上する基礎単位が「村」と表現されることを思えば、その存在意義は軽視できない⁷⁾。歴史的主体としての住民にそくして地域史を復元する場合、もっとも重要な小社会である。それらに関する史料は、古文書や古記録など一般的の文献にも散見されるが、意外なことに写経の奥書などに多く現れる。そのことは、中世社会を知る上での一般的な参考史料であるだけでなく、寺院の存在理由を探る上での重要史料であると認識すべきであろう。各地の寺院で『大般若経』などの仏書を書写、調達するに際して、有力権門寺院が貴族層や武家権力などから費用の一括提供を受ける場合とは違い、ほとんどは勧進や喜捨という理念で僧俗社会に協力を呼びかける方法が採られたことは、寺院が社会的存在であることの実態を示している。

以下、『岐阜県史 史料篇』などを手かがりに、実例を挙げる。所在地記載のある経典奥書の場合、同じ寺院に複数例がある場合は代表例を挙げる。ほかに金石文も加えた。なお、記事に見える寺院と、その経典の所蔵寺院が同一とは限らない。ここでは記事に注目する。旧字等を新字体に直し、改行を追いかむなど、適宜加工した。またここで取りあげた寺院について、報告書に記載箇所を指示するため、例として第1分冊・寺院番号01009の場合、〔1・01009〕のように記し、地形観察図等がある場合はその旨を記す。

【美濃国】

〈山縣郡〉

1 三輪真長寺 [1・01009] 地形観察図あり

于時延文第五庚子沽洗下旬之候、於濃州山縣郡富永庄三輪真長寺東幾坊側、雖為惡筆、為偏興隆仏法祖師滅応、來世德遇、二世得脱、如形書之、願以書写劫、慈尊待出世、必定得值遇、法界為普利、(武儀郡・恵利寺藏『大般若經』201)

2 八月之觀音堂 [1・15121]

(池ノ間第一・二区)「奉寄進鐘一口、美濃州山縣郡蘿口(原)之上村八月之觀音堂 (後略)」(池ノ間第四区)「明徳二年辛未十月二十一日、大願主道円、藤木稻木十六人之講衆等敬白」(山縣郡・八月堂藏半鐘陰刻銘)

〈各務郡〉

3 宝藏庵 [1・13093]

于時永和二二年正月十四日、書了、美濃国鵜沼庄宝藏庵、肥前国彼杵庄波佐見、新熊野山乘戒坊、雖惡筆、為未來結縁之、書写了、筆者成空之成季二十三 (揖斐郡・横蔵寺藏『大般若經』44)

4 ■福寺 [各務原市那加町、未記載]

正安四年大歲壬寅陸月十七日申尅書畢、本備後國神石郡草木保住、今美濃國弓削田庄柒田住侶僧道源、為二親一仏淨土、殊法界平等利益、所書写如件 (郡上郡新宮神社藏『大般若經』410)

正安四年大歲壬寅五月九日酉時書写畢、美州弓削田庄柒田■福寺住侶僧道源 (同 510)

5 願成寺 [1・01026]

美濃国各務郡大洞村如意山願成寺之御本堂、頗奉造進子孫繁昌、所願成就之祈、南無大慈大悲觀世音菩薩、長祿元丁丑年三月十八日 (後略) (岐阜市・願成寺藏寺号額墨書銘)

〈揖斐郡〉

6 極樂寺 [2・30102]

濃州揖斐庄極樂寺住人、右志者、五肥田沙弥淨仁、現世安穩後生善所成仏得道也、永徳二年壬戌三月日 (揖斐郡・横蔵寺藏『大般若經』130)

7 光明寺 [2・30010]

(右廻り)「小嶋庄河合光明寺」(左廻り)「大永二年壬午十月吉日 願主菊右馬 啓白」(揖斐郡・光明寺藏鰐口陰刻銘)

〈大野郡〉

8 見性庵 [揖斐郡揖斐川町小津、未記載]

応永卅三年丙午十二月二日、小津之郷見性庵之住持法心、此御経書之 (揖斐郡・洞泉寺藏『大般若經』304)

応永卅四年丁未五月十七日、美濃州大野郡岐禮庄小津之御経、筆者豊後国之山香郷祥光寺住僧法心是書也、歳二十一歳 (同上『大般若經』337)

9 薬師寺実相院 [2・31002] 地籍図あり

濃州大野郡衣斐郷南領家村堀鐘山薬師寺実相院縁起 (元亀元年、首題) (揖斐郡・実相院藏実相院縁起)

〈池田郡〉

10 藏王権現靈場 [2・02258] 地形観察図あり

御嵩藏王権現椎鐘事、右、於美濃国池田郡井頭郷御嵩藏王権現靈場、(中略) 明徳二二壬酉年三月十二日、(後略) (大垣市・明星輪寺藏梵鐘陰刻銘)

〈不破郡〉**11 菩提寺** [2・25003] 地形観察図あり

^{1 4 0 6} 応永十三年卯月廿一日、於濃州不破郡岩手郷菩提寺令書畢、沙門幸円 (山縣郡・蓮花寺藏『大般若經』415)

〈養老郡〉**12 莊福寺** [2・24082]

(前略) 濃州多芸庄安久郷有寺、曰莊福寺 (後略) (文明二年、養老郡・莊福寺藏骨藏器陰刻銘)

〈郡上郡〉**13 高賀山新宮岩屋** [3・19154] 地形観察図あり

^{1 3 0 2} 正安肆年卯月廿八日、於美濃国郡上郡加良庄高賀新宮岩屋書写了、執筆道源 (郡上郡新宮神社藏『大般若經』506)

高賀山巖新宮常住御経也、于時觀応三年壬辰六月五日、於氣良庄下保八幡宮辺庵室南面書写畢、右筆比丘壞惠 (同藏『菩薩瓔珞本葉經』卷下奥書)

14 安養寺 [3・19036]

^{1 3 3 7} 于時建武四年丁丑卯月廿五日未時書了、此経者、美濃国郡上郡氣良庄下保八幡宮施入経也、同庄中保安養寺菴屋東面於仏殿、雖為惡筆、為大乘結縁、如形所助筆仕也、後見人へ念佛十辺、阿闍梨良慶五十九歳 (益田郡・八幡神社藏『大般若經』419)

〈武儀郡〉**15 勝妙寺** [3・11053]

濃州武儀郡揖深庄、於勝妙寺洞菴南西邑、于時永和二年丙辰正月二十一日書写畢、幸尊 (揖斐郡・横藏寺藏『大般若經』一八九)

16 永安禪寺 [3・11012]

大日本國美濃州武義郡揖深莊碧雲山永安禪寺鴻鐘 ^{1 3 8 4} 至徳元年甲子季秋朔丙申晦日甲丑鑄之、住持比丘瑞延、大檀那源朝臣義行、大工葛木友宗 (美濃加茂市・龍安寺藏梵鐘陰刻銘)

17 恵利寺 [3・05068] 地形観察図あり

濃州武義郡むき庄跡部郷 慧利寺御経也、(年未詳、武儀郡恵利寺藏『大般若經』卷数未詳)

美濃武義郡武義庄尾前山恵利寺本堂、于時文明元年己丑九月十五日、願主中□ □ (同恵利寺藏『大般若經』櫃上蓋内側墨書銘)

18 新長谷寺 [3・05007]

^{1 4 2 5} 応永卅二年乙巳十一月七日、濃州武儀郡吉田郷新長谷寺円顔房書写畢、隆慶一校了、右筆淨順 (美濃市・大矢田神社藏『大般若經』10)

美野国武儀郡於吉田村新長谷寺書写畢 (同 213) (新長谷寺藏一切経奥書にも同様の記事が見える)

19 八幡山神宮寺 [3・05179] 大聖寺として地形観察図あり

(上蓋銘)「八幡山神宮寺常住也」、(身内底)「濃州武義郡西山口郷新宮寺八幡御輿飾箱、天正九年八月吉日」(武儀郡・八幡神社蔵神輿飾箱墨書銘)

20 薬師堂 [3・07011 曹源寺境内に移設]

(右廻り)「濃州武義群(ママ)牧郷垂井村薬師堂」、(左廻り)「于時永正三年九月吉日 願主敬白」(美濃市・真木倉神社蔵旗箱墨書銘)

〈可児郡〉

21 大通寺 [3・14016]

濃州中井戸莊戸立邑觀音坊大通寺什物、旨弘治元年乙卯十一月吉日(可児郡・大通寺蔵花瓶陰刻銘)

22 願興寺 [3・41001]

濃州可児郡小泉庄春木下郷大寺山願興寺、本願興次郎、左衛門太郎、天正十二年甲申十一月吉日、大工無鐵(御嵩町・願興寺蔵鰐口陰刻銘)

【飛騨国】

〈吉城郡〉

23 不動堂 [飛騨市古川町、未記載]

永享六年甲寅七月一日、飛州吉城郡古川郷北不動堂之公用也、願主等伊寺、仍於高屋藏雲香一溪老行年七十一歳、書之畢(吉城郡永昌寺蔵『大般若經』520)

24 十王堂 [5・03155]

古鐘銘曰、吉城郡荒木郷三日町 十王堂鐘 衆廿九人、偈曰、此界耳根聰、音声最有効、一聞觀自在、罪性本性空、時永正十一年甲戌十月晦 大工橘光吉(高山市・国分寺梵鐘陰刻銘、宝暦四年再鋤)

25 瑞岸禪寺 [5・17030]

飛州吉城郡高原郷殿村殿秀山瑞岸禪寺什物、現住喝山叟代、惟時 文祿三甲午稔八月良日、金龍子造(吉城郡・瑞岸寺蔵鑿鉢陰刻銘)

〈益田郡〉

26 円通禪寺 [5・20026]

此帙印写願主飛州益田郡萩原郷中櫓村願主堂□

旨応永第二乙亥十一月廿日謹誌之、施入円通禪寺常住(益田郡禪昌寺蔵『大般若經』40)

27 真乗寺 [5・20041]

元応二年庚申九月二日、於飛州益田郡中呂郷真乗寺書写畢、金資(益田郡八幡神社蔵『大般若經』502)

元亨二年壬戌十二月十一日、於飛騨国益田郡萩原郷中呂真乗(寺脱)書写、金資信慶(同 505)

以上の諸例は、古文書や古記録を博搜した上でのものではなく、あえて仏書と銘文から抽出したものである。寺院の什物は、古代・中世においても所蔵者が移動することが多い。『大般若經』など、もとのまとまりが解体され、別の寺社によって必要な部分が購入・補充されることがある。本格的な探査・研究は、まだまだ今後の課題であるが、以下では当面の関心に即した基礎的なことのみ確認しておく。

まずは荘園との関係である。1の「濃州山縣郡富永庄三輪真長寺」という場合、たまたま荘園内に真長寺があるというより、その支配領域と関係をもって存在することを明示していると見るべきであ

ろう。莊園領主や在地領主、地域住民など、寺院の設営や運営を後援した主体との関係はそれぞれ個別の事情を想定しなければならない。またこの事例にある「三輪」は莊園内部の地名だが（旧山県郡三輪村、現岐阜市三輪）、三輪郷や三輪村または三輪谷などであっても不思議ではなく、この例のように単位名称がつかない地名記載は一般的に多く見られ、その地の居住者に身近な名称だと考えられる。4の「美州弓削田庄柒田■福寺」という場合の「柒田」や、7の「小嶋庄河合光明寺」の「河合」も、同様の例である。8の「小津之郷見性庵」「大野郡岐禮庄小津之御經」というのは、岐禮庄の下部単位として小津（郷）に密着した見性庵の性質を推測させる（岐禮庄は揖斐川町谷汲岐礼、小津は同町小津）。12の「濃州多芸庄安久郷に寺有り、莊福寺という」（読み下し）や、17の「濃州武義郡むき庄跡部郷 慧利寺」も庄—郷—寺という表記であることに注意しておきたい。

15の「濃州武儀郡揖深庄、於勝妙寺洞菴南西邑」は、揖深庄にある勝妙寺の一角、洞菴に近い邑（村）で写経したと記されており、寺院と密着した地域社会の存在を彷彿とさせる。21の「濃州中井戸莊戸立邑觀音坊大通寺」は、莊園内の村名が記されている。22の「濃州可児郡小泉庄春木下郷大寺山願興寺」の場合、小泉庄にある春木下郷は、村の性質をもっていたかもしれない。

次に国衙領（公領）内についてである。9の「大野郡衣斐郷南領家村堀鐘山薬師寺」は、国衙領としての郡郷の内部にある南領家村に薬師寺が位置づけられている。20の「濃州武義群（ママ）牧郷垂井村薬師堂」の「垂井村」、25の「飛州吉城郡高原郷殿村殿秀山瑞岸禪寺」の「殿村」、26の「飛州益田郡萩原郷中櫛村願主堂口」（円通禪寺）の「中櫛村」なども、郷の下位にある村名を記すことに意味があったのであろう。18の「濃州武儀郡吉田郷新長谷寺」「美野国武儀郡於吉田村新長谷寺」のように、郷と村が同じ実態であるらしい例にも注意したい。なお10の「美濃国池田郡井頭郷御嵩藏王權現靈場」の「御嵩」は、莊園内に見られるのと同じく、単位名称の付かない地域名称であり、村なのかもしれない。

ここまで、寺院が莊園公領内に定置されていたことを理解しようと努めた。特に支配単位としての莊郷の内部にある住民の生活世界との接点として、村名またはその実質の存在が想定できる地名に注目した。ただこれまで、仏書の奥書などに見える記事は、寺院の所在地を示す便宜上の表記と見なされてきた節があり、寺院と社会との関係を考察する手がかりとして理解されてこなかったように思われる。しかし本来寺院は、孤絶の自己完結した存在ではなく、仏教知識に媒介されつつ外部世界との関係で位置づけられ、いわば社会的存在として歴史的に展開したのではなかろうか。個別具体的な実態を実証する課題は膨大にあるが、ここでは基本視角に関わることのみ追加したい。

16には「大日本國美濃州武義郡揖深莊碧雲山永安禪寺」とある。日本全体に位置づけているが、国名表記のさらに外の世界も想定されている。その明確な例は、「娑婆世界南瞻部州大日本國美濃州賀茂郡老梅山東香禪寺」（応永十六〈1409〉年書写『大放光仏華嚴經』20奥書、閔市・新長谷寺蔵）というもので、須弥山世界の一部にある人間世界（娑婆世界南瞻部州）に日本を位置づけている。日本では11世紀ごろから使われはじめた仏教的な世界認識の表現であり、事例は多い。まず確認したいのは、娑婆世界—日本—美濃国—賀茂郡—老梅山東香禪寺が一連のつながりであることである（『説無垢稱經』奥書には平賀郷に寺があるとする）。一寺院から見れば一本の線でのつながりだが、賀茂郡に複数寺院があるように、上位の単位は複数の下部単位を束ねていることになる。その全体が仏教世界であり、寺地だけのことではなく国郡郷などすべてを含んだ世界そのものである。つまり寺院はその末端

の信仰拠点である。問題はその末端であって、16 の安永禪寺の場合は、伊揖深庄内部の実質ある社会集団であり、村のような地縁社会の存在が典型例となるであろう。美濃・飛騨ではないが、「南閻浮提大日本国山蔭道丹後国管熊野郡佐野郷大治村円頓寺」（嘉応2年〈1170〉京都府熊野郡出土銅經筒銘、『経塚遺文』270）という例がある（南閻浮提と南瞻部州は同じ意味）。その場合、村と寺の関係については必ずしも一様でなくわかりにくいが、「南閻浮提日本國參河國中條郡柒寺村書畢」（建久8年〈1197〉愛知県豊川市出土紙本經奥書、『経塚遺文』352）のように、「寺村」⁸⁾というべき事例はその一体性を想像させる。また6の「濃州揖斐庄極樂寺住人」は、寺と住人との親密さをうかがわせる。一方、村という表記の内実は一様でなく、地名のみを記す例が多いことも念頭に置く必要がある。この点で、1の「富永庄三輪眞長寺」の「三輪」などにあらためて注目され、2の「蘿口（原）之上村八月之觀音堂」などの史料の重要性もわかる。

最後に、16の「大日本国美濃州武義郡揖深莊碧雲山永安禪寺」、17の「美濃武義郡武義庄尾前山恵利寺」、25の「飛州吉城郡高原郷殿村殿秀山瑞岸禪寺」にも注目したい。山号は、必ずしも山地の標高が基準ではなく、寺院はすべからく山寺であるがごとき称号である。その山寺も、実際に山腹や山上に営まれた場合を含めて、やはり歴史的に形成された仏教的世界に位置づけられている、ということであろう。

ただし、今日の研究段階では、なお確定的なことが言えない重要な課題がある。それは、古代の律令制や中世の荘園制が列島をくまなく掌握したわけではないことと関係する。寺院特に山寺を中心とする小世界こそ体制秩序によっては充分に把握できなかった重要な部分であり、しかも民衆生活の多様な現場であったらしい。荘園公領内にある寺院を含めて、水利をはじめとする山野河海の資源をめぐる立地など、個別事例の復元課題が多い。図面の多い報告書はこの課題にとっての重要な手がかりであり、今後さらに寺院近隣の生業地域をも視野に入れる研究への展望を感じられる。

なおこの項では、神社に残る仏書等の文献については触れていない。実際にはたとえば、白山神社（下呂町）所蔵『大般若經』411に「奉施入白山權現社 勸進沙門權律師定鏡、飛州益田郡和川之村人 同聖 定祐、応永廿五戊戌十一月 日」と見えるなど、この稿での関心からも重要な事例は多い。またこれも一例だが、祖師野八幡宮（下呂町）所蔵『大般若經』には、14の郡上郡氣良庄下保八幡宮施入經や27の益田郡萩原郷中呂真乘寺書写經が含まれている⁹⁾。神社調査への期待が湧く。

3 古代の伝承と中世の実像

報告書に網羅された諸寺院のデータを読み解く場合、やはり成立と変遷という歴史の視点が軸となるであろう。考古学が明らかにした遺構・遺物・環境などの物理的な証拠に、文献史学は手も足も出ない。ただ、寺院の成立と変遷を語る文献史料がある場合、考古学的事実との整合的な理解に苦慮する場合がある。その一因は、寺院史を記す文献に、後世の伝承を書面化したものや、伝承の反映とも言えない願望や主張が、有力者の事績や信仰上の奇跡とからめて誇大に書かれ、しかもそれらは「縁起」として正統づけられる場合が多いことがある。考えられた事実、思想上の事実そのものの重要性は揺るがないが、一方では史料批判によって歴史像を再構成することも不可欠である。特に寺院文献には、中世に書かれた古代の歴史が多い。それらは歴史を知る手がかりとして重要であるので、報告



図40 箍をもって巡礼する僧たち（13世紀半ばごろ）

(小松茂美編 1988『日本絵巻大成 26 西行物語絵巻』、中央公論社から転載) 国(文化庁保管)

書にも慎重さをもった記述がある。中世以降の縁起や伝承にみられる古代寺院像は、まずは語られた時代を起点に理解される必要がある。岐阜県域で確認された1,918か寺の古代・中世寺院について、文献からは十分に知り得ない場合が多いが、古文書・古記録さらには仏書にも目配りした個別研究の課題を念頭に置きつつ、古代の伝承と中世の実像ということに限って、一事例を概観してみたい。

揖斐郡揖斐川町の横蔵寺には、延暦24年（805）11月に最澄が記したという「両界山横蔵寺縁由」が伝えられている（以下では横蔵寺縁起と呼ぶ）。『岐阜県史 史料編 古代中世二』に翻刻があり、原本は室町時代末期の筆にかかるという注記が付されている。内容の概要は次の通りである。

さいじょう 最澄は延暦22年8月に比叡山延暦寺の本尊薬師如来を彫りだした木の切れ端でもう一体の像をつくり、「まい」に入れて安置すべき勝地を探し求めた。日暮れて人家のない地で宿所を求めてさまよったが、山中の三輪二郎と藤原助基なる老翁に宿を借りた。翌日出発しかけたところ、巖の上で横倒しになつた笈が微動だにしなかつた。そこで如来がこの地に祀るよう意思を示したものと理解し、仏が老翁の夢枕で示した地に堂宇を建て、横蔵寺と号した。その後、入唐していた最澄は、かつて玄奘三藏が西域の王より与えられたという薬師小像を唐僧道邃どうすいから授けられた。帰朝の後、笈に入れて諸国をめぐった最澄は、横蔵寺にたどり着いて、本尊の腹胎にこの薬師小像を納めた。

およそ以上の内容である。横蔵寺草創の歴史的事実は諸史料から総合的に検討されなければならないが、この縁起からは、中世末期の横蔵寺側による歴史意識という点での重要な史実が含まれている。最澄の宿泊を手助けした三輪二郎と藤原助基とは、縁起を書かせた時代の横蔵寺有力檀越の先祖という設定かもしれない。縁起の主体である最澄は、笈を背負って諸国の靈山を渡り歩く修行者、つまり中世末期の廻国聖、修驗行者、山伏などを彷彿とさせる。室町時代以降、靈山を廻る諸国一見の僧を冒頭に配する謡曲や狂言の曲は数多く生み出されている。その中には、宿を借りようとする廻国僧の姿について、謡曲「鶴飼」や狂言「地蔵舞」に典型例がある。廻国僧には、本山に組織されて活動

する山伏から、命ぎりぎりの乞食生活僧まで、さまざまな実態があつたらしく、各地の集落を訪ねて門付けの祈祷や厄払いなどで生計を得ていた。実際、大垣市の北方京水遺跡からは、土豪屋敷門前に掲げられたらしい明徳4(1393)年の禁制木簡が発見されており¹⁰⁾、そこには囉齋人と総称される行脚僧・高野聖・巡礼・薦被・乞食・商人といった往来者への顕著な警戒心が見られるが、それほど活動実態があつたことをよく示している。

しかも個々の廻国僧は、諸国の靈験寺院や靈験山寺、都の靈験所などへ巡礼して靈力を獲得することが不可欠であった。そして、寺院で祈祷札を購入して各地の門付け先で売り、逆に門付け先で靈地代参の注文を得て寺院に祈祷札を奉納する、という商人的な活動を行っていた。「笈」にはそのような商業行為に關係する物品が含まれていた。そして、そのような廻国僧を吸引し、その本山というべき根拠地として威容を誇った寺院が室町・戦国時代には多かった。西国三十三所觀音靈場に数えられる谷汲山華嚴寺もその代表例だが、地理的に近い両界山横藏寺も、そのような寺院としての活動を展開したらしい。横藏寺縁起は、寺院活動の拡がりを理解させる、大事な一例である。なお横藏寺について、報告書第2分冊には地形観察図とともに取りあげられている。

寺院を歴史的に位置づける場合、本稿の1、2で述べたような寺院所在地の社会との關係だけではなく、その外部社会からの来訪者を視野に入れる必要性に思ひいたる。廻国僧だけではなく、俗人の巡礼者も多い。分業や流通の担い手として、水陸交通路を活発に移動する商人・職人らもいた。平地の村落、水陸の交通拠点、谷々や郡界・国境をまたぐ山間の交通路、それらと寺院の立地は無関係ではない。しかも美濃・飛驒の自然地理的・人文地理的特徴は、この地の寺院を特徴づけたに違いない。この報告書に網羅されている諸寺院についても、人と寺院の結びつき、寺院間の結びつき、宗教者・巡礼者・村落住民の活動と願い、そういう全体背景との關係で眺めることで、より生きた歴史の遺産として魅力を増すに違いない。

注

- 1) 『岐阜県史 史料編 古代中世二』(1972年、岐阜県)は十一面觀音立像とし、『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代 造像 銘記篇 第2巻』(1972年、中央公論美術出版)は菩薩像とする。銘文は前者の翻刻によった。後者の解説を参考にした。
- 2) 関秀夫編『経塚遺文』(1985年、東京堂出版)。
- 3) 砂田晋司「櫻堂薬師の1200年」『櫻堂薬師1200年展』(2012年、瑞浪市陶磁資料館)。
- 4) 可児市史調査報告書第1集『薬王寺の一仏像・建築・大般若經』(2006年、可児市史編纂室)。
- 5) 『群馬県史 資料編5 中世1』(1978年、群馬県)。
- 6) この部分は、「永万元年乙酉十月八日於美州惠奈飯高寺以師匠本書了、師云此私記大原僧都御房之最後再治御記也云、實豪」、とある(一部表記を改めた)。
- 7) 大山喬平『日本中世のムラと神々』(2012年、岩波書店)、大山喬平・三枝暁子編『古代・中世の地域社会—「ムラの戸籍簿」の可能性—』(2018年、思文閣出版)。
- 8) 「寺村」については、服部光真「中世三河の寺社境内と村落」(前掲大山等編『古代・中世の地域社会』)参照。
- 9) 新井浩文「祖師野八幡宮所蔵大般若經奥書調査概報」(『文書館紀要』26、埼玉県立文書館、2013年)
- 10) 磯貝龍志「岐阜・北方京水遺跡」(『木簡研究』第41号、2019年)、岐阜県文化財保護センター『岐阜県文化財保護センター調査報告書148: 北方京水遺跡II第1分冊/第2分冊』(2021年)。